
Fortune-teller

marimo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fortune-teller

【Zコード】

N2027J

【作者名】

mariimo

【あらすじ】

表題の「Fortune-teller」とは占い師のこと。占い師を目指す女の子の恋と成長の物語

* * . * : . * . * . *

占い師を目指す高校生・月野真珠が、大学生の占い師見習い・東条尚毅と出会い、悩み、つまずき、様々なことがあっても、周りに助けられながら、成長していく話です。

登場人物（前書き）

著作権はmari-moにあります。無断転載禁止です

*あらすじを考えたのがかなり前なので、時代設定が古くなっています。

*この話は、フィクションです。名称が多数出でますが、架空のものです。占い内容や占い方法などが出でてくる場面もありますが、全て作者の想像ですので、実際のものとは異なります。

登場人物

登場人物

月野真珠

将来は音楽教師になると夢見ている高校生。

東条 尚毅

東条圭吾の息子。父親が有名占い師で、母親はお金持ちの実業家。付き合ってきた女性の数が多い。占い師名、東条力ロン。

かがり
くに

東北の生まれらしい。
現在は国立大学で勉強中。
真面目で誠実、
真珠のあこがれの人。

月野 藍子

真珠の母。占い師をしている。占い師名、ローズマリームーン。

月野 輝子

真珠の姉。周りにうらやましがられる結婚を夢見て活動中。母親
のような結婚だけはしたくないと思つてゐる。

怜奈ちゃん

真珠の友達。かわいいからモテるけど、性格はさっぱりしている。

神宮寺

真珠の男友達。

サバト1（前書き）

著作権はmari-moにあります。無断転載禁止です

サバト1

「サバト」の占い師募集会場は熱気に包まれていた。あちこちで占っている。それを近くで何人かの人人が採点しているけれど、誰も笑いもしない。もっと、楽しくやればいいのにと思いながら、移動していた。

「えつと、どこだけ」と言いながら、私の番号の場所を探していった。渡された紙には、相談者ることは書かれていらない。時間が決まつていて、自分で相手に聞きながら占いを進める必要があるらしいと言ふことは、秋子さんから聞かされていた。彼女は「サバト」の情報をいくつか教えてくれた。日本で今、一番有名な占いの団体。代表の東条圭吾と言う人は、テレビに何度も出ているような有名占い師、日本で一番予約が取れない占い師としても有名だった。ただ、よほどのVIP以外は占わないと聞いている。そのため、何人もいる弟子が占いを行っているらしく、整理券を配っているぐらい人気があると聞いている。母が聞いたら怒り出しそうだ。母は昔テレビにも出てはいた。現在は雑誌に占いコーナーをいくつか持っているけれど、昔より注目されていないらしく、お客様の数はそこまで多くない。昔、占いカフェをしていた時代もあつたけれど、今はしていらない。

途中で人が大勢いるところを通りかかった。若い女性が占つてもらっている。人ばかりだったので、占っている人のほうは良く見えなかつたけれど、若い男性のようだつた。珍しいな。「サバト占い師募集」に応募している人は女性が多く、年齢もバラバラではあつたけれど、若い人が目立つた。そこを通り過ぎてから、

「ああ、ここだ」と座ろうとしたら、相談者役の人人がもう座つて待つていた。相談者役はあらかじめ応募してきた人がくじ引きで決め

られている。名前も何も知らない人を占わないといけない。制限時間が決まっているから、難しいなと思いながら、いつものように占つていた。

占い方法は自分の得意なものを披露する。中には変わったものもあるとは聞いているけれど、多くは西洋占星術やタロットに手相など、多くの人が知っている占い方を選択する。人によつてはタロットに西洋占星術など一人で複数の占いをこなす人もいるけれど、私はタロットしかできない。通り過ぎながらチラッと見たら、タロットの人も多かつた。タロットは大アルカナ、小アルカナのカードで占う。カードはそれぞれ名前がつけられており、それぞれ意味を持つている。その意味から解釈していく、様々なことを占う。

相手の悩み事を聞いて、占いを始める。じっくり聞きたいところだけれど、時間が少ないので、短い時間で手短に要点を抑えなくてはいけない。母の弟子である赤井秋子さん、占い師としての名前はルビームーン。彼女に母には内緒で特訓をしてもらっていた。ただ、時間がなくて、自信がつくほどは準備はできていなかつた。

サバト2

相手はそれほどはきはきしゃべるわけでもなく、なんだか自信がなさそうな人だった。悩み事は将来のこと。その方面に進んでいいかどうか。親や周りの反応が怖くて言い出せないと言つていたので、「親に相談しないと何も始まらないよ」と言いながらタロットカードを出して、相手にシャッフルしてもらつた。その間に、色々と聞いてみた。相手が望んでいる職業を聞いたら、意外にも、「テレビに出たいです」と言つたので、さすがに驚いた。どう見ても、テレビ向きの性格をしていない。

「え、でも」と考えてから、さすがに思つたことを口にできなかつたので、

「どういう形で?」と聞いた。

「えつと、何でも、でも、できれば歌手か、女優になりたくて」「歌手か女優?」はつきりしないなあ。どちらか決めてないのか。「どちらが希望?」

「えつと、有名になれるなら、それで」うーん、困つた。時々、母や秋さんの相談相手もこういうことを言う。願い事が漠然としきている。夢を叶えるにしろ、本人も良くわかっていない状態だつた。私もそういう職業にあこがれた時期はあつた。芸能人の話やテレビ業界の話をするのが大好きな友達が何人かいたので、この人も同じかなと思った。年齢は私とそれほど離れていなさそうだ。

「今、いくつ?」

「え?」相手が緊張していて聞こえてないのかな?と思い、「年齢は?」

「えつと、16です」

「オーディションとかは受けてるの?」友達が何人か遊び感覚でオーディションに応募していた。その話を思い出して、ふと聞いてみ

た。

「えっと、まだ」うーん、あまり良く知らない業界の話なので、困ってしまった。恋愛相談のショミレーションはいくつか、秋さんに教えてもらつたけど、まさか、こうこうことを聞かれるとは。一番苦手な相談事だな。

「とにかく、占つてみましようか」最初誰もそばにいなかつたのに、いつの間にか誰か後ろにいたけれど、気にしないことにした。占うときは集中力を使うからだ。

「今の気持ち。漠然としてる。まだまだ、迷いが多い。周りの人の反応。話は聞いてくれるけど、応援してくれる人はまだいない状態。親のほうは、あ、駄目だ」と言つてしまつてから、ああ、こういう言葉遣いはしてはいけないんだつたと思い出した。友達にせがまれて、何度も占つている。普段の言葉遣いはお客様用ではないので、もっと丁寧にするようには注意を受けたけれど、中々直らなかつた。

「親はね。あなたの希望を」とく反対するよ」と言つた途端、相手が元気がなくなつた。正直に言わないほうが良かつたかも。

「ああ、でも、地道に頑張れば、それなりに道は開けるかもしれない。あ、でも」と言つてから、迷つてしまつた。いくつかの注意点を挙げて、出たカードの言葉を伝えた後、

「この願いがかなう可能性は20パーセント未満」と言つた途端、周りが少しづわめいたので、そちらを見たら、審査をしている人が何かを書き入れていてるところで、そのすぐ横で、

「下手な人ね。あなたと大違ひね」と言つた若い女性がいて、隣にいた背の高い男性を見上げていた。見たところ恋人同士なんだろうなと思つたけれど、相手が私の顔を見た後、少し笑つた。小ばかにしている雰囲気だったので、気に入らなかつたけれど、「あなたの願いを叶えるには、かなりの障害がある。どちらに進むかはあなたの気持ちしだいだよ」と付け足したら、

「そうですか」とうなだれていた。失敗したかもしれないなど後悔した。

発表が行われていて、周りが騒いでいた。絶対に入りたいという人が多く、少しでも前に出たいのか押し合っていたけれど、私はその後ろで、なんだか疲れてしまった。

「余裕だね」と女の子の声が聞こえた。そちらを見たら、さつきのカップルだった。なんだかそばにいたくなくて離れようとしたら、「結果を聞かなくてもいいのか」と言う声が聞こえて見たら、かつこつけた態度のさつきの背の高い男がこちらを見ていた。

「悪くなかったけど、言葉遣いは悪いし、相手とのやり取りもお粗末。ここに来れるレベルじゃないね」と言われて、思わずにらんだ。

「あなたねえ」

「失礼な子ね。あなたにそういう態度をしてね。ねえ、あなたの正体知つたら、そんな態度取れないわよねえ」相手の女の子の態度を見て、怒りたかったけど、さすがに場所を考えて我慢した。

「ねえ、尚毅^{なおき}」甘えるように女の子が聞いて。

「受かるのは尚毅だけよ

「どうして？」

「だって、尚毅は東条圭吾の息子だものね」

「やめろ」尚毅と呼ばれた人は止めていたけれど、

「ふーん」と見てから、そこから逃げ出した。親の口ネで受かる人とは関わりたくなかつた。そういう人は苦手。違うクラスの女の子が親が有力者だから、PTA会長をしているからと言う理由で、何かと威張つている。でも、綺麗な子だから、周りはちやほやしている。そういう雰囲気が苦手で、わたしはそばに寄つていない。私のことも呼び出して占いをさせようとした。命令口調で言われたために、嫌でしようがなくて、そんな気持ちでは占えるはずもなく逃げ出したけれど、後で、「この私を占える自信がないからよ」と言つていたらしい。「何様のつもりなんだろう」と友達が怒つてくれた

けれど、私はそれより近寄りたくもなかつた。その雰囲気にそつくりのさつきの男は一番苦手な男だ。有名占い師の息子だかなんだか知らないけど、今後、一度と会わないとことを願おうと思つた。

サバト4

「落ち込む」友達の怜奈ちゃんに笑われた。

「多分、無理だと言われてたんでしょ」秋さんにそう忠告はされた。それぐらい、入る人数は少ない。毎年、一人か一人。その一人があの嫌味な男だと思うと面白くない。親のコネ男。

「いいじゃないの。どうせ、世の中そんなものだつて。親のコネ、有力者とのつながり。有名大学に進学したつて、そこでもコネだつて。いとこの医学生が言ってたよ」

「雪人さんは違うもの」

「はいはい、あこがれの大学生でしょ。はやくデートに誘いなさいよ」

「無理だよ。勉強でいそがしそうで」

「それでもデートはできるでしょ。それだから進展しないのよ。自分から行かないよ」

「でも、真面目な人だから、どう誘つたらいいか」

「迷っているうちに卒業しちゃうよ」

「そう言われても」

「ちゃんと告白しないとね。好きだったら
「言えないよ」

「男子の友達だって何人かいるでしょ。それと同じよ。みんな、かぼちゃかジャガイモと思えば緊張しないよ」

「怜奈ちゃん。かわいい顔をしてそういうことを言わないで」怜奈ちゃんはかわいいのでモテるけど、実態を知られるとうまくいかなくなる。

「いいなあ、恋愛遍歴が派手で」

「それはしようがないって、真珠は説えない

「どうして?」

「見透かされそうで怖いってさ。男子が言つてた」

「なんで？」

「抜け抜けな性格なのに、妙に勘がいいから。しかも占い師の娘。
それで、さすがに誘えないって。浮気がバレるだらうしつてさ」
「抜け抜けの性格つて何よ」と言い合っていたら、神宮寺に背中を
叩かれて、

「遅刻するなよ」と言われて、先に歩いて行ってしまった。

「痛いなあ。あいつ、乱暴」

「氣があるみたいだよ。そう聞いたから」

「またかね」

「真珠はそういうのを信じないねえ。ガードが固い」

「固くない」

「好きな人に

設定

「そんなに器用なことはできない」

「全部に手がけたら、変なまで来ちゃうがねー

「かわいいからって、余裕だね

「うーん、どうも、おまえの仕事は、おまえの仕事だ。」

「物二〇」、アリスの物語

「豆期」で2

「震災」

增補卷之六

通志

モーフィー

いししゃない付合はせやうは

「向で、そりゃ、安易に薦めてくれるの?」

免疫)止から本命に行ぐのせ懸念ないと思ひよ。それなり本命

גַּם־עַל־עֲדָמָה כְּבָשָׂר וְכָלָמִים

「真珠つて、結構ドジだし、鈍いところもあるしねえ。それだと男に幻滅されるよ。だから、慣れておかないと。一回目のデートの印

象で決まるんだからね」「え、 そうなの？」

「これから、 デートしたこともない子は困るね。 中学のときに免疫をつけておけば良かつたね」「そう言われても」

「数こなせば、 本命のときに楽だよ」「怜奈ちゃん。 こなれすぎ」

「その分だと、 まだまだ先にならうだね」「なにが？」

「恋愛成就。 人のことを占つてゐる場合じゃないでしょ」「そう言われてもねえ」

「第一希望に振られたからって、 次を探せばいいでしょ」「第一希望？」

「就職先」

「違うよ。 修行先。 知り合いの占い師の子供があそこを受けるって聞いたから、 行つてみただけ。 受かると思つてなかつたし。 でも、 厳しかつた。 みんな、 上手だつた」

「感心してゐる場合じゃないでしょ。 高校卒業したら、 占い師として身を立てるんでしょう」

「そこまでは、 ただ、 みんなに向いてるって言われたし」「安易だね。 自分で決めたんじゃないの？」

「成績だって、 いまいちだしねえ。 進学するにはお金がなさそうなんだよね、 うち」「占い師つて、 よほどもつからないんだ？」

「ピンきりらしいよ。 儲かる人もいれば、 貧乏な人もいるつて」「真珠のお母さんつて、 そこそこ売れてるんでしょ」

「ちょっと今までね。 東条圭吾がテレビに出だしてから、 お客様が減つたとぼやいていたから」

「私も名前を知つてゐるぐらいだしねえ。 クラスマイトも何人かあそこの遊びに行つたらしいよ」

「占いは遊びじゃなこよ」

「それぐらい気楽に行つてゐるヒトとどしま」

「でもねえ」

「どうして落ちたのかは考えておいたほつがこいよ。それから、新

しい就職先を決めたら」

「修行先だつてば」と言しながらためいきをついた。

落ちた理由①（前書き）

- * あらすじを考えたのがかなり前なので、時代設定が古くなっています。
- * この話は、フィクションです。名称が多数出でますが、架空のものです。占い内容や占い方法などが出てくる場面もありますが、全て作者の想像ですので、実際のものとは異なります。

落ちた理由1

秋子さんに教えてもらった占い専門店「ルーカス」で、本を調べていた。すっかりなじみになっているため、

「何を調べてるんだ?」店のおじさんに聞かれた。おじさんは趣味が高じて、こうやって占い関係のお店を開いているけれど、元々は違う職業だったらしくて、占いは好きだけど、占い師をしていたわけじゃなく、見習いの私のことも心配してくれていた。今日、来た理由を教えたら、

「あそこは難しいだろうねえ。何人か受けた人の話は聞いたよ。受かつた人は女性が多いそうだ」

「女性?」

「そう、しかも美人でかわいい子だそうだ。若い人が多いと聞いているよ」完全に自分の趣味じゃない。そう考えていたら、お店に誰か入つて來た。

「あ?」と思わず声が出た。その声に気づいて、相手がこちらを見た。

「何だ、お前か」お前呼ばわりされて、むつとなり。

「コネ合格者が何か言つてる」とつい、言つてしまつたら、

「コネじゃない。実力だ」

「ふーん、女性が多い職場に今年は男性が一人だけ合格つて、コネでしょ」

「誤解だ。俺は実力で合格したんだよ」

「嘘ばっかり。コネで就職して、そうやつて女性と知り合つ機会を増やそうとして」この間とは違う女性が隣にいたので、つい、そう言つてしまつた。今度もなれなれしい態度でそばに寄り添つていて、どう見ても恋人同士に見えた。いつたい、何人の女と付き合つてるか分かったものじゃないな。学校にいる、評判が両極端の男子、大村君を思い出した。彼は女に手が早くて有名だつた。ポイ捨てばか

りしているために、私はあまり好きじゃなかった。

「逆だ」逆？「何が、逆よ」と言いたかつたけれど、関わりたくないくて、

「話しかけないで」とおじさんのはうに顔を戻した。

「あそこに合格しなくて良かつた。こんなやつと顔を合わせなくて済んだから」

「お前では無理」勝手に口を挟んできて、相手にしたくなくて無視していたら、

「真珠ちゃん、この人？」おじさんに聞かれて、

「東条圭吾の息子。サバトのコネ合格者」

「コネじゃない」と言い合っていたら、

「失礼な人ねえ。ほつといて行きましょうよ」そばの女性が甘えていて、

「ああ、あの有名な人か」おじさんはぐく普通にしていた。

「お前、自分が落ちたからって、おれにやっかむな」

「そんな理由じゃない。あなたみたいな人が嫌いなだけ」

「表面だけ見る女だから落ちるんだよ」

「あなただって、同じでしょ」

「俺の占いしていたところは見てないだろ」

「軽く見た」多分、人だかりになつていたところだらうと検討をつけてそう言った。そこまで確信はなかつた。

「見てないな。そばにいなかつたはずだから」

「何で知ってるのよ？」

「商売柄、顔を覚えるのは基本」

「ふーん」

「お前が落ちた理由、教えてやろうつか」

「何が分かるつていうのよ」

「お前は基本が全部なつてない」

「基本つて？」

「接客態度がまず駄目。言葉遣いが丁寧じゃない。ため口で話してどうするんだよ。友達じゃないんだしね。それから、相手のことが全然分かつてないな。あれじゃあ、気落ちして帰ってしまう。だから、落ちた」自分でも落ち込んでいたのに、こいつに指摘されて面白くなくて、

「ふん」と横を向いた。

「相手の立場も分かつてないし、望みも分かつてない。しかも、世間知らずもいいところ。相手に見当違ひな事を聞いて、どうするんだよ」自分でもそこは未熟だつたなと反省はしていただけれど、こいつにだけは言われたくなかったので、

「あ、そう」とそつけなく横を向いていた。

「最後のもおかしいだろ。何が20パーセントだ。他の占い師は誰もそんな結果は言わないぞ。数字で表せるような内容じやなかつた」「だつて、それはそう思つたから

「思つた?」

「カードじゃなくて、彼女を見て、そう思つたの」と言つたら、相手が黙つた。

「相談者を見てそう思つたんだから、いいじやない。カード結果をどう膨らませるかは、占い師が考へることでしよう」

「経験不足のお前には言われたくないな。もつと、よく考えろよ。あれでは合格基準が90だとすると、20も行けばいいところだ。あれで、よく受ける気になつたよな」

「コネの人と言われたくない」

「「コネじゃないさ。しょうがないな。教えてやるよ。お前の未熟さをね」と言われて、驚いていたら、いきなり腕をつかんでき、「行くぞ」と言つたので、

「え、わたしは?」隣にいた女性が怒り出して、

「悪いけど、また、連絡するよ。急用ができたから」優しく声をかけていた。一重人格に違いないなと思った。

落ちた理由2

「どに行くのよ」車に乗せられてから、聞いた。
「付いてくればわかる」
「女性受けしそうな車」思わず言つたら、
「あいにく、いうのを乗るよう親に言われているからね。それで、これ」占い師なのに高い車に乗っているのが面白くなくて、「ふーん、庶民から搾り取ったお金で乗ってるんだ」
「お前は相當に俺を誤解してる」
「さつきの女性は良かつたの？ 恋人なんじょ」
「違う。一度、食事をしようと誘われて、一緒にいただけ」とさつけなかつた。
「冷たい言い方ね。あつちはうれしそうだつたのに。まさかと思つけど、この間の人も恋人の一人なの？」
「ああ、彼女は見学したいって言つから、仕方なくね」その言葉もそつけなかつた。
「相手の女性が傷つきそう」
「そうでもないさ。ああいう人は別の人ができるなら、そちらに行ってしまうから」
「ふーん、冷めてるんだ」
「別に」
「占い師より、ナンパ師になつたほうがいいね」
「女性心理を勉強するには必要な課程だ」
「は？」
「お前も付き合つたほうがいいぞ。ああ、無理か。お前の場合は今まで彼氏がいなかつたタイプに見えるから」「勝手に決め付けないでよ」「じゃあ、いたのか？」
「い、いなけれど、それがどうしたのよ」

「ほらな。ただ、言い返すだけ。世間知らずもいいところだ。ちゃんと世間を知つてから、俺のことを言えよ。お前は何も分かつてないからな」

「あなた、いくつよ」

「大学生だよ。21」

「ふーん、年寄り」

「ガキが何か言つてるよな」

「失礼ねえ、これでも17歳よ」

「まだまだだよな」

「うるさいわねえ。いい就職先が決まって良かつたわね、せいぜい、いっぱい女性と付き合つて、遊べばいいんじゃないの。この車なら、いくらでも寄つてきそう」 値段は分からなければ、青い外国の車で、高いんだろうなってことは内装を見たら分かる。母が乗つている庶民の車とは大違ひだつた。占い師として成功するところというのにも乗れるんだなと驚いたけれど、正直、面白くなかった。

「遊びじゃないさ。資料集め」と訳の分からぬことを言つていたけれど、目的地に着いて、駐車場で警備員に止められて、相手に色々と説明をしていた。

「何で、テレビ局?」中に入つてから聞いた。駐車場では父親の名前を出して、電話で誰かに連絡を取つて入れてもらつていた。

「コネつて、すごいね」

「テレビ局に来たことはないのか?」

「ない」

「スタジオ観覧ぐらじしておけよ。占い師を田指すならね」「どうしてよ」

「占いにやつてくる女子高生の悩みに『芸能人になりたい』って言うのは、結構多いからな。知つておいたほうが何かといいさ。それによく占い師になるつもりでいるな。友達にでも聞けよ。業界の話でも、現実を知つたほうがいいし」

「現実？」と聞き返した。

東条さんが知り合いのテレビ局の人挨拶して、見学したいことを告げて、その後、一人で歩いていた。あちこちで知った顔がいた。有名な歌手やグラビアアイドルにお笑い芸人。頭をぺこぺこ下げていたり、誰か有力者が来たら、慌てて、「わあ、　さん」と声のトーンが明らかに高くなつて擦り寄つている光景を何度も見てしまつた。楽屋の入り口が空いていると、中で台本を読んでいたり、樂屋の外で、何か打ち合わせをしている人がいたり、色々だつた。

「忙しそう」

「そうでもないさ。待ち時間つていうのがあるし」

「東条さん、こうこうとこうに出入りするのは多いの」

「尚毅でいいさ。みんな、そう呼んでいるし」

「えー、呼びにくい。一応、年上だし」

「お前のほうが呼びにくい名前だる。珍しい名前だな」

「何で名前を知ってるの？　私はあなたのことは知らないのに興味があつたから調べただけ」

「興味？」

「あまりにお粗末な内容だつたけど、印象に残つたから、印象ねえ。
「真珠しんじゅつて、初めて聞いたよ。何で、その名前なんだ？」

「母がつけてくれたの。6月生まれだから誕生石の真珠。姉は4月生まれだから」

「ダイヤか？」

「誕生石がダイヤモンドだから、輝子。輝く子と書いて輝子」

「ふーん、変わつた親だな」

「占い師だから神秘的なことが好きらしくて」

「占い師の娘なのに、練習もせずに受けたのか」と驚いていた。

落ちた理由③

「母は東条圭吾のことは苦手みたい。だから、内緒で受けた」「時々やつかまれるよ。派手にしてるからって理由。自分でもやつてみてから言つてほしいね。結構、テレビや雑誌つて大変だと思つけどね」

「母も昔そういうのに出でたみたいだけ。今は雑誌だけみたい」「名前、なんだ?」「

「ローズマリームーン」と言つたら、怪訝な顔をした。

「昔じゃない。今も活動してるの」

「『ムーンフェイス』だけ? お店の名前。あそこはルビームーンのほうが有名だろ」ルビームーンである秋さんはネットで評判になつたことがある。占いサイトを立ち上げたときに、母はそういうのが苦手だから、秋さんに任せっきりだつた。秋さんは知り合いに頼んでサイトを作つてもらつていた。彼女は友達も多くて、割と美人なので男の人気がタダでやつてくれたらしい。「一度、飲んで、代金をチャラにしてもらった」と聞いていた。

「よく知つてるね」

「そういうことは一応把握しておく主義でね。お前はよほど疎うだな。雑誌や本とか読まなさそうだ。直感、靈感だけの占い師の域で終わるな」と言わされて、にらんだ。

「そういう顔をするな。今のお前はそのレベルだよ。よく見りよ。観察しろよ。こうこうとこりで生き延びるには、何が必要だと思つ?」と聞かれて見回した。

「え、なにがつて?」何と聞かれてもよくわからなかつた。あちこちで頭を下げる、話している光景しか目に入らなかつた。

「歌手だったら、どうしたら、デビューできるか、生き残れるかを聞いてるんだよ」と聞かれて、分からなかつたので、

「さあ、『コネ?』

「コネでデビューしたって、その後、売れなくなるケースなんて多數あるぞ。有名人の子供がデビューしたって実力がないと無理。それ以外にも色々必要だろ」「なにが?」

「まず、容姿、それから挨拶や先輩との人間関係。先輩に嫌われるか後々困るからね。力を持つている人に取り入るのも上手じゃないと」

「え、そうなの?」

「そういうのが優れてないと、すぐに干されちゃう。歌がうまくて、中々難しいからな。ただ、見抜く目を持ってない人の場合、遊ばれて終わるケースもあるけどな。女の子の場合は」「あなたと似たような人もいるだろ?」

「誤解だ」

「でも、とかえひつかえなんでしょう?」

「色々と勉強中」意味不明だなあと思ったけれど聞き返さなかつた。「こういうところも勉強していかないと無理なんだよ。いきなり、相手に相談されても、その事情を限られた時間で聞き出していかないといけないし、職業事情が一人一人違うから、そういう部分で知らないと相談になんてのれないだろ。『看護婦さんになりたいけど、どうしたらいいでしょう?』『先生になりたい、スポーツ選手になりたい』お前、どうやってアドバイスするつもりだ」「えっと、それは」さすがに言葉に困つて、

「ほらな。全然分かつてない。そういう職業事情を把握もしていない女に占つてもらつても、薄っぺらいだけ。一からやり直せよ。俺の

「ことをコネと言つ前にね」と言われて、しばらく言葉がなかつた。このいつの言つとおり、コネと馬鹿にできるほど、私は何も持つてい。何も知らないかもしれないなあ。とぼんやりしていた。

落ちた理由4

「言葉が少ないな」と東条尚毅に車に乗つてから言われて、かなり落ち込んでいたので、黙つてうつむいていた。

「元気がいいのは世間知らずだからかもな。言いたい放題言えるのも今のうちかもな。世間はそこまで甘くない。自分の未熟さを分かることで、人にとやかく言えなくなるね。学生だから許してもらつてるだけつてことに気づいてないからな」そのとおりかもしけなくて、かなり落ち込んでいて、

「これから勉強していけばいいだる。せめて、女性のなりたい職業の実態だけでも調べておけば。そこから、やつてけよ」

「あなたは知つてゐるの？」

「それなりに勉強中」

「どうやつて？」

「人に聞くんだよ」

「人？」

「本でも人でも調べたらいいだる。自分でね」そつけなく言われて、

「冷たい性格なんだ」

「わざわざテレビ局まで連れて行つて、教えてやつた恩人にその態度はないだろ」

「ごめん」と謝つたら、

「少しばかり素直なところもあるんだな。人のことを馬鹿にする前に自分を見直せよ。未熟な部分を直してから言えよ」

「あなたは未熟じやないつて言つの？」

「お前よりね」見下す言い方が気に食わなくて、そっぽを向いた。

「お前のその態度は目に余るな。サバトでは無理。一生無理かもな。素直な性格の子がいいね」

「歴代合格者つてそうなの？」

「自分の目で見て確かめたらいいだろ。それから言えよ」

「え、でも」サバトでの立候者が多く働いている、古いの館「プロキオン」には行つたことがない。誘われても断つていた。なんだか行きにくかった。母が東条圭吾を嫌つて「いる」とは分かつてゐるからだ。

車から降りて、お礼を言つた。

「ありがと」

「もつとよく勉強しろ。ガキの遊び場じやないからな」ちょっと見直したのに、その冷たい見下した言い方が気に入らなくて、

「一度と会わないでしきうけど、ありがと。あなたみたいな人はいつも女性に刺されるよ」

「モテてから言えよ。世間知らずなガキ」と言わされて、にらんでいたら、

「じゃあな」と行つてしまつた。家に帰つたら、

「あの車は誰?」と母が見ていたらしく聞いてきた。仕方ないので、本当のこと話をしたら、

「あの男に近づいては駄目よ。息子も同じ。世間で騒がれてるからつて、本が売れてるからつて、天狗になつてるだけの男よ。お金のほうが大事な男なのよ。そんな男が代表になつてるあんな変なところに所属なんてしなくともいいわ。他の団体にしなさい。それか、全然別の職業を選びなさい。堅いところに就職して」

「その話は聞き飽きた。お母さんだって、堅い職業のところでも人間関係で疲れきつてる人をいくらでも見てきたじゃない」と言つたら黙つたけど、母は何か思いついたらしくて、台所に行つてから戻つてきて、持つてきた塩の瓶を振つて塩を私に振りまいた。

「何してるの?」

「穢れを落としてるの。あんな男にだけは近づかないで、外にもましておかないと」と言つて、すごい剣幕で外でも塩をまいているのが目に入った。瓶から直接まくのではなく、塩を手に出してからまいたほうがいい氣がする。と思いながら呆れつつ、よほど、何か嫌なことでもあつたのかなと考えていた。

プロキオン1

朝、あこがれの雪人さんが出てくる時間に合わせて、私は「ミだしを日課にしていた。

「ああ、真珠ちゃん。朝から大変だね。お疲れ様」優しく穏やかに微笑んでいて、

「雪人さん、おはようございます」とびつきの笑顔を作つて挨拶した。国立大学に通つている大学生で、昨日会つた男とはあまりに違はずぎるなと思った。年も同じなのに、全然違う。少なくとも雪人は女性と遊んでいるようなところを見たところがない。毎日遅くまで大学に残つて研究をしていると聞いている。

「毎日、大変ですね」

「お互にね。がんばろうね」と優しく言つてくれて、とてもうれしかつた。

雪人さんが行つてしまつた後に、

「あれでは、将来苦労するだらうからやめておいたら」と冷めた声がした。姉がそばにいて、

「何してるの、お姉ちゃん」と聞いた。

「早朝デート」

「こんな朝早くに?」

「だつて、アピールしないと困るからね。今日だけね」と言つている意味が分からなくて、

「じゃあねえ」と、会社に行つてしまつた。姉は親戚に頼つて就職した。親戚と言つても母の両親は早くに事故で亡くなつていて、父はないので、母のおじさんの知り合い筋に頼んだ。

「お姉ちゃん、珍しく朝が早いよ」家に入つて母にぼやいたら、「ほつときなさい」と気がなさそうだった。母は朝が弱い。知り合いで誘われて飲みに行く機会も多いため、朝は遅く起きる。食事のしたくも苦手らしく、お弁当も作らない人なので、今は私が作つて

いる。その前までは父が、一緒に住んでいた大叔父さんが作ってくれた。父がいなくなる前は占いカフエをしていたけれど、母は家事は苦手なためにカフエの運営はできそうもないのに、今は占いだけをしている。占いスペースは作ってあるけれど、カフエだったころの名残が部屋のあちこちに残っている状態だ。内装を作り変えるお金なんて、家にはなかった。昨日の男の家とは違すぎる。価値観が違つて当然かもねえと思いながら、台所に行つた。

プロキオンの見学に怜奈ちゃんを誘つた。

「ねえ、一度行つたんでしょう」と怜奈ちゃんに聞かれて、前の会場はプロキオンではなくて、別の場所だったと教えた。

「ふうん。まあ、いいや、暇つぶしに一緒に行くのも面白いね」「怜奈ちゃん、相談」とつてあるの?」

「ないかも。あれこれ人に指図されたくないし」そうだった。怜奈ちゃんは、結構しつかり者で、さっぱりしてて、でも、かわいいために初対面の男子にはその性格はバレないことが多い。
「怜奈ちゃん、モテるし、成績は気にしてないし、結婚相手に苦労しそうもないものね。見た目つて、大事?」

「当然でしょ。真珠もかわいいほうなんだから、頑張りなよ」

「そう言われても、おこづかいなんて限られているし、バイト許可も家のものだけだし。そういう方面に回るお金がない」学校の規則でバイトをする場合は許可がいることになつてている。内緒でしている子も多いけど。

「ふうん。うちちは禁止されてるからなあ」怜奈ちゃんの家はそれなりに厳しいことを言わるらしい。お父さんがかなり心配しているようで、「変な男がいたら、どうする?」と言われるらしい。かわいいからそれで心配なようだ。実際に誰かに尾行されたこともあるようだ、

「怜奈ちゃん、その分、おこづかいもらえるならいいじゃない」「無理。門限も厳しいし、連絡しないとひるさい。知り合いの娘が

駆け落ち同棲したからって、それが私に何の関係がある」

「それで厳しくなるつて言うのが、いまいち分からないんだよね」
親は厳しくはなかつた。母は大雑把で家事も苦手で、父が色々と家事をしてくれて、カフュの運営もしていた。父のほうが私の世話をしてくれて、会話も多かつた。母は社交的で外に出て飲みに行くことも多くて、姉は母に似ていて家事一切をしない。掃除すらしたこともない。結婚相手はお金持ちだと決め込んでいるので「必要がない」と言い切つている。でも、今のところ、念願のお金持ち、将来性有望彼氏と長く続くようなことはないらしい。

「姉の努力なんて、すさまじいけど、どうしてうまくいかないんだろ。モテることはモテるんだって。ただし、金持ちじゃないと却下してるから、全滅だと言つてた」

「それはあるんじゃないの。相性の問題だから。真珠はそういう方面に詳しくないからねえ。もっと、恋愛に強くないと占い師として困らない?」この間の男にいわれたことを思い出してため息をついた。正直、行きたくはないけど、行つたほうがいいんだろうなと思いつながら歩いていた。あいつの言つたとおり、私はあいつのことをとやかくは言えない。わざわざ連れて行つてもうつたことも分かつてなくて、悔しくて言い返していただけだつたと反省した。

「ま、いいや。開き直ろう」とわざと明るく言つた。落ち込んだときの呪文だ。父がいなくなつたときにもそう言つて明るく振舞つた。姉はそれほど変化はなかつた。家事をしてくれる人がいなくなつたぐらいで受け止めていたようだ、明るいままだつた。父との交流がほとんどなかつた姉にとつてはそういうものなのかもしれないなど今では思つてはいるけれど、当時はかなり怒つていたけれど、そういうことは姉は軽く聞き流していた。母はかなり落ち込んでいて、しばらく占いができるほどで大叔父さんである、広大おじさんが何とかと支えていた。おじさんは今は東北で暮らしている。時々、便りがある程度で行つたことはない。

「ここじゃない?」怜奈ちゃんが言つたので、そちらを見たらおし

やれな感じのガラス張りのビルだつた。かなりの人数が並んでいる。

整理券を配り終えたらしくて、

「今日の分は終わりましたから、明日、おいでください」と女性が謝つていて、

「えー、せっかく、来たのに」女子高生らしい女の子たちがぼやいていたけれど、慣れているらしくて、何度も謝つた後、その人は行つてしまつて、受付のほうに移動した。

「あの、見学をさせてもらえませんか」と頼んだ。本当は占つてもらいたかったけど、それもできそむないので、そう頼んだ。

「は、見学ですか?」と相手が驚いていた。どう説明しようかなど考えていたら、

「きゃあ」と、悲鳴が上がつた。そちらを見たら、東条さんが来ていて、背が高いので女子高生の合間から顔が見えた。

「なんだろ、あれ」と怜奈ちゃんに聞かれて、

「えつと、あれが例の」と言つたら、

「ふーん、あの人にはめばいいんじゃないの?」と言われて、そう言われても声を掛けづらかつた。でも、あいつがこちらを見て、

「ああ、来たのか?」と言う声が聞こえた。仕方なく頭を下げた。

東条さんがそばに寄つてきて、

「なに、あの子?」そばに寄つていた女性たちがいつせいにぼやいていて、ちょっと嫌だつたけど、

「見学しに来ただけ」と答えた。

「ふーん」

「お知り合いですか?」受付の女性が聞いて、

「ああ、俺と同じだよ。見習いなんだ」と答えていた。

「見学させてもらえませんか? 嫌々ながらそう聞いたら、

「お前つて、正直だな。顔に出すな」と笑われた。「あなた以外ならこんな表情にならないわよ」と言いたくとも我慢をした。

「なら、お前も立ち会えよ。俺も占いするから」

「え? なんで?」

「見習い期間なんで、まだ、料金が低くめだけび予約客だけ受け付けてるからな。お前はやつてないのか？」

「やりされではいるけど、お情けで近所の人とか知り合いとかが頼んでくる。それで母が月に一度バイト代をくれる程度」と言つたら、東条さんが笑つた。

「だから、駄目なんだよ。商売として成立させないと。相手がわざわざ相談に来るようにならないと商売にならない」そう言われて、「友達には頼まれるけど」

「お金をもらつてるか？」

「お」「つてもらう程度」

「じゃあ、駄目だね。そこまで必要とされてないつてことだから」

「あなたは必要とされていゆつて誰つの？」面白くなくて、そう聞いたら、

「確かめてみたら」と笑つた。

プロキオン2

東条さんの言つとおりだつた。予約表を見せられて、びつしり予定が入つていた。

「料金いくらなの？」

「正規料金の半額。見習いはそこから始めるからな。それで基準人數に達したら試験」

「試験つて？」

「この間と同じことだよ。相談者をみんなの目の前で占つて、採点する。基準点に達していたら見習いから昇格。その後もアンケート結果や指名などでランクが上がっていく制度。指名が多いとそれだけお給料に反映」

「お給料制なの？」

「いや、固定給は少しだけだよ。後は歩合。あまり指名が少ないと、ここにいられなくなる」

「追い出されるの？」

「違うさ。自分から辞めていくだけ。居づらいからだろ」厳しいんだなど聞いていた。

「そばにいて見学してろ。ただし、横から口は出さないでね」怜奈ちゃんを見たら、

「最初だけいるね。途中で帰るから」と言つたので、東条さんがうなずいた。

「かわいい子だから、特別だからね」怜奈ちゃんにだけ、優しく笑いかけて、「この『重人格男』と言いたかつたけど、我慢した。追い出されると困る。」いつの占いに興味があった。

東条さんはえらそうなことを言つだけのことはあつた。占い師として東条カロンと名乗つてゐる。占い師は本名の人のほうが珍しいぐらいだ。カタカナ名の人が多い。私はまだ占い師の名前はもうつ

ていなかつた。占いはタロット西洋占星術の両方ができるけど、タロットが多かつた。お密さんに了解を得て見学していただけれど、嫌がる人もいたので、そういう人は席をはずしたけれど、ほとんどの人は私など眼中になかつた。タロット占いではカードの意味から更に解釈を広げていて、相手は食い入るように聞いていた。相手は何度もうなずいて、しかも質問も多い。その質問にも丁寧に答えていた。相手がどういう年齢だろうと、自分より年下だろうと言葉遣いは丁寧だった。親近感をこめた言い方に変えることもあつたけれど、相手によって、その辺のバランスを取つていた。確かに私とは違う。こいつが合格したのは当然だつたんだなと思ったと同時にかなり落ち込んだ。これでは言われてもしようがないかも。

「どうだつた？」とお密さんが帰つた後に、聞かれた。お密さんが帰る合間に話しかけられたけど、何も言えなかつた。それで、今度も「えつと」としか言えなかつた。怜奈ちゃんは飽きて、さつさと帰つてしまつた後で、

「よく見てろよ。お前、他の人の占い方法も知らずにきただろ」

「見えてると違うの？」

「参考にできる部分はいくらでもあると思うけど。人によつて違つてくるからな。アプローチの仕方も解釈も何もかもね。得意分野もあるだろうし」

「得意分野？」

「恋愛の」と言つていたら、お客様が入つてきて、

「お願ひします」と言つた声を聞いて、

「お姉ちゃん」と驚いた。

「あ、なんだ。真珠、なんでここに？」と聞かれて、

「見学なんですよ。おとなしくしていますから、許してやつてくれさい。それより、おかげください」東条さんが優しく笑いかけた。

「へえ、ここで働く気？ ここでお給料いくらなの？」と聞かれて恥ずかしかつた。姉は「ついつところがある。全部、お金で換算する。

「どうぞ」東条さんが薦めたために、姉は座つて、「どういったご相談ですか?」と東条さんが聞いていた。

プロキオン3

姉の占いは、良くも悪くも半々だったけど、姉は、「お金持ちと結婚したいんですよ」と何度も言っていた。今の相手はどうかってことが一番重要だったようで、身を乗り出していた。勢いが違うなあと思いながら、

「かなり努力をされているようですね。そうですね、努力しだいで叶うかもしれないですね。がんばってくださいね」東条さんがあの顔で優しく言ったために、姉はうれしそうだった。私には目もくれず、うれしそうに帰つて行き、

「残念な結果になるだらうな」冷めた声で東条さんが言つたので、「二重人格にもほどがある」と呆れた。

「相談者がそばにいたらどうするのよ」

「足音が聞こえただろ。もう、帰つたから言える。それにそばに入がいると分かる体質だから」変な体質。

「お前は分からぬのか?」

「さあ、感じたことない」

「ふーん、俺の誤解だつたか」と言つたので、

「なにが?」と聞いた。

「お前、強い気がしたからな」

「何が強いのよ」

「気が強いつて言いたいけど、意外ともろいのはこの間、見たしな」と笑つたので、

「あなたの二重人格には負ける」

「誰でも裏表はあるだろ」

「そう? ない人だつていいでしょ」

「お前が知らないか、見えてないだけだ。何だ、残念だな。やつと、見つけたと思ったのに」

「なにが?」

「勘の」と言いかけてから、

「お前も占つてやるよ。今まで最後だから」

「お姉ちゃんで最後なの。あ、会社帰りだつたね。今、何時？」
「時計は置いてない。そういうものがあると気が散るだらうから」
「そう言わるとそうかもね」と言つて、携帯で確かめた。

「あ、やっぱ。そろそろ帰らないと」

「門限か？」

「ないよ。そういうやなくて」

「あと少しだけ付き合えよ。お前を占つほづが先」

「なんで？」

「興味があるからな」意味不明だなと思つたけど、

「少しだけね」と言つて、仕方なく座つた。タロットで占つてくれ

たけど、かなり時間をかけていて、

「分かりづらいな、お前」と言われてしまった。

「言葉遣いを変えすぎだよ。お客さんと態度が違います」

「お前はタダだから、これぐらいでいいだろ」

「つづづく、二重人格だね。姉には調子のいいことを言つておいて、
相手に合わせただけ。相手の満足感を優先したらああなつた」

「意味不明」

「話しかけるな。ふーん、お前の人生つて、色々あるだろ」

「そう? それなりだと思う」

「親の関係か? かなり苦労してないか?」

「それでもないよ。母親はそれなりに育ててくれたし」

「父親は?」と聞かれて黙つた。

「なににあるのか?」

「いないから」

「ふーん、苦労はしてるんだな。それで読みづらい」

「カードにはそこまで出てないじゃない」

「ばか、相手に合わせるって言つてるだろ。相手のそれまでの考え方とか生き方も反映していかないと現実味がないだろ」

「え？」とおどろいた。

「社会人と学生だと同じカードでも解釈が違うのは分かるだろ。相手の性格によつても違つてくれる」

「性格はどうやって把握するの？」

「服装とか、態度や言葉遣いとかで大まかに判断するよ。そこまで分からぬからな」

「なるほど」

「お前は相当経験不足だな。友達だけ占つてゐるから苦情とか出ないから努力しないだろ」

「そう言われたら、苦情を言われたのは2件ぐらいかなあ。後は思い出せない」

「ふーん、少ないな」

「『振られたのはどうしてくれる』って」

「それは怒るだろうな」

「当たつたのに怒られたの、2件とも」

「ふーん」

「当たつても怒られるのが困つたけどね。『彼氏が一股』って言つたら怒られたし、『年上の女性に取られる』って言つたら怒られたし」と言つたら、東条さんが顔を上げた。でも、すぐに顔を戻した。

プロキオン4

「お前の場合はこうこうあり過ぎそうだ。恋愛にしても勉強のほうもね。これから、かなり苦労しそうだな。今までも色々あったようだし。でも、占いにいく」

「どうして？ 出てるじゃない。私の場合は経験不足に陥るみたい。それから、人間関係がかなり影響があるって。出会った人とつながりが重要でしょ」

「どこでそう思う？」東条さんに聞かれて、「説明しなくて、カードに出てるじゃない」

「ふーん」東条さんがそう言つた。

「恋愛も波乱含みだな。初恋は実らないって言つただけは分かるけど」

「え？」と驚いた。

「どうして？」

「驚くことないだろ」といわれたけれど、納得できなくて、「お前は恋愛関係は相当弱いな」「みんなに言われるからやめてよ」「経験積まないと難しいぞ。その辺で差が出るし」「そう言われても、初恋は実らないって、どこに元げりの「自分で考える」とそつけなかつた。

「よく分からぬ」

「お前のほうが分からぬ」家まで送つてもらいながら考えていた。

「お姉さんには本当のことは伝つたよ」

「なにを？」

「恋愛でことじ」と失敗するつて」

「そこまで出てたつて？ 確かにうまくこきあつむなにってことは

「私でも分かつたけど」

「彼女は将来幸せにはなれないよ。誰とも結婚できないかも知れないな」

「そこまで言い切るの？」

「総合的に判断するとそうなる」

「本人には言わなかつたじやない」

「お客様だから当然だろ。全部伝えられないよ。相手が望んでいな
いことはね」

「どういう意味？」

「相手はお客様。いい気分で帰つてもうつには言葉も選ばないと
いけないし、言わなくともいいことまでは伝えないこともあります。
二度と来てもらえなくなるのは困るじ。口が軽い女性だと言つぶら
されても困るから」

「そこまで考えるの？」

「前にいたんだよ。はつきり言い過ぎて問題が起きてね。相手が何
度も苦情の電話を掛けってきた。結婚がうまくいかなかつたのは占い
師のせいだつて。でも、占い結果もうまくいかなくなるつて出でてい
たから、それが面白くなかったこともあつたんだろうな。だから、
そういうので気をつけているだけだ。評判も大切だろう」と言われ
て、考えた。確かに正直に全部姉に伝えたところで、姉は信じじるど
ころか怒るかもしれないな。

「だから、相手には必要以上教えなかつたんだ?」

「お客様を不快にさせる必要はないからな。だから、お前も言わな
いように」

「そう」そこまで考えたこともなかつた。こいつはそこまで考えて
占いをしてるのかという驚きと、自分の未熟さと、でも、面白くな
いのが「じちや混ぜで

「あなたって分からぬい」としか言えなかつた。

プロキオン5

「俺もお前が分からぬ。自分の占いなのに、どうして分かつた？」

「半分しか分からぬよ。自分が見たくないことまで見えないし」

「そもそもしれないな。俺も自分のことや身近な人は占いにくいし」

でも、お前は今まで一番占いにくかった

「そう？ 田頃、言いたい放題だから、そうなるかと思つたのに」

「占い結果と照らし合わせても、お前が分からぬからな。お前は勘がいいようだけど、それ以外はボロボロだし」

「嫌味な男」

「しかも言葉遣いは悪い。見学させてもひつておきながら、感謝もしないしね」

「「」めん」と謝つた。「」の男だとそういうことが言えなくなる。そういう部分でぶつ飛んでしまうところがある。

「相手によつて感謝つて言つづら」のかも」

「素直なほうがいいだろ。それで、どうだつた？」

「なにが？」

「見学してだよ。プロキオンの占い師の「」とはどう思つた」

「あ、見てなかつた」

「呆れるやつ。何しに来たんだか」

「そう言えばそうだつたね。観察してなによ」

「お前は一箇所集中型かもな。靈感だけの占い師脱却の道のりは遠いな」

「「」の辺で止めて」

「何で、家まで送つてやるよ。ですがに女子高生だと襲われると困るだろ。それなりにかわいいからな」

「あなたから言われると途端につれじくなくなるのせいでだらう？」

「失礼なやつ」

「塩掛けられちゃうからね。あなたのお父さんが嫌いだから。うちの母」

「ふーん。売れてるから、やつかみか?」

「さあ、それにしては変だよ。前に売れている有名占い師の人には母と一緒に会つたけど、反応が違つてた。うれしそうに握手を求めてたから、違うと思う」

「じゃあ、いい男コンプレックスか?」

「なにそれ?」

「モテる男が嫌いって女もいるんだよ。お前と同じようにな。でも、興味があるから嫌いと言つことが多いだけね」

「誤解だ。あなたに興味があるのは占い師の部分だけ」

「ふーん」東条さんが変な顔をしていた。

「おかしくないでしょ。好みのタイプじゃないだけだもの」

「俺は好みだけど」と言わせて、口をパクパクさせた。

「リアクションが古いな、お前。コメディにするな」

「どういう意味?」

「テレビで見るコントのようだ。もっと、かわいく、『うれしいわ』
とこり笑え」

「笑えない。うれしくないから」

「ああ言えば『うれしいタイプだな。つづくかわいくないね。友達を見習え。もつとも、彼女も長続きしない恋愛を繰り返しそうだな。後、何年かはね』

「そんなことも分かるの?」と聞いたら、意味深に笑つていて、車を止めてから、

「お前の場合は経験不足に尽きるのは本当のようだ。経験つめよ。
お金もらつて占えるレベルになつてから言え」

「はいはい、送つてくれてありがとうございました。一重人格さん

「お前は裏表を身につけるよ。お客様に対して不快な態度を取らないように。素人レベルで終わりそうだ」

「つるさいわねえ」と言いながら、車から降りた。あいつはさつさ

と行ってしまい、
「よく分からぬいやつ」と思った。

弟子志願1

秋さんにプロキオンでのことを相談した。

「経験を積むのは賛成だけど、誰かの弟子になるにしろ、中途半端では困るわよ。まだ、学生だし、卒業してからでも」

「学生しながらだと無理かなあ」

「そうねえ」と、考えていた。

「忙しい人だと直接は教えてはもらえないわね。プロキオンがそういうから、先輩の指導はあるらしいけれど、個人で腕を磨いていくと聞いたことがあるわ。人気があるところだから首にしても次の人がすぐにつかるから、丁寧に指導はしてくれるわけじゃないらしいの。そういうところも多い。占い教室だとお金はかかるしね」

「そうだよね。お金なんて払えそうもないから、自力しか無理かな」

「ただ」

「なに?」

「昔、お金もなしにそばで勉強させてもらったケースがあつたようだけど」

「その人、誰?」

「それが、実はちょっと良く分からない人なのよ。評判はいいと言う人もいれば、偏屈だと言う人もいる」

「え、それだとちょっと」

「でも、占い師の腕は確かに弟子入りした人が言つてたわ。ただね、かなり頼み込んだ末の渋々だつたみたいだし、その人、男だったからね」

「そこ、教えて。とにかく行ってみる。それから考える」

「真珠ちゃんはそういうところは前向きね」

「でも、行つてみてから考えたほうがいいでしょ」

「そうね。ここでの経験だけでは中々上手にならないでしょうね」

東条さんの言つたとおり、お客様に必要とされてなければ、お金な

んて払つてもられないし、指名なんてされないだろ？。悔しいけれど、あいつのほうが上だ。

「見た目がいいとお客様つて指名が多いのかな」

「見た目だけじゃないと思つわよ。それより中身ね。話し上手、聞き上手な人のほうがいいでしょ？」

「そこまで考えてなかつたな」

「学生なんだから、そこまで考えて占つ必要がなかつただけでしょ。でも、真珠ちゃんは占い師になるより、固い職業のほうがいいのかもしないわよ。意外と大変なんだからね」

「分かつてるけど」

「ここは常連さんが多いから、苦情が少ないけど、何人かは理不尽な要求をされたそつだから」

「なにを？」

「『彼氏とよりを戻せるように占ひて』と言われたらしくて」

「絶対無理でしょ。それにそれはその人自身が努力していかないといけないって思うけど」

「それをそのまま伝えたら怒られるからね。やんわりと納得できるようにしていかないと」

「どういう意味？」

「相手にそのままの言葉を伝えたつて、怒る人もいるつてことよ。中にはいるから気をつけとね。言葉を言い換える必要もあるから。

相手に合わせてね」あいつが言つていたことと同じことを言つ。

「相手に合わせるか。私、そういうこと今まで考えてなかつた」

「そういうことにも気を使う必要は出てくるわよ。お金をもらつて占つているわけだからね」と諭すよつて言つられて、うなずいた。

「負けたくないな。あいつには」

「勝ち負けの問題じやないでしょ」

「わかつてゐる。でも、言われっぱなしぢや面白くないの」と言つたら笑われてしまった。

秋さんに教えられたところに行つた。でも、それらしい建物が見当たらない。

「どこ？」思わず口に出して見回していた。

「あんた、何か探してるの？」近所のおばさんらしい人が寄ってきて聞いてくれて、探している場所の名前、「ヒッグシル」はどこかを聞いた。

「ああ、あの偏屈のじいさん」と言つたので、ちょっと驚いたけど、「そこだよ」指差されたところを見て唖然とした。綺麗とは言いがたいところだつた。昔、別の商売をしていただろうなと言つ作りになつていた。食堂か何かだらうなと思つたけど、

「そこに出てるだろ。看板が」

「看板？」探して見たけれど、見つからず、指差して、

「それだつて」と言われてみたら、「橋添」と書かれた表札の下の小さな木のボードがあつて、「ヒッグシル」と書かれていた。でも、汚い字だつた。

「はあ」行くのをやめようかなと思つたけど、その人が見ているので御礼を言つて、そちらに向かつた。チャイムを探したけど見つからず、仕方なく入り口を叩いた。

「ごめんください」かなり時間が経つてから出てきた男の人は、くたびれた雰囲気の人で、

「どちらさん」と聞かれて、説明をした。

「ああ、無理。うちはそういうのはやってないから」

「でも、経験を積みたいので」

「他に行きなさい」

「お金がないから」と正直に言つたら、

「だからって、何もここに来なくても」と自分で言つたので、

「知り合いの人に聞いたんです」と説明をした。

「ああ、あの子ねえ、辞めちゃつたんだよね」

「え、どうして?」

「この商売はね。お客さんがつくかどうかで決まるからね。あの子

はそれなりに熱心だつたが、占い研究好きだつただけでねえ。それでお客さんを怒らせてばかりいたからね。見たところ、君は学生さんだろう。悪いことは言わない。やめておいたほうがいい。おしゃれで儲かる商売だと勘違いするんだよね。近くにあるとこりと勘違 いするからね

「近く?」

「あつち」と指差していた。

「でも、経験を積みたいんです。そばに置いてください」「君、いくつ?」

「十七です」

「若いから他の職業のほうがいいよ」

「母もそう言つたけど」

「お母さんのほうが正しこよ」

「母も占い師なんです。今は母の手伝いをしていますけど」

「へえ、だったら、その人に教わりなさい」

「母は気が散るからと私がそばにいると嫌がるので、それなりしか見れないし」

「まあ、そういう人も要るだらうなあ。俺は気にしないけど」

「お願いします。見習いで一週間でもいいから置いてください。お金は払えないけど、手伝いぐらいはできます」

「無理だよ。若い子はそういうことは今時やらないだら。家事もしたことがない子が大勢いるからねえ」

「いえ、してますけど」と言つたら、相手が驚いていて、しばらく考えた後、

「一週間だけだよ」と言つてくれて、

「ありがとうございます」と頭を下げた。

「今時、珍しいね」と言われてしまった。さすがに見るために見かねて、最初に掃除を始めた。エプロンを借りて、掃除したけど、汚れちゃうなと思った。汚れてもかまわないような格好だけど、それでも、汚れすぎだなと思った。

「掃除してくださいよ。だから、お密さんが来ないんです。明日はジャージを持つてきますね。これじゃあ、絶対に固定客ができない」「いるよ、それなりに」でも、本当に珍しいね。家事はできる子は、久しぶりに見た」

「母が苦手で父に仕込まれました。スケッチ旅行に出るときに、留守を頼られますから。父は小金を貯めてスケッチ旅行に行くのが趣味なんです。カフェを切り盛りしてましたが、本当は画家だったから」

「へえ、そういう家の子なんだね。じゃあ、納得」話をすると偏屈ではなかつた。占い師としては未知数だけど、ごく普通の人だった。「先生、掃除はしてくれないとお客様が嫌がりますよ」

「めつたに来ないんだよね」

「大丈夫なんですか、それで？」

「なんとかやつていけるよ、それでも」

「うらやましいなあ。うちでは今は苦しくて。カフェの収入が減っちゃつて。占いのほうが増えつつありますけどね。お弟子さんができたから。いつか、独立しちゃうんだろうけど、人気が出てきているから」

「そう」

「先生、お密さん、一人ぐらい来るよつに宣伝したらう。せめて看板を分かりやすく」

「そのうちやるよ」そのうちは来ないパターンだなと思いながら、

「今度、作ってきますね」

「いいよ、あれで。愛着あるし」

「じゃあ、もう一つ作ってきますね。知り合いで頼んでみます」

「悪いよ」

「占いと交換です。前もそうしてもらつたから」

「しかしなあ、あれでいいと思うけど」

「先生、占い師なんだから、その辺も気を使いましょうね」と言つたけど、結局、聞き流していた。お客さんが一人も来ず、終わり、早めに帰ることにした。帰りにプロキオンに寄つてみた。意外とすぐ近くだったので、ひょっとして、さつき言つてた『あっち』つて、ここのことかもね。と思った。プロキオンの受付に行って、見学をさせてもらえるように頼んだ。

「また、ですか？」と驚いていた。

「あ、あの子よ」と声がして、

「あなた、尚毅のなによ」と後ろから言われて、

「あの、あなたたち」と聞いた。女子高生3人がにらんでいて、「プロキオン会員の者よ」と言つて、何かカードを見せてきた。細かい字で分からなかつたけど、プロキオンのお得意様カードのよう

で、

「へえ、そういうのがなんてあるんだ」驚いた。

「これに入ると優先して占つてもらえるの。そつじやないと中々予約が取れないんだから」

「そう」としか言えなくて、

「だから、それに入つてないのに、馴れ馴れしくしないでよ

「ああ、違う。の人、ただ、教えてくれただけの人だし。私なんて馬鹿にされてるし」と言つて逃げた。

「そうでしょうねえ。大してかわいくないものね」聞こえるように言つたので、言い返してやりたかったけど、やめておいた。関わりたくない。あいう子に前に絡まれたことがある。神宮寺が好きだつたらしくて、それで言いがかりをつけてきた。けんかになりそ

うなところを怜奈ちゃんが通りかかって止めてくれた。「まともに相手にしたら駄目だ」と後で怒られた。「相手は何を言つても納得しないから適当にあしらえ」って言われてしまい、

「えー、くやしい」と怒つたら、

「無理だつて。神宮司に振られて、真珠に言いがかりをつけている段階でおかしいでしょ。神宮寺に何度も告白すれば済むことなのに、真珠にハツ当たりしてるんだし」

「ハツ当たり?」と驚いたけど、後で周りに聞いたら、

「ああいうのつて、困るよね」と言い合つていた。何人か似たようなことをされたらしい。相手が好きだと言う気持ちより自分優先の子がああいうことを言つてくるらしい。自分の思い通りにならないことを誰かのせいにするらしく、

「だから、まともに相手にしたつて無理だよ」と言い合つていた。今はそういうこともなんとなく分かるようになつてきた。

ロビーの周りの見学していた。待つている間に、グッズを売つているところで友達と二人で選んでいる高校生がいたり、何か紙を渡されたらしく、それを見せ合つていたりして楽しそうだった。占い師に今年中に彼氏ができると言われたと友達と喜んでいる人もいて、楽しそうでもあった。母のところで占つてもらった後のことは、私は知らなかつたので、ああいう感じなのかなと思つた。終わつた後は疲れるために、母はすぐに切り替える。お客さんの話もほとんどしない。もめごとがあつたときだけ、秋さんと相談するぐらいだつた。時々、ロビーに占い師らしい人が通りかかることがある。働いている時間が人によつて違うらしく、占い師の紹介されているボードには時間や占い内容が書かれていて、そのボードの写真の人を一通り見ていた。「ルーカス」のおじさんの言つていたとおり、ほとんどが若い女性。綺麗な人も多く、服装も派手な人は少ない。テレビで見たことがあるような色使いの派手な衣装の人は一人もいないようだつた。料金は高い人もいた。でも、後は横並びで、学生割引があつたり、プロキオン会員も割引されるようで、

「うちは違つ」と言つたら、
「それはそうだ。うちは独自システムだからな」と聞いたことのある声がした。東条さんがロビーまで出てきていた。

弟子志願3

「お客さんは?」「今日は学生が多いからな。そうすると早くなるし」「え、どういう意味?」「学生割引なのは内容の濃さも関係あるからな」「意味不明」「それで、早めに終わるだけ」「時間が決められているでしょ」「人によって違うよ。一人占うだけでかなり疲れるから、休憩時間を大目に取る人がいるし。さつき帰った女子高生がお前が来てるって言うから降りてきただけ。絡まれなかつたか?」と聞かれて、正直にうなずいたら、笑っていた。

「だと思った。気をつけろよ」と小声で言つてきた。

「何度か一緒にいたからうらまれているみたいで。俺にぼやかれたし。前もあつたから」周りに気づかれないように教えてくれて、「あなたが人前で話しかけなければ、即解決」

「無理。あいうのは続くさ。親父も同じだつたらしいから。だから、広く浅く付き合う必要があつてね」

「ふーん、いいよ。それは」

「それで、何しに来た?」「近くに來たから、また見学しに來たの。美人が多いみたいだね。あのおじさんが言つてたとおりだ」

「誰だよ」「誰だよ」「ルーカス」「ああ、あそこね。見た目は重要だろ。占つてもらう人が神秘的なほうがいいと思うけど。庶民臭さがある人に占つてもらうよりね」「そう? そこはそれほど関係ないでしょ。遊びなら分かるけど」「遊び?」

「ファッショングループ。遊びに来てるって感じの子が多いね」と見回した。東条さんも見てから、

「それでもいいだろ。来やすさだけ重要だ。お前のところも宣伝ぐらいしたら。ネットだけじゃなくて。営業したほうがいいぞ」

「営業？」

「テレビに出たほうが影響力があるね」

「一時的に人が増えるだけでしょ」

「固定客になつていくんだよ」 そうかなあと覗回した。

「不満そうだな」

「いや、ありがと」「やいました。一度と会わないだらうけど、

色々と勉強になりました」

「前もやつ言つてただろ。でも、会つた。縁があるんだよ」

「ない」

「俺はそう思つてる」

「あなたねえ」と言い合つていたら、

「迎えに来てくれたんですか?」 大学生らしい割とかわいらしい人がやつてきて、

「帰りに食事に行きましょうね。約束したんだから」と擦り寄つて腕をつかんでいて、よくやるよと思いながら、頭を下げてその場を離れた。

「あ、お前」と語り声が聞こえたけど、そのまま振り返らなかつた。あれが営業と言つならホストになつたほうがいいかもねと思つた。

「汚い」と言いながら玄関周りを掃除していた。草むしりに雑巾がけ。それなりに綺麗にしたいけど、元が古すぎてそこまで綺麗にはならない。これは難しいかもね、と思っていたら、

「あら、珍しい。お孫さんかしら」どこかの家庭の普通の主婦つて感じの人人がやってきて、慣れた手つきで玄関の戸を開けて中に入つていった。先生はお茶を入れてあげていて、

「ああ、いらっしゃい、そろそろ来るころだと思ってね」と言つて、席に着いていた。先生のタロットは我流だつた。解釈がかなり飛躍しているところもあり、でも、相手は笑いながら相談して占いを進めていた。ずっと見ていたら、

「お孫さんがいるなんて知らなかつたわ」

「ずっと前に別れた女房の関係じやないよ。この子は押しかけ弟子」と言わされて、その人に頭を下げた。

「前にいたスギちゃんみたいにしないでよ」

「彼は研究するのが好きだつたから、今もやつてるよ、きっと」「でも、お客様、どれだけ怒らせたか。でもねえ、この先生に会いたくなるのよね。迷つたときに必ず来るの。そういう人ばかりよ。人生相談も兼ねてるからねえ」

「うちは時間無制限だから、それで来るんだよね」

占い終わった後、お金を払つて行つた。じつくり相談にのつたためか、お客様はかなり満足していた。金額は思つたより少なくて、「これで食べていけますか?」と驚いた。

「大丈夫だよ。それなりにやつてける」と言つていた。電話が掛かってきて、でも、先生は、「ああ、駄目、今日は日が悪い。今度ね」と断つていた。

「なんで?」思わず聞いたら、

「あの人は不満が溜まると来るタイプ。でも、占いなんて信じないから、こつやつて断る。相性が悪いから」

「お客さんを断る余裕がどこにあるんですか？」

「占えない人もいるでしょ」と軽く言われてしまい、「確かにそう思つて断つた女子が何人かいた。お見合いパーティーが成功するかどうかを聞かれた先生も逃げた。占わなくても「不成功」と背中に書いてあるような人だつた。

「選り好みしてるから、偏屈だつて言われちゃうんですよ」

「ああ、違うよ。そういう訳なくして、ここに住んでるからだね」

「確かに占いするところとしてはふさわしくないけど

「ま、がんばら」と言われて、すごになと思つた。

帰るときに、見慣れた車が見えて、中を見たら東条さんが女連れだった。また、ああやつてる。どれだけ女性がいるか知れたものじやない。そのうち、刺されるだらうなと思いながら通り過ぎた。

「占い師でも色々いるよね」と口に出した。母が所属している占い団体はいくつかある。その集まりに連れて行ってもらつたこともあって、かなり個性的な人もいれば、どこにでもいそうなおじさんタイプもいる。たまに不思議な衣装の人もいるけど、色々だつた。東条さんやその父親の圭吾さんのような高級な身なりで揃えているような人はほとんどいない。だから、の人たちはやつかまれるかもしれないなと思った。「お給料はそれなりにいいらしい」と言う話と、「それでもない」と言う人と色々いた。東条さんも相当バイト代をもらつているんだろうな。うちも色々変えたほうがいいんだろうかと思いながら歩いていた。

「お姉ちゃん、遅いね」と母に言つた。母には先生のところに押しかけ弟子していることはさすがに教えておいた。プロキオンのそばにあることを省いてあつた。また、塩を掛けられたらたまつたものじゃない。

「ほつときなさい。自分で稼いだお給料で遊んでいるのだから」「男に払わせてるんじゃないの?」「自分で払うなんて、馬鹿よ」が口癖のお姉ちゃんだから、デート代は全て男性持ちだと思つ。「化粧品に洋服までは無理でしょうね。せいぜい、アクセサリーにバツク程度でしょ。おしゃれして、デートに備えるから、そういうことでしょ」母が軽く言つた。

「お姉ちゃんはお母さんに似て派手だものね。美人だと得だ」「あら、真珠はお父さんと私に似ていてかわいい顔じゃない。性格だつて優しいからね」

「優しくはないよ。お姉ちゃんとお母さんと比べたらそうだけね。友達に、『黙つてるとそれなりにいけるかも』と言われた。どう思う?」

「そうねえ、確かに時々余計なことは言つわね」

「おかあさんたちがその辺にコップを置いておいたままにしたり、テレビをつけっぱなしにしたりするからでしょ。洋服だって、その辺に置いておくから、『洗濯機のそばのかごに入れておいて』と言つても聞いてくれない」

「所帯じみてるわね。高校生なのに。しつかりしてるように見えて抜けてるものねえ。輝子と足して割つたら、ちょうどいいでしょ? ね、あなたたち」

「あなたが生んだんでしょう」

「性格が似てないものねえ。輝子も誰に似たのか、お金に執着してね」

「貧乏がよほど嫌なのかなあ」

「そこまで貧乏じゃないでしょ」

「カフェの売り上げが無くなつたから、厳しい月もあるよ」帳簿や家計簿は私がつけている。家計を預かっている身としては母の言葉は聞き捨てならなかつた。

「休日だけカフェをしようか。秋さんだって来てるんだし」秋さんは占いだけでは食べていけないからと働いている。休日だけ来ていて、私も時々手伝つている。

「秋ちゃんもそのうち独り立ちするかもしないわよ。それにお前だつて、休日に他のバイトをしたほうが気楽だとと思うし」

「お母さん、面倒くさがりだものねえ。社交的で明るいから接客は向いてるけど、洗い場はやつてくれなかつたし」

「いいわよ、それなりで」

「お父さんが帰つてきてくれないかな」

「真珠。その話はしないことに決めたでしょ」

「ごめん」と謝つた。父がいなくなつて、何度かこういう言葉を言つてしまつ。姉は父のことなんて話題にすらしないけど、母は相当堪えていて、落ち着いてから一人で時々父の話題が出る程度だ。

「広大おじさん、元気かな」

「そのうち、遊びにでも行きなさい。真珠が行けば喜ぶわ」

「お金がないのに?」

「卒業してから、行きなさい」

「お母さん、雑誌のコーナーとかないの? 知り合いで頼んで。自分で営業していかないと。あの看板だけじゃね」と外を見た。学校の知り合いの男子に好きな女の子のことを占つことと交換条件で描いてもらつた看板がある。かわいい妖精が描かれているために、それにつられて、何人か来たこともあつた。

「お客様さんつて、呼び込みしたつて来ないかなあ」

「どこで、呼び込みをするのよ?」

「そこの通りで」と外を指差した。

「やめておきなさい。自分から占いに来る人じゃないと。遊びで来られたも大変よ」プロキオンをうるついていた学生たちはうれしそうにしていた。みんなで、楽しそうに占い結果を話しているのか、ロビーのソファに座つて話している人もいた。あそこはロビーも広く、上の階でも占いをしていて、所属している占い師の数も多そうだ。それだけ儲かるのかもしれない。

「お金持ちはお金を呼ぶ」

「何を言つてるの？」

「お母さん、お金持ちは男性密と付き合つてみるとか？」

「輝子じゅあるまいし」と母が呆れていた。

先生のところに寄つた帰りにコンビニに寄りたくて、プロキオンのそばを通りかかったら、また、東条さんの車が止まっていた。学生だけ、毎日占つているようだ。サバトに合格してもすぐにデビューできないと聞いていたけど、あいつは特別待遇なのかもしれない。

コンビニで買い物をした後に、また、通りかかったら、お客様を送りに外まで東条さんが出てきていた。相手と食事にでも行くようで、そのまま車に乗り込もうとして、私に気づいて、そばに寄ってきた。

「よく会つな」

「偶然よ。近くに来る用事があるからよ」

「用事？」

「色々あるの。あなたは別の職業のほうが向いてそう。絶えず違う

女性と一緒にいるんだね」

「営業もあるからね」

「ホストみたい」

「失礼なやつ。恋愛したこともないガキに言われたくない」

「失礼なのはどっちよ。これでも好きな人ぐらいはいるわよ」

「恋人じゃないだろ。せいぜい片思い」

「そのうち、両思いになつてやるわよ」

「当たりだ」笑つたので、にらんで、

「あなたと大違ひの誠実で優しい人よ。間違つても女性をとつかえ
ひつかえしない。一緒にしないでよ。みんながあなたみたいだつた
ら、日本全国おかしくなるわね」

「楽しいもんだと思つけど。デートできるよつになつてから言えよ。

ガキ」

「つるわい。今度こそ一回と会わないからね」と言つて、歩き出した。

「お前とは縁があるから、何度も会うよ。絶対ね」と言つ声が聞こ
えた。「縁なんて、ない」と言つてやりたかったけど、我慢した。
あいつやつは無視するのに限る。学校の男子で、何人か私のこと
を、「靈感女」と馬鹿にするやつらがいる。最初は言い返していた
けど、今はやり過ごすことに決めている。でも、怜奈ちゃんが通り
かかると途端にやめるから不思議だ。男子つて露骨なやつが多い。
さつきの女性も綺麗な人だつた。東条さんの好みはそういうタイプ
なんだろ?。父親に似てるのかもねと思つた。

学校を早く帰るよつになつたため、

「付き合ひ悪い。占つてよ」と言われたけれど、

「ごめん。しばらく占えない」と断つた。お金を払つてもらえるような占いじゃないことに気づいて、さすがに気軽に占えなくなつて断つた。何人かに頼まれてはいるけれど、誰か一人占うと、「あの子は占つたのに」とぼやいてくる子が必ずいるので、そういうこともできない。

女の子の場合はわざり部分でうるさい子もいるからだ。怜奈ちゃんは、

「ほつとけばいいって」と気軽に言つげど、さすがにそういうのでもめるのは好きじゃない。男子を取り合つてけんかしていた女の子たちが、グループを組んで張り合つていたことがあって、それで巻き込まれたこともある。占いでどちらが優勢かを教えると言われてさすがにできなくて、何とかごまかして逃げた。結局、その二人のどちらも振られてしまい、他校の女の子と付き合つたらしくて、その男子はかなり責められてはいたけれど、何しろかつこいい男子だったため、相手に優しい顔で謝られたら、それ以上強く言えなくなつていたらしい。それを見て、「好きになつたほうが負け」と言つていた女子もいた。

「好きになつたほうが折れるしかないとことじょう」「怜奈ちゃんに言わても良く分からぬ。お付き合ひと言つものをしたことがない。告白はされることもしたこともない。そういうのがどうも苦手だ。神富寺とは噂になつたらしいけど、私は何も言われたことはない。向こうは適度にモテるのでデートをしていたらしくと言つ目撃情報は聞いたことがある程度。誘われたことも誘つたこともなかつた。

お店に行って、掃除をしてから、先生にお金をもらえるよつな占

いのことを聞いた。

「お金ねえ」と考えていて、

「そうだねえ。一人一人満足する部分が違うこともあるからねえ」「どういう意味ですか？」

「そうだね。内容重視の人もいれば、ファッショングループ感覚でおしゃれな人に占つてもらいたいとか、素敵な場所で占つてもらわないと駄目と言う人もいるし、有名な人だつたらいいとか、好みが違うからね。若い女性だとそういう人も多い。この間来たお客様は、ずっと通つてくれている人だけど、うちはそういうのばかりだから。好みの問題かもね。相談しやすいってことも重要なんだろうね」

「相談ですか？」

「そう。女性の場合は恋愛や結婚、進学や就職、子供の相談に、人間関係とか色々あるけど、親身になつて相談したいって言うより、愚痴を聞いてもらいたかったり、話し相手になつてもらいたかったりすることも多いからね。友達にも親にも相談できないことを相談したいってことかもしれないな」

「はあ」

「でも、人によつては真剣にこれからのことを考えたくて、その指針にしたい人だつている。そういうことだよ」

「そうですか。そう言わると周りの人は真剣に占つてもらいたいって子はそこまでいなかつたかも。中には進路相談とか、親が離婚しそうだからどうしたらいとか、とても相談に乗れないことを言われたこともありますけど」

「そう、それだと困るね」

「未熟だつたんですね。と言うか、そこまで考えてなかつた。母のところに来る人の相談も近くで聞き耳を立てるわけにいかないので、内容などはそれなりしか分からないし」

「そう」

「先生は迷つたことはありますか？」

「うーん、それはこの年だとあるねえ。前はちゃんと働いていた時

期もあつたし、それに色々嫌がらせされることもあつてねえ」

「大変ですね」

「お金が絡むとね」と言われて、

「え？」と驚いた。とても、お金のことで悩むような人には見えなかつた。

「人は変わるよ。こちらは変わったつもりはなくとも、人の見る目だけが変わってしまうんだろうな。真珠ちゃんも人生が変わるようなことがあっても、自分をしっかり持てるようにするんだよ」

「そこまで、何もないですよ」と言って笑つた。ただ、人生が変わつて程じやなかつたけれど、喪失感はあつた。父のことを考えていた。

エッグショルの帰りに本屋に寄つたり、買い物をして帰つたら、家の前に見慣れた車が見えた。うーん、困つた。母が怒り出しそう。車をトントンと叩いて、車で寝ていた東条さんが起きて、運転席の窓は開いていたので、

「ああ、何だ。今帰つたのか？ 今田は遅いな」が言つたのが聞こえた。

「ちょっと寄るといろがあつて。それより、何か用？ わすがに困るんだけど」「なんでも？」

「説明したでしょ。あなたは我が家では出入り禁止だから」

「ふーん。親とは関係ないだろ。俺たちの問題だし」

「坊主も袈裟も苦手なんでしょ」

「俺は袈裟なのか？ まあ、いいや。確認しに来ただけだから」

「なにを？」

「お前の相手」

「何で、そんなことを確認する必要があるのよ」

「一応、見ておきたかっただけ。強い女が好きになるタイプをね」「強い？」

「ひょつとして、あれか？」と聞かれて、東条さんが見たほうを見てみたら、雪人さんが歩いてこちらにくるといひで、勘がいいやつと思ひながら、

「別にいいでしょ。さつと帰つてよ」と言つたら、

「ふーん」と言つて、わざわざ車から降りてきた。

「呆れるなあ。早く帰つてよ」

「あれだけ言わされて面白くないし。俺どじが違つと並ぶのか見ておかないと」

「見なくていい。雪人さんが穢れる」

「雪人さんねえ。あれじやあ、無理かもな」と言つていたら、雪人さんがそばに来てしまい、

「ああ、真珠ちゃん」と挨拶してくれて、頭を下げた。東条さんもなぜか頭を下げていて、

「お前は子供だ。憧れと恋を間違えてるタイプだね」と、意味深に笑つて、

「失礼な」と怒つたら、

「なんだ。まだまだだね。いつまで経つても進展しそうもないな。占いは当たつたな」

「当たらないわよ」と怒つていたら、雪人さんが不思議そうな顔をしていて、

「じゃあ、自分の目で確かめて見るよ」と意味不明なことを言つて、思わず雪人さんを見たら、東条さんがそばに寄ってきて、いきなり首の後ろを持たれて、

「きゃあ」と言い終える前に、勝手に唇を重ねてきた。さすがに驚いたけど、東条さんを突き飛ばし、

「威勢はいいよな。でも、まだまだ子供だけどな。恋愛するにはまだ早いね」

「信じられない。何するのよ」

「じゃあな。後で反応を見たら分かるさ」東条さんが雪人さんを意味深に見てから、さつさと車に乗つてしまい、「え?」と考えている間に、

「じゃあ、頑張れよ」と言い残して行つてしまつた。

「真珠。あれは何?」母がすごい勢いでお店から出てきたけど、それどころじやなくて、思わず雪人さんに抱きついて、その後、泣いていた。母がその後ろで、「塩をまくわ」と怒つていたけれど、それどころじやなかつた。

朝、お弁当をつめ終えて、出かける用意をしていたら、姉が二階から降りてきて、

「お姉ちやん、ゆっくりだね」と言つたけど、元氣が出なくて、「お母さんから聞いたよ。東条圭吾の息子ときたんだって? お金持ちなんだから、せいぜい貢がせなさいね」とすこことを言つていて、

「朝ごはんは?」と聞いた。

「いらない。ダイエット中」

「また、振られたね?」と聞いたら、

「振ったのよ」と言つたので、やはりうまくいかなかつたらしい。東条さんが言つたとおりになりそうだ。中々結婚できないかもしれないなあとほんやりした後、首を振つて、あいつだけは許さないとまた思つた。

「初めてだったのに」誰もいないところで怜奈ちゃんに東条さんにやられたことを相談したら、

「あら、いいじゃない。結構、いい男だったし」

「そういう問題じゃない。あこがれの雪人さんの前だつたんだよ」

「それで？」反応は？」と意外なことを聞かれて、

「なんで？」と聞き返した。

「だつて、真珠のことが好きなら反応が出るでしょ。普通」と聞かれて、泣いていたので、そう言えば、雪人さんがずっと抱きしめてくれていたことしか覚えてなかつた。

「怒るとか、それとも、優しく慰めるとか、なにかないの？」

「そう言えば、何も言つてなかつた。私もそれビビりじゃなかつたし」

「ふーん、それが一番困るね。無関心つてことだから」「え、無関心なのかな？」

「男はやきもち焼く人が多いよ。ただ、時々いるけどね。無関心男。デートしても会話しても自分の世界で生きてる男」

「うーん、よく分からない」

「困ったね。それだと。まあ、いいじゃないの。これから反応が変わつてくるかもしれないよ」

「でも、恥ずかしいよ。どういう顔をして会つたらいいのか」「いいじゃない。別に。何度も会つてるでしょ」

「でも、毎朝顔を合わせるんだよ」

「なんだ。そつち？ てっきり、東条さんの方かと思つたのに」

「あいつとは一度と会わない」

「そう？ キツと、気があるんだよ」

「ないよ。とつかえひつかえ男だよ。大村と同じタイプ」

「ああ、あいつねえ。ナルシストだからね。同じかなあ？」

と違うと感じたけど

「どうして？」

「大村なら、占いを見学しろって言つても、自分に酔つて自慢ばかりしそう。あの人、真珠に色々教えてたから、意外と親切なんじゃないの？」

「え、でも、冷たかつたよ」

「冷たくないでしょ。テレビ局に連れてつてくれる男ならね。普通はそこまでしない。「ネと言われて怒つたとしても、わざわざは連れて行かないよ。それに占いも見せないとと思う。意外といい男だと思う。本心が分からぬように見えるけど、態度に出てるじゃない」「意味不明」

「分かりやすい優しさだけじゃないってこと。分かりにくく人もいるよ。態度の分かりやすい優しい人ばかりじゃないよ。口で憎まれ口を叩きながら意外と優しいタイプかもね。いいかもしないよ。そういう人のほうが」

「なんで？ 逆じやないの？」

「口先だけの優しい男だとデートしても、すぐ飽きておしまいになりますけど、大村とは違うと思うなあ」

「怜奈ちゃんがそう言つならそつなのかな。でも、憎らしいことばかり言つよ」

「素直じゃないだけでしょ。それに真珠は人のことは言えないからね」と言われて考えていた。

行きたくないなあと思いながら、エッグショルまで歩いていた。途中でクラクションが鳴った。そちらを見たら、東条さんの車で、慌てて走つて逃げた。

「あ、おい」東条さんが車を止めて、そう言つたけれど、私には聞こえなかつた。

「元気がないねえ」とおばれんに言われてしまった。近所に住んでいるおばさんで、子供が結婚するので、それを占つてもらごに來ていた。

「『めんなさい』向いつに行つてます」と言つたら、「いいよ。お茶を入れてあげるから、元氣出しなさいよ。うちの娘もそういうときがあつてねえ」と優しく言つてくれて、

「すみません。私が入れないといけないのに」とため息をついて座つていた。今日は元気がなくて、掃除をしながら何度もため息をついてしまい、師匠が心配してくれて、

「やらないでいいよ、無理しなくても」と言つのも聞こえなかつたぐらいだった。

「真珠ちゃんが元気がないと、橋添さんも元氣なくなるでしょ」と師匠に聞いていた。

「そうだね。色々やつてくれるから助かってね

「部屋が片付いているものね」と言つて、お茶を出してくれて、頭を下げた。

師匠が占いの続きをしだして、

「うーん、そうだねえ。向いつの家では反対してんだら?」と聞いていた。

「そうなのよねえ。困っちゃって。家の格がどうとか、うるせいいとを言つてきてね。息子さんは娘を気に入つてくれても、親はもつといい家の娘を、と思つていたらしいのよ」

「やつかあ。困ったなあ」と言つて、相談にのつていた。

「カードと内容が違つていてもいいんでしょうか?」お姉さんが帰つてから、かなり経つてから、やつと言えば占い結果がカードと違つていたのを後で聞こえだと思つて聞いてみた。

「ああ、あれねえ。そうだね。相手にとつては一番心配な部分があるだろ? だから、拡大解釈して相手にとつて一番いいと思える言葉に変えただけだからね」

「どうしてですか?」

「占いも大事だけど、相談所みたいなものだからね。だから、相手の話を聞いてあげる必要があるんだよ。自分でも迷つていたり、でも、自分一人で考へるには気が重いことだつてあるだろ? そういうときに誰かに聞いてもらつて楽になりたいと思うからね。だから、今日の話も内緒だからね」守秘義務のことは何度も注意されていた。

「分かりました」

「真珠ちゃんは言つような子じやないと分かつてるけどね。でも、お客様さんはうちを信用して来てくれているからね」

「お金をもらつて相談に乗る以上、ちゃんとしないといけないってことですね」と言つた後に考へていた。

「それより、元氣がないね」

「初恋が実らないと言われてしまつたんです」

「うーん、そうか。僕も実らなかつたし、そつ言われたら、そばにいた人のほとんどが実つてないかもね」そう言われたら、そうかもしない。厳密に言えば、前にもあこがれた人はいたことはいた。ただ、すぐに気に入らないと言つたが、駄目な部分が見えて、熱が冷めたものばかりだつた。長続きしたのは初めてだつたので、初恋と言えなくはないなと思った。

「自分からいかないと駄目でしようか?」

「女の子から行くのもいいとは思つけどね。できる?」と聞かれて首を振つた。

「そうだね。自分がしたいと思えるなら、してもいいね。でも、無理はしない。僕はそうやって選めているよ」

「そうですか。なんだか、言えなくて。相手は大学生で頭も良くて優しくて、完璧なんですね」と言つたら、笑われてしまつた。

「完璧な人なんてこの世にいないと思つけど」

「でも、すごいんです。国立大学に行っているのに偉ぶらないで、私のことも優しく接してくれて、学校の男子と大違いで」

「年齢が上だからかもしだれないな」

「でも、同じ年齢でも失礼な人もいますよ」東条さんを思い出して、首を振つた。思い出したくない。

「そうだね。精神年齢と実年齢が合わない人は大勢いるね」

「私も低いからなあ。恋愛年齢が小学生だと言われることがあって」

「そう? 好きな人はいるんだろう?」

「友達がデートした数が多いから、それで言われてしまつて。私はゼロだから」

「そなんだ。一度、デートしてみるとか?」

「友人に薦められた相手は友達としか見えなくて」

「そうか。じゃあ、無理しなくてもいいんじゃないかなあ」

「先生は恋愛に悩んだことはありますか?」

「うーん、それなりにあつたけどねえ。何しろ、昔のことだし」

「昔ですか」

「僕も一度だけ結婚したことはあるけどねえ。逃げられちゃつたし」

「逃げた?」と言つてから、

「すみません」とうつむいた。

「いや、お客さんもこの辺りの人もみんな知つてるからこいよ」

「そうですか」自分の家のことを思い出した。それだと色々言われるだろうなあ。

「色々あるかもしだれないけど、真珠ちゃんは真珠ちゃんらしくしていればいいと思つよ」

「私らしくですか」うーん、難しいなあ。人の恋愛を占つてばかりいて、友達の「デートや喧嘩話はいっぱい聞いてるけど、自分のこととなると」

「やっぱり無理ですね。よく分からないし」

「明るくしてなさい」と言われて、うなずいた。

帰える途中で東条さんの車が止まつていて、嫌だつたので駆け出したら、慌てて東条さんが降りてきて追いかけられてしまつた。早めに走つたつもりだつたのにすぐに追いつかれ、

「意外と早いな」と言いながら、それほど息も切れていなかつた。

私は、「はあはあ」言いながら、

「離してよ」腕をもたれていたので払つたら、

「何、怒つてるんだ?」と驚いていた。

「無神経にもほどがある。……昨日、何したのか覚えてないとでも……言ひの」息も絶え絶えになんとかそう言つたら、

「ああ、あれ」と軽く言つたので、

「何で、あの人の目の前でああいうことをするのよ

「別にいいだる。それぐらい」

「そ、それぐらいってねえ」呆れてものが言えない。

「あなたと違つて、こつちはそれぐらいじゃないの」

「ふーん、そういうのを大事にしてるんだな」

「あなたはそれほどじやないかも知れないけど、私にとつては大事なの」

「ひょつとして初めてなのか?」と聞かれて、思いつきりにらんだ。

「ふーん、それは知らなかつた。その年だと経験済みが多いと思つてたからな

「あなたとは違う」

「俺は小学生だつたし。しかも、何人にもせがまれて」

「はあ?」

「それぐらい普通だる」

「おかしい。あなたは絶対におかしい」と言い合つていたら、そばを通り過ぎる人がこちらをちらちらと見ていたので恥ずかしくなつた。

「送つてやるよ。ここで話すのもおかしいからな」と言わされて、辺りを見回したら、何人かこちらを見ていた。

渋々送つてもらいながら、しばらく無言だった。

「それで?」東条さんに聞かれても窓の外を見ていた。

「反応は?」

「怒ってるわよ」

「それはお前だろ。あの男はどうだつた? 僕が見たところ、無反応だったからな。だから、あの後も」と言われて、怜奈ちゃんと同じことを聞くんだなと思ったけど、

「抱きしめてくれていただけ」

「あいつが? ありえないだろ。そういうところに気を使わないタイプだな。勉強以外にそれほど興味がないだろ? し、およそデートもほとんどしてないタイプだらうな。うちの学校にもいるから、ああいうタイプ」

「あなた、どこの学校よ」

「宝陽」

「お金持ちの行く学校ね。見栄つ張りなあなたにぴつたり」

「見栄ねえ。確かに。親のエゴも関係あるかもな」「エゴ?」

「父親は特にそういう部分を気にする。ああ、母親も同じだつたな」

「過去形ですか

「うちも離婚してるから」

「『も』? 私のところは違つ

「だつて、今はいなんだろ」と聞かれて、悲しくなつて横を向いた。しばらくしてから、

「『めん』と東条さんが謝つてくれたけれど、説明するのも嫌だつた。

「雪人さんは違うね。あの人は、国立だから」

「東大か?」と聞かれて黙つた。

「じゃあ、別のところだ。H大つて雰囲気じゃないな。T工大か、T農工大？」と聞かれても黙っていたら、

「当たりだ」と笑っていた。

「別にいいでしょ」

「ふーん、なるほどな。そういう感じではあったな。でも、諦めろ」

「なんですよ」

「お前に脈アリなら、それなりに反応するだろ。でも、ノーリアクションだったから。お前の気持ちにすら気づいてないかもよ」

「え？」

「そういうタイプもいるさ。お前がいくら好きだと笑ひ目線で相手を見ていても、それに鈍感なタイプもいるから。あの人はお前がはつきり意思表示しないと分からぬタイプだろ? うーん。

「でも、お前にはそこまで無理そうだ。俺にしておけ」

「やだ」

「即答するな」

「あなたのコレクションに加えられるのは、嫌。いくらでもいるでしょう。デート相手」

「ああ、あれね。デートと言えばデートだけど営業もあるし」

「営業なの?」

「半々かな」

「ホストみたいだね」

「お前、何か勘違いしてないか?」

「家まで迎えに行って、食事をおこなって、相手をほめて、その気にさせて、家まで送つていけば、誤解されるでしょ」

「ああ、そこまではしないよ。ほとんどは女性の奢りだから」

「それはひどくない?」と聞いた。

リサーチ5

「そういう相手しか受けてないよ。いつもが払う相手だとお金が続かないだろ。それに勘違いされない程度で抑えているし、家まで送らない。せいぜい、駅まで。迎えに行くことはしたこともないし」「ふーん、でも、デートでしょ」

「デートと言えばそうかな。でも、リサーチをかねてるし」「リサーチ?」「女性との会話で色々と勉強中だからね」「呆れた。それじゃあ、相手がかわいそりじやない」「喜んでるよ。相手ははづれしそうに食事してるし、気分良く帰つてるし」

「次のデートでも?」

「ああ、合わないタイプ、会話しても底が見えるタイプは一度はないよ。でも、続いても、せいぜい数回程度」「とかえひつかえになるわけだ」「誘われると断れなくてね」「評判が悪くなりそう」「そいつか、俺の周りも似たようなものだけど」「宝陽つて、遊び人のナンパ師が多いって聞いたことがある」「誤解だな。俺は誘われたことはあっても、そこまで誘わないよ。深入りされると困るし」「浅い付き合いなんだ」「広く浅くがモットー。親父と同じ」「お父さんに似たのね。うちの父親と大違ひ」「お前の父親のタイプなら分かるな」「知らないくせに。有名じやなかつたよ」「有名?」「画家だったの」

「ふーん。でも、分かるつて言ったのは別の意味。雪人つて人に似てるだろ? な。性格か顔か、そういう部分が」と言られて驚いた。そう言わせてみたら、確かに似ている部分があった。父も優しくて怒ったところを見たところがない。穏やかで海のような人だった。思い出して辛くなつてうつむいてから、

「気にしない」と呪文を唱えた。

「なにが?」と聞かれても黙つていた。

「画家の娘にしては、趣味が悪いかもな」

「趣味?」

「受けける場所に合わせて服装を選んでこないからな

「え、どういう意味?」

「普通はサバトを受験する前に、リサーチはするだろ。そこの有力者の好みの服装つて言うのがあるだろ? から、それに合わせて服装から髪型とか、色々変えてきてもいいと思つけど。お前は野暮つたかつたから」

「失礼ねえ。普段着で行つて何が悪いのよ」

「今度からそれぐらいは気を使えよ。占い以外にも気配りは必要だ」
そこまで考えてなかつたので、ちょっと落ち込んだけど、
「母子家庭だと無理だよ。あなたのようにおこづかい立つぱりじやない。バイトも許可が要る学校だしね」

「家でバイトしろよ」

「プロキオンと違つて、お客様はそれほど来ないの」

「営業努力が足らないな」

「お坊ちゃんに言われたくない」

「俺は高校までは確かにおこづかいはもらつてたけど、大学からは自力だ。だから、ずっとバイトしてるんだし。友達もあまりただでは占わないからな」

「え、そうなの?」

「母親がそうしたんだよ」

「お父さんがくれるんじゃないの?」

「父親は見栄つ張りだけど、車を買つてくれた程度。おこづかいとか生活費とか、そういうものは親父の秘書が管理していて、俺がもらえるのはお前と変わらない程度のおこづかいだけ。母親は気前は良かつたけど、大学からは『自分で何とかしろ』って言われたからな」

「ふーん、でも、もらえるだけいいじゃない。お姉ちゃんなんて、学校に内緒でバイトして貯めてた」

「ふーん、しつかりしてるな」

「ある部分だけしつかりしてる」

「お金だらう?」と聞かれて、にらみたくなった。

「ああいうタイプは早めに終わらせたくてね」

「え、それで、早めに席を勧めていたの?」東条さんは姉だけは世間話は少なめで、早めに席を勧めて、早めに占つていたように感じた。

「ああ。相手に合わせるからな。せつかちな人には早めに、苦手なタイプはそれなりに、学生は毎回似たような相談だから、それで早めになるし」

「そう言えば、気になつてた。学生割引と内容の濃さが関係あるつてどういう意味?」

「だから、働いている人だとそれなりに悩みが深かつたりするんだよ。学生だと成績や親、友達、恋愛が一番多いからな。それでそこまで時間は掛からないから早めになるだけ」

「料金に合わせて占つてるってこと?」

「そういうわけでもないけどな。働いている人だとじつくり占いを聞きたがる人もいるよ。それで時間が掛かる人が多いだけ。学生だとそこまで熱心なのは少なかつたよ、俺はね」

「あなたの場合はファンが多そうね。雑談のほうが多くなるタイプでしょ」

「それも大切だろ。また、来てもらわないといけない。気分良く帰つてもらい、また、来たいなと思つてもらわないと。リピーターが

多くないと成り立たないからな」「商売上手だね」としか言えなかつた。

「お前もそれぐらい努力しなよ。まだまだなんだよな。じばりく掛かりそうだ」
「どういう意味？」
「俺と付き合つたら教えてやるよ」
「断る」
「即答だな。少しは考えろよ」
「好みじゃない」
「俺は好みだけどな」
「この間から何度も見かけた女性にも同じことを言ってそう」「それなりには並べるよ。相手が喜びそうなことをね。ただし、本気になられたら困るから、抑えるけど」
「ホストになつたほうがいいんじゃないの？」
「同じだろ。話を聞いてもらいたい、優しくしてもらいたいってところはね」
「え？」
「相談に乗るんだから、そういう部分で気を使えよ。お前の場合はまだまだだよな」
「うるさいの」
「あの人は教えないのか？」
「あの人って誰よ」
「お前の先生」
「え？」
「エッジショールで働いてるんだろ」
「何で知ってるの？」
「プロキオンの占い師が教えてくれた。女子高生が働いてるって。近所で評判になつてたみたいでね。それで、分かつたんだよ。お前だろうなって。この間から何度も見かけたのはそれだつたんだと氣

「づいたからな」

「あそこが評判になるものなの？　お客さんのが少ないよ」

「だつて、あそこはある意味、みんなが知ってるぞ」

「どういう意味？」

「だつて……、」と言いかけて、「まあ、いいや。それより、どうだ？　割と評判はいいらしいな。占いとしてはどうか知らないけど」

「どういう意味？」

「ああいう人も占い師として必要だつてことだ」

「意外。あなたは認めないんじゃないの？　ああいう人は。お客さんも少ないので、自分のところは多いから、相手にもしてないよう見えた。街角の占い師なんて認めなさそうに見える」

「馬鹿。意外と、ああいうところはリピーターが多いんだよ。それで何年も続けていたりするからな。の人も同じだ。お客さんは少なくとも大丈夫だろ？」

「そう？　家ぐらい綺麗にした方がお客さんが増えるだろ？」

「商売としてやってるんじゃないかもな」

「え、どういう意味なの？」

「先生に聞けよ。さすがにあの前には車が止められなくて、通りで待つてたけど、逃げ出すことはないだろ？」

「待ち伏せしてたの？」

「その後、どうなったかを確かめたくてね」と笑ったので、

「最悪よ。あなたのせいだね。顔を合わせられない」

「俺にしておけばいいさ。今度、大学にでも遊びに来いよ。学祭の打ち合せもあるし」

「学祭？」

「俺も実行委員会主催のイベントに参加するから」

「ふーん、いいよ、行かない」

「迎えに行つてやるから」

「来なくてもいい。塩を3度もまかれたくない」

「なんだよ、それ？」

「あなたが帰つた後にまいてたからね。よほど嫌われてるよ、あなたたち親子」
「親父が泣かした女の一人かもな。親父も手が早いから」「似たもの親子だ」「携帯番号、後で教えるよ」「絶対に、嫌」とにらんだ。

「また、振られたんだよ」と、クラスメイトの高津が田の前に座つた。

「まあ?」そばにいた連中がいっせいに笑つた。高津は女の子にだまされてばかりいる。男子は女の子の表面しか見てない人も多いから、見た目だけで選んでは、貢がされて終わつたり、二股掛けられたり、化粧が上手だったのに田が大きいと勘違いして、すっぴんを見てから冷めたり、といふことが多く、それでぼやいている人も多かつた。

「かつこいいと言われた」「田が合つた」「ほめられた」と言つた男子が、全部、「俺に気があるようだ」と言つたびに、「ないない」と女子に笑われている。それぐらい勘違いしやすい人も多い。私も田が合つただけで相手が勘違いする田つきで見たり、態度をされたりしたことは何度かあつた。ただ、いちいち相手にしていられなくてほつといた。怜奈ちゃんは何度誤解されているか分からぬいぐらいあるらしく、噂はいくつか流れていた。でも、怜奈ちゃんは、

「ありえないから」と言つていた。相手がかわいいとそれだけ誤解される率が高くなるところが不思議だ。

「男子つて単純だからねえ。また、同じ理由でしょ」とみんなが呆れていた。デートコースを決めていない、途中で無神経な言葉を言つた、ペース配分を考えず歩き続けて疲れさせた。と言つのが主な理由だつた。

「神経つなげるほうを先にしなさい」クラスの女子に説教されて、

「気をつけてるよ」高津がぼやいていたけど、

「つながってるよう見えるか?」そばで男子が言い合つていた。確かに高津は無神経と言われてもしうがないくらい、変なことを

平氣で言つ。「指、太いな」「太つたんじゃないの?」「髪型、前

のほうがいい」と言つては、「それを口に出す必要はないでしょ」

クラスで仕切つてゐる女子にかなり怒られていた。かわいい子以外は

女じゃないぐらこのことを平氣で言つ。

「占つてくれ」高津が頼んできただけ。

「ごめん、無理」と断つた。これで何度もか。気前はいいので映画のチケットをくれたり、イベントのチケットをくれたりして、それはそれでいいけど、

「ごめん。占いはしばらくできなー」

「え、なんで?」と聞かれて、

「みんなも断つてるぐらいだから、『ごめん』頭を下げた。東条さんの言つとおり、中途半端だから、占いができる心境じゃなかつた。気軽に友達に占つのも、今は抵抗があつた。

「なんだよ、いいじゃないか」とぼやいていたけど、

「ごめん」と謝つた。

「無理だつて。何度も注意したつて、それで終わりじゃない。高津が反省して学習したのは見たことないよ。都合が悪いと流すべしに」
女の子が怒つていた。前に高津と付き合つていたらしいとは聞いていたけど、高津とは良く喧嘩している女の子がぼやいていた。

「お前の振られた記録、塗り替えておかないとな」と後ろの席について、紙にバツ印をつけっていた。数字を書き入れて、

「今度も日数が少ない」とみんなが笑つた。

「悪趣味だよ」クラスでもしつかり者の女の子が怒つていたけど、みんなはそういうところで気にしない人も多い。遊びやいたずらが多いから、それで、そこまで気にしていないようだ。男子は落ち着きがないし、女子はおしゃべり好きが多くて、にぎやかなクラスだった。一部の女子を除いて、割と仲がいい。

「ほつとこつ」怜奈ちゃんがそばに座つた。高津は怜奈ちゃんにもデートを誘つていたけど、今は諦めたみたいだ。怜奈ちゃんの好みじやないらしい。

「男子って、何で、何度も同じことを繰り返すのかしらね」「そばにいた女子が言い合っていて、私はぼんやり考えていた。

学校から帰る途中に嫌な車が止まっているのが見えて、「げ、なんで」と思わず言つた。近くにいた神富寺が聞こえたらしく、

「なにかあつたのか?」そばに寄つてきて、「えつと」説明するのももどかしかつたけど、あいつが車から降りてきて、近くに寄つて来てしまい、

「迎えに来た。家に電話しても居留守使うだろ」と言われて東条さんをにらんだ。携帯番号を教えなかつたら、ムーンフェイスのほうに電話をしてきて、「営業妨害」と言つて電話を切つた。その後は全部居留守にしておいた。エッグシェルで待ち伏せされても困るなと思つたけれど、そういうことはしなかつたので安心していたのに、「知り合いか?」と、神富寺が気に入らなさそうな顔をしていた。「ナンパ師」と答えた後、神富寺が上から下まで見た後、「なるほどな」と言つたので、

「誤解してゐるな。俺はナンパなんてしたことは一度もない」と東条さんが反論していただけれど、

「お店でしてゐるくせに」

「あれは営業」

「とにかく、行こうぜ。打ち合わせがあるし」と腕を持つてきて、「絶対に嫌。係わり合ひになりたくないから、一度と来ないで」と腕を払つた。

「約束があるし、お前が何度も電話を拒否するから」

「あなたと関わりたくないの。一度と来ないで」

「そういうわけには」

「嫌がつてるだろ」神富寺が止めてくれて、

「君には関係ないよ」東条さんがそつけない態度だったので、

「俺の彼女にそういう態度しておいて、『関係ない』は、ないだろ」

と神富寺が言い出して、驚いたけど、

「『彼女』ねえ。『今だけ彼氏』に言われたくないな」東条さんがおかしそうに笑つていて、

「これからデートだよ。悪いけど、おじさん、帰つてくれよ」

「おじさんか。似た者同士だな。でも、約束があるから引き下がるわけに行かなくてね」無理やり腕を持つてきて、神富寺がその腕を引き剥がしてくれたと思ったら、次の瞬間、神富寺が反対に押さえ込まれていた。

「え、どうして?」としか言えなくて、

「彼氏の振りして逃げるは無し。そういうのは分かるからね、俺」と言つわけで、「俺の勝ち」と言にながら、東条さんが腕をつかんできて、その後、身体を抱え込むようにしてきて、歩かされて、「ちょっと、大丈夫なの。神富寺」「うずくまつてる神富寺が心配で何度も振り返るうとしても東条さんが無理やり強い力で押ってきて、「大丈夫。それなりに手加減したから」

「手加減つて、神富寺に何をしたのよ?」

「力で抑え込もうとしたから、返しただけ」

「ひどいじゃない」

「お前が素直に従ついたら、こうなつてないだろ。あいつのことばほつとけ」

「冷たすぎる」東条さんは意外と力が強くて、無理やり車に乗せられてしまい、「神富寺が」と言つたけれど、

「言つことを聞けよ。あいつなら、ほら」と見たら立ち上がつていた。神富寺が走つてきて、「何するんだ、オッサン」と怒つていた。最初が「おじさん」だったのに、「オッサン」に格下げされていた。神富寺は育ちは悪くないのでもうこの言葉遣いはしないほうだけど、今は怒つているようで、

「ほら、逃げるぞ」いつの間にか、ドアを閉められていて、東条さ

んが運転席に座り込んでいて、神富寺が追いついたときには車をスタートさせていた。

「ひじかわるよ。神宮寺が心配してゐるから」神宮寺はしばらく車を追いかけてくれたけれど、そのうち姿が遠くになってしまった。

「大丈夫だつて」と言つていたら、携帯が鳴つて、出たら、「すぐに降りる。大丈夫か?」と聞いてくれたけれど、「えつと」と東条さんを見たら、笑つていて、

「笑い事じゃないわよ」と怒つた。

「おい、大丈夫なのか?」神宮寺が心配してくれて、仕方なく、「大丈夫だから、このおじさんと一緒に行かない。結構、しつこいの、このおじさん」

「何度もおじさんと言つなよ」東条さんが怒つていたけど、「後で電話しろよ。心配だから」と言つてくれて、後で説明すると告げてから電話を切つた。

「訂正しろ。おじさんじゃないからな」

「クラスの男子が、『オッサン』と言つてたよ。大学生に彼女を取られた男子だけど

「ふーん、悔しかつたら取り返せばいいだろ」

「無理。その男子、『お金がないから振られた』って言い訳してたけど、素行があまり良くないらしいから」

「そうか。お前の学校つてそこまで荒れてないだろ」

「『ぐ普通だよ。それなりにお金持ちもいれば、それなりに貧乏もいるからね。うちみたいに』

「なるほどな」

「あなたとは住む世界が違うから分からぬだらうけど」

「いや、話は聞いているよ。お客さんで来るからな」

「そつ。女性専門でしょ」

「違うけど」

「だつて、男性を見かけないよ」

「少ないだけだよ」

「先生のところと違うね。秋さんも男性が何人か混じるよ。お母さんは年配の男性も上りてるし。あそこは若い女性ばかりだから驚いたもの」

「客層の違いだけだる」 そうかなあ？ と首をひねつてたら、
「雑誌にテレビで紹介されたら、お前のところもそうなるさ」「昔は来てた。女子高生がいっぱい来てたときもあるけど」「なら、分かるだろ」と言わされて、横を向いた。

「どうかしたのか？」「

「東条さん、男性に嫌われるタイプなのかもね」「嫌われてないよ。友達は何人かいるし」「神宮寺には確実に嫌われたと思うけど」「時間が掛かりそつだから撃退しただけ。ライバルなら当然だろ」「ライバル？」

「彼女にしたいって思つてるだらうから、あいつも」

「『も』じゃない。あなたはコレクションの一人に加えたいだけ。
彼女じゃない」

「ずっと探してたんだ」

「なにをよ？」

「彼女になりそうな子を」

「意味不明」

「そのうち教えるよ。お前は貴重だからな。今までより長く掛かつてるし」

「今まで？」

「それより、あの男のほうがお前向きかもな」

「どういう意味？」

「雪人つて男より、はるかに脈アリだろ」

「あれで？ 神宮寺は友達だつてば。それに、あなたから助けてくれようとしただけ」

「彼氏の振りをしてまでか？」

「いいじゃない。善意の行動よ」

「善意ね。あいつ、お前のことが好きだらうな

「どうして？」

「『雪人さん』と違つて、怒つてたから。だから、言つただろ。気
がある相手ならああやつて反応があるつて。見事に出てたな」「
神宮寺は友達だから怒つてくれたの。失礼なおじさんから守るた
めの嘘をついてくれただけでしょ」

「お前、かなり鈍いんだな。それで占い師見習いなのか？」

「うるさい。それより、私を連れて行く意味がわからない」

「着いたら分かるよ」とうれしそうに笑つていて、

「あなたの行動がつくづく分からぬ。変な人」と言つたらさらこ
笑つていた。

勘違い4

無理やり連れて行かれて、大学に制服で入つていくのは初めてだつたので、ちょっと緊張したけれど、何度も挨拶されていて、

「あなたって、顔が広いね」

「営業もしておかないと、将来の顧客候補」

「商売上手ね」

「当たり前だろ。俺はそれを仕事にするつもりだから、今から準備しておかないと。あいつらは、いつか仕事などで成功するかもしれないしね」

「成功しなかつたら?」

「してもしなくても、相談に来る人はいるだろ? 誰でも、何かがあるだろ? から。親、恋人、結婚相手に、子供ができたら、それで色々」

「ふーん」としか言えなかつた。私はそこまで考へてゐる余裕がなかつた。かなり歩かされて、たどり着いた場所では何人がいて、あちこち話し合つたり、うるさかつた。学園祭の実行委員会ではそれなりに資料を作つていて、絵コンテなんか紙に説明文が書かれたものがいくつか机に散らばつていた。男性が寄つて来て、

「今度の目玉にするからね。占いの企画に花を添えたかつたけど、東条さんの好みにしては珍しいね」と言われてしまい、

「地味ね」そばにいた女性がこっちを見ながらどこか馬鹿にするような雰囲気で、ちょっと嫌だつた。そこまで言わなくてもいいのに。「制服だから、いいよなあ」細い目の男性がじろじろ見ていて、ちよつと気持ち悪かつたけど逃げるようにして、東条さんのそばに行つた。

「あれはなに?」と聞いた。

「占いの企画で、俺の意見を聞きたいって言つからな。それで、お前にも参加してほしいだけ」

「やだ」

「そうこう」とを言つた。ここまで来ておいて

「無理やり連れてきたのは、誰?」と言ひ合つていたら、「あら、珍しいね。いつもはフェリーストなのに言い合ひして」優しそうな綺麗な女性がそばに来たので頭を下げる。

「かわいらしい人ね。珍しいわね。今まで一番若いんじゃないの?」相手に言われて、東条さんを見たら、「小学生もいたから」と答えていた。

「全滅だつたんでしょ。推薦してくるなら、よほど氣に入ってるのね」と言われて、東条さんをにらんだ。いったい、何人、連れてきたんだ。東条さんは笑っているだけだった。

帰る途中で、「お前には珍しい子を連れているな」と、男性が寄つてきて、私をじろじろ見ていて、

「お、また、女連れ」男性のグループが近寄つてきて、東条さんの友達らしく、何か言い合つていた。

「お前も懲りないね。今度で何人目だ?」

「彼女は違うよ。お客さんじゃなくてね」

「ふーん、それで冴えないんだな」とはつきり言われてにらんでしまった。

「気は強そうだ」相手はひるむことなく、笑つていて感じが悪かった。お金持ちの家の出なんだろうなと言つ服装や持ち物で固めていて、好きになれないタイプが多かつた。

「じゃあな。今度も報告しろよ」と、行つてしまつた。

「私が落ちたら報告するの?」と思わず聞いたら、

「良く分かったな」と笑つっていた。前にクラスメイトがやられたことがある。大学生で落とした女の数を競いあつてていたそうで、相手が本気になつたら捨てておしまい。大村よりも性質が悪かつた。

「ああいうのはちょっと駄目」

「はつきり口に出さないほうがいい。あれでも親が力を持つてるか

ら。うらまれたら、お前の店なんてひとたまりもないぞ」「気に入らない相手に、そういうことをするような人たちと付き合つてゐるの?」と驚いたけど答えなかつた。

「送つてもらひながら、
「あなたの場合は友達が悪いから、ゆがんでるのかもね」
「口に出すなと言つただろ。付き合つて損はない連中だよ」とそつ
けなかつた。

「友達じゃないの？」

「さあな」と言つたので、驚いた。

「だつて、宝陽なら、小さじこらから一緒にいるでしょ」宝陽はエ
スカレーター式で、よほど素行や成績が悪くなれば、そのまま上
まで上がれると聞いている。

「友達は何人か変わつたよ。でも、それなりに付き合ひはいるぞ。
親の商売にも関係あるだろ。お前も気をつけろよ。あいつらの言葉
は聞き流せばいいさ。見下されてもね」

「それが友達なの？」

「お前の学校にはいないのか？ 親の権力で威張つてる連中」

「一部だけ。バラバラだよ。そばにも寄れない人はクラスにいるよ。
取り巻きと一緒にいるだけで、行事にもほとんど参加しないぐらい
だし」

「行事？」

「運動系は見学が多いし、学園祭も何もしない。文句は言つけどね」

「ふーん、そういう人もいるかもな」

「だから、クラスでは浮いてる。うちのクラスは無関心な人もいる
けど、割と行事好きが多くて、盛り上がるのが好きだからね」

「なるほどな。あの男もか？」

「誰？」

「神宮寺」

「呼び捨てにしないでよ。あいつは違うクラス。それに、向こうの
クラスはバラバラで行事も無関心な人が多いらしいから。担任がや

「それはあるかもな。担任の性格がクラスの気質に影響はあるだろ
うな」

「そうかも。友達の性質が女性をとつかえひつかえするのに影響があるのと同じ」

「どうか？ 僕の場合はあいつらの影響もあるかもしないけど、親父のほうが強いね。向こういつもドートーに忙しくて家になんて帰っこなかつたし」

「今も？」

「付き合いで多いからね」

「ふーん、あなたも卒業したら同じことをしそうだね」「しないよ。しばらく見習いだし」

「でも、今と同じことを続けそうだね」「さあな、飽きたらやめる予定だけだ」

「やめられるの？」

「お前が付き合ってくれたら、やめてやるよ」

「私には関係ない」

「関係あるさ。それに、女性心理を勉強するにしても、最近はマンネリ化してきたから、そろそろ本命を見つけてもいいかもな」

「本命ってね」と呆れていたら、「俺で勉強したらいいさ」

「勉強にならないでしょ」

「男の本質、女の本質を知らないと占うには無理だろ。お前は基本的に恋愛関係の勉強がなつてない」

「だからって、とかえひつかえ女性と付き合いでどうするのよ」「色々なパターンの女性がいるから、勉強してるだけ」

「ものは言いようね」

「人のことをとやかく言つ前に、初恋相手とドートーしてたらう。一度、男女の関係になつたら、相手の本質が分かるぞ」

「だ、男女……」とそれ以上言えなくて、顔が赤くなつていたらし

く、

「顔が赤いな。これだから、お子ちゃんは困るね。占いで来る女性の一番の悩みは恋愛。今からでも遅くないから勉強したら、それとも、俺が教えてやる「つか」

「あなただけには教わりたくない」

「あいつには無理だと思つけど。同じ年でトーントーしても、喧嘩して終わらう」

「あなたとも同じだと思つ」

「デートしてから言えよ」

「絶対に嫌」

「余裕がないねえ」

「絶対に無理だよ。母は反対するからね」

「母親に反対されたぐらいで諦めるのか?」

「心配掛けたくないし」

「子供だな」

「お姉ちゃんと同じことはできなによ」

「なんで?」と聞かれて黙つた。

「勇気がないだけだろ」

「違う」

「じゃあ、なんだよ」

「言いたくない」とそつぽを向いた。

神宮寺には電話はしたけど、怒りていて、なだめるのは大変だったけど、学校で会ったとき」
「あいつ、やめておいたほうがいいぞ」「言つてくれて、ため息をついた。私もそう思うけど、向こうはそういうのでしつこいそうだ。よほど、振られたくないのかもしれない。武勇伝に泥を塗りたくないだけかもしれないな。

「俺が追い払つてやるから」

「いいよ」

「恋人として追い払つてやれば」

「その手は使えないんだよね。」の間のもバレちゃつてて

「本当にすればいいだろ」と言つたので驚いた。

「どういつ意味?」聞いてから後悔した。真面目な顔をしていたからだ。それで田をそらした。

「お前、俺のこと、どう思つてる?」と聞かれて、考えてしまった。そんなことは考えたこともなかった。

「ごめん、友達」

「それ以上は?」と聞かれて、

「ごめん」と謝つた。雪人さんのことばかり見ていたから、神宮寺が言つてくるとは夢にも思わなくて、考えられなかつた。

「一度考えてみてくれよ」と言わされて神宮寺を見た。

「だつて、神宮寺は何度かほかの子とデートしてたから、私は好みじゃないんだと思つてたし」

「言えなかつただけだよ。そういう顔をするだらつと思つてたし」と言われて驚いた。

「え、どうして?」

「鈍すぎる。俺が告白したら、お前は困るだらつと思つてたからな。

お前、大学生で好きなやつがいるだろ」

「どうして知ってるの？」

「クラスの女子に聞いた。お前と澤井が話していたのを聞いていたみたいだぞ」怜奈ちゃん以外には教えてないから、誰かに聞かれてしまったのかかもしれない。

「ごめん」

「その人と付き合つつもりか？」と聞かれて首を振った。

「無理。あの人は私のことなんて、見てくれてないらしい……から」態度の違い、確かにあるかもしれない。神宮寺のあのときの態度は雪人さんと明らかに違っていた。

「そうか。だったら、考えてくれよ」

「そう言われても」

「嫌なのか？」

「違う。神宮寺とは友達として見てたから、いきなり言われても、どう考えていいか」

「じゃあ、今から考えろよ」そう言われても、苦手だなあ。いついうのってどうしたらいいんだろ。

「やつぱりそうだったじゃない」帰ると同時に怜奈ちゃんに相談した
ら、呆れられてしまった。

「どうしたらいいと思つ？」

「自分で決めなさい」

「それは分かつてるよ。占ひでも人にはそういうことは言つてるけど、これ、自分のこととなると困る」

「東条さんはどうするのよ？ 噂にはなつてたよ」それは嫌というほど聞かれたから分かつている。神宮寺とのやり取りを見かけた子が好き勝手付け足して噂を流してくれたらしく。

「無理。あいつだけはありえないよ。一番苦手だから」

「そう？ 意外と向こうは本気かもしれないよ」

「やう思えないよ。とかえひつかえの現場を見た後に誘われても、うれしくもなんともないよ」

「それでもめげないかもしれないね。あの人、慣れてはいるだろ？」
しね。強引だし」

「ほつとぐ。関わりたくない」

「雪人に告白したら」

「振られるの怖い」

「振られるかどうかは分からぬでしょ」

「毎日、会つからぬ。それになんだか悪くて」

「どうして？」と聞かれて黙つた。

「ひょっとしてお父さんのこと？」と聞かれてうなずいた。

「真珠の恋愛音痴つてそこから来てるかもね。ファザコンなんじやないの」

「違うよ。お父さんにちやんと紹介したいの。今はそれができないから」

「そう」怜奈ちゃんがこちらを見ていた。

「雪人に何度も告白しようと思つたけど、でも、なんだかできなくて。お父さんがいてくれたら、どう言つてくれただろうなあ」

「真珠のことを一番考えてくれると思つけど。真珠が笑顔でいることが一番だと言いそうだね」

「笑顔か。確かにそれは何度も言われた」

「好きだったら、言つてみたら、卒業されちゃつたら困るでしょう」と言われて考えていた。

雪人さんの住んでいるところに行つて待っていた。怜奈ちゃんに言われて、その勢いでこうして来てしまったけど、やはり戻つたほうがいいかなと思つていたら、雪人さんがやつてきて、「どうしたの?」と優しく聞いてくれた。「父に似ているはずだと、東条さんが言つたけど、顔は全然似ていない。雰囲気は、似ていなくもないけど……」という程度だつた。

「あの」

「話があるの?」と聞かれてうなずいた。人がいると話せないと言つたら、雪人さんが家に入れてくれたけれど、玄関を少しだけ開けて靴をはさんで、チエーンだけ掛けていた。ドアも少し開けていて、「女の子と一人きりだと誤解されると困るからね」と笑つていて、意外とこういうところは気を使うんだなと思っていたら、

「研究室で注意されてね。夜遅くだと、ああするんだよ」と、ドアの方を見ていた。

「え、なんですか?」

「問題が起きた学部があつたらしくて、それで、指導に従つて、そうしているんだよ」そうか、それでねと驚いた。

「秘密の研究してると困っちゃうでしょう?」

「そこまではないよ。確かにいくつかの研究室では外部持ち出しファイルがあると思うけど、僕のところはそこまではないからね」と笑つていて、笑顔が優しくて、やつぱり素敵だなあと見とれていた。「今日はどうしたの?」と優しく聞いてくれたので、「あの」とつむいた。資料が山積みされていて、「勉強、大変ですね」と言つたら、

「ああ、試験勉強だよ」と言つたので驚いた。

「試験?」

「地元の大学院に行きたくてね」と言つたので、びっくりした。

「え、帰つちやうんですか？」雪人さんの田舎は雪が多くて、産業はほとんどないから、地元に帰らない人が多いと聞いていたから、このままこちらで就職すると思い込んでいた。

「できればそうしたいと思ってね」と笑顔で言われてうつむいた。

「帰つちやうんだ。ずっと、一緒にいられると思ったのに。」

「真珠ちゃん？」私がうつむいていたら、雪さんが心配そうにしていて、「寂しいです」と正直に言つたら、

「僕もだよ」と言つてくれたのでうれしかった。

「あ、あの」と言つていたら、電話が掛かってきてしまい、「え、研究資料？ そこにあるはずだけど」と言つて部屋を探して、いくつかあるファイルを探した後、

「ここに紛れ込んでた」と言つて、しばらくしてから、

「『めん。今日、提出の資料を僕のと間違えて渡したりじくて、持つて行かない』と取りに来ないんですか？」

「無理だよ。時間がないらしいから」

「優しいですね。向こうが間違えたんでしょう？」と聞いたら優しく笑つて、

「間違いはお互い様だからね」と言つた顔を見て、やつぱり素敵……と思つた。

東条さんにしばらく会わなくなり、ほっとしていたのに、勝手に家に来てしまつた。母が塩を持って仁王立ちしていて、

「ひんにちわ」営業スマイルで東条さんが笑つたけど、

「一度と来ないで。塩を掛けるわよ。この家が穢れる」母が怒つていたけれど、

「真珠さんは？」と聞いていた。

「出かけてるわ」

「携帯番号を教えてもらえませんか」

「絶対に嫌です」

「親子そろって似たようなことを言いますね」

「あなたも父親似ね。笑顔も『まかし方』も同じだわ。だまされないからね」

「父と何かあつたんですか?」

「あの男にでも聞けばいいでしょ。もつとも言えないでしようけどね」

「どういう意味ですか?」と言いかけていたところを帰つたら、「ああ、遅かつたな」と言われてにらんだ。エッグシェルには時々行く程度にして、秋さんに紹介してもらつた場所で下働きをしながら、見学を時々させてもらつていて、

「ちょっとね」と言つてから、塩を持つている母を見て、「いくら嫌いでも、直接掛けないでよ」と、呆れた。

「この男にだまされたら駄目よ。父親と同じことをするに決まってるわ」

「父が何か不快になるようなことでも」「東条さんが平然としながら聞いていて、

「父親に聞いてみなさいよ。『藍子』^{あいこ}と言つた前を覚えていたら教えてくれるでしょうね」

「藍子?」「東条さんが不思議そうな顔をしていて、

「お母さん、もう、いいから」と追い払つた。

「変わつた造りだな」東条さんが店内を見回していた。

「昔、カフェをしていた時期があるだけ。それより、用件は何?」

「携帯番号を教えろよ。ムーンフェイスに掛けてもつながらないと困る。連絡したいからね」

「断る」

「お前のところも宣伝してやるから、いいだろ」

「宣伝?」

「学園祭でお前の名前とお店の名前をチラシなどに入れるだけ。宣伝効果は薄いかもしぬないが、それぐらいはしたほうが良さそうだ

ぞ。おこづかいが増えるかもしれないからな」痛いといひをついて
くる男だなと思つたけど、
「でも」と母がいるほうを見てから、
「しょうがないな」とため息をついた。

必要な場所1

東条さんから電話があつて、呼び出された。学校から少し離れたところに待ち合わせをした。噂のネタになりたくなかつた。

「どうした?」私の顔を見て聞かれてしまい、

「なにも」と答えた。こいつと会つてるとあれこれ言われそうだなと考えていたのが顔に出でていたらしい。

「占い師になるつもりなら、お客様の前だけは平常心を保てよ。まあ、パフォーマンスで売るなら別だけどな」

「パフォーマンスね。母の知り合いにはいるけど、キャラを変えてばかりいるって聞いてる」

「ああ、それはあるのかもな。飽きられると人が来なくなるから、それで変えているんだろうな。うちではそういう人は取らないようにしてるけどな。一時的に人気が出たとしても、ずっと人を来てもらうには難しいからね」

「そうなのかな?」

「リピーターが多い人にはそれなりに理由があるんだよ。固定客が多い人はそうだからね」

「あなたも?」

「俺は見習いだからな。今の一一番人気の人は割と長く一位を維持しているし」

「一番人気?」

「ロビーの掲示板にあつただろ」

「そうだっけ?」

「人気順で載せてあるから、絶えず入れ替えしてるので、部屋の広さも料金も違う。お茶のサービスをつけたりしてると人もいるし」

「お茶ですか?」

「ハーブティーを出してるんだよ。気分が落ち着くようにと自分で用意してる。料金が高いのは一番広くて調度品が高級だから。人気

が高い人から広い部屋になつてゐる

「え、 そうだつたんだ？ あなたのところも綺麗で広かつたじゃない」

「俺は見習いだから、 あれは一番下のランクの部屋。 今度、 お客がいなきときにも見せてやるよ」

「いいよ、 そこまでしてもらわなくとも」

「普通の女なら喜んで見ていくぞ」

「私はあなたに借りを作りたくないだけ」

「いいじゃないか。 ライバルに育てていいだけだし」

「ライバル？」 と驚いた。

「何人が候補はいたよ。 荒削りだけど勘が良かつたり、 筋が良かつたりした人も多かつた。 でも、 途中で駄目になるケースも多くてね」

「どうして？」

「恋愛に走ると占いの勘が鈍るからな。 お前は恋愛してないみたいだから、 大丈夫そうだ」

「ふん」と横を向いた。

「恋愛にのめりこむことだけはしそうもないからな。 そのほうがいいぞ。 適度に抑えろよ」

「あなたの場合は抑えてるんじゃないでしょ。 広く浅くのほうが都合がいいだけじょ」

「そうか？」 と笑っていた。

「Jの間の男とは進展は？」 と聞かれて横を向いた。

「その分だとのないな」 雪人さんにはその後も会つたけれど、 結局言えなかつた。 帰つちゃうのがかなりショックで、 卒業したら会えなくなるのが寂しくて仕方がなかつた。

「なんて、 顔してるんだ？」 東条さんに言われて、 「あなたに関係ない」と言つたら笑い出した。

「お前は母親似だな」

「そう？ あまり似てないよ。 容姿はおねえちゃんのほうが美人でお母さん似だと言わされて大きくなつたよ」

「今はお姉さんはそれほど似てないだろうな。お前のほうが似てる。小顔で、目元が似てるし、かわいらしい顔だから。お姉さんは丸顔だけど、ちょっときつい感じだよな。性格も何もかも。後はお金優先」

「そこまで言わないでよ。身内なのに言われるとちょっと困る」「当たつてるからだろ。ああいつタイプだけはどうも苦手だな。自分優先の女は昔から駄目。わがままを聞きたいとも思えないし」「ふーん、トラウマ?」と聞いたら黙っていた。

必要な場所2

大学で実行委員会が揉めていた。一部は熱心に動いて計画を話し合っていたけど、一部の人は女性と話していて、

「そこ、気が散る」と怒られていた、

「つるさいよな」と相手が怒っていた。

「もうすこし詰めてから参加するよ」

「原西は、いつもそれだな」と言い合っていて、高校の学園祭とは違うなと思った。学園祭もそれなりにはやっているけど、勉強優先の人はそれなりしか参加しないし、一部のお祭り好きが意見を言い合ってまとめている。後はそれに付いていくだけという形が多くつた。今度は自分の意見を通したい人が多いクラスなので、うるさそうだったけど、先生は「楽しそうでいいな」としか言わない。ほとんど干渉してこない先生だった。

「東条君、どう?」「紙を渡されていて、

「お前もあるか?」と東条さんに紙を見せられて、

「ここはこうしたほうが」東条さんがいくつか注意点を挙げていた。「時間と予算が掛かると困るでしょ」と言い合っていた。占いをみんなの前で見せるとか、占いボードを作つて、それで参加してもらうとか、色々案が並べられていて、そのうち、いくつかに丸がついていた。

「これだと盛り上がりがないかもしねないな。うちの田玉はミスコンと公開合コンぐらいなもので、後は適当にバンド演奏がある程度だし」と言い合つていて、良く分からなくて聞いていた。

「公開合コン」と思わず言つてしまつたら、

「ああ、高校つてやらないの?」とそばの人へ聞かれた。うれしそうに私のほうを見ている。でも、制服を何度も眺めるのがちょっと嫌だった。

「さあ。そういうのはあまり」とだけ答えた。そういう話はチラツ

としか聞いてない。集まりみたいなものに参加して知り合つと聞いたことはあった。

「学校でも人気のある学生同士で合コンするんだよ。選抜された子が出場するため、レベルが高い子が多いだろ？から、参加希望が多くてね」そばの男性がうれしそうに答えてくれた。

「俺、学校の子はそれなりに把握済み」と原西さんが言ったため、「お前の場合は出会いすぎなんだよ」とみんなに笑われていた。確かに簡単に携帯番号を聞きそうな顔をしていた。

「尚毅には負けるだろ。いつも、女連れだろ」と言われていて、「ああ、あれはやめる予定」と東条さんが言ったので、「嘘だろ。あれだけ続けてきて、やめられるわけがない」「そうだよなあ。お前、いつたい何人と付き合って、本命がいたのかいないのか」

「いないよ」東条さんが軽く答えていた。

「まさか、この子に絞るつもりじゃないだろ？」「原西さんが笑いながら聞いていて、

「さあね」東条さんは軽く流していた。

必要な場所3

送つてもらいながら、

「私は参加しなくても良さそうに見える」

「お前にも占つてもらひが必要が出てくるかもな。公開占いもしたいつて言う話が出てるぐらいだし」

「え、人前では絶対に無理」

「なんで？」

「アガリ症だし、集中力が途切れると占えないの」

「ふーん、誰がいても占いができるぐらいにしておけよ」

「無理。日によって違うから。占えない日があるぐらいだし」

「それじゃあ、無理だろ。プロになれそうもないな。素人止まりだな」

「そう言われても」と横を向いた。

「女性だと気分で差がある人も中にはいるけどな。親父の秘書みたいなことをしてる善波さんがそつだから」

「善波さん？」

「美人だけどきつい性格だ。うちの金庫番だから親父も頭が上がりないぐらい。俺もどちらかと言つと苦手」

「苦手な女性なんていないとと思った」

「隠してるだけ。それが分かるとお密も嫌がるだらうから」

「そう」

「それより意見を言えよ」

「言いづらいよ。みんな年上だからね」

「お密さんはお前より年上も来るだらうから、慣れろよ」

「じゃあ、お守りを作つたら」

「お守り?」

「あなたの店でも売つていたじやない。あれを学園祭で売るの」

「そんなものを買つ人がいるものなのかな?」

「学園祭限定バージョンを売るの」

「売れないと思うけど」

「じゃあ、おまけ付き」

「なんだよ、それ」

「パワーストーンとかそういうものを10個あるうちの1個に入れておく。当たった人はラッキーと思うだろ？」

「それだけでは満足しないと思うけど」

「じゃあ、更に当たりくじを入れたら」

「当たりくじってなんだよ？」

「当たり券を入れておくの、品物は、そうだな、何か商品を」「そんな予算はなさそうだぞ」

「だったら、あなたに占つてもらえるっていつのは？」

「ふーん、なるほどな。それなら売れるかもしねないな

「と、適当に言つてみただけ。責任持てないからね」

「お前の場合は呂れるな」

「前にそういうのを学園祭で売りたいって言い出した女の子がいたの。でも、先生に反対された。ギャンブル要素が強いものは困るって」

「先生が言いそうな言葉だな」

「だから、それを思い出して言つてみただけ。ただ、そのときは外れぐじは飴玉と交換だつたから」

「お守りは？」

「お守りは売つてないよ。ただ、あなたの店でストラップとかパワーストーンとか売つてたから、そういうのを売つてみたらどうかと思つただけ。個数を限定したらそれなりに売れるかもしれないし」

「個数限定ね。そのほうが売れ残る可能性は低くなるかもな。清水が喜びそうだ」

「清水？」

「実行委員長。ひょっとしてお前、紹介したのに名前と顔が一致しないとか言つくなよ」

「『』めん、すぐ逃げるつもりだったから」

「お前、完全に舐めてるだろ」

「違う、あなたと係わり合いになりたくないからね。原西さんは覚えたよ」

「お前にやたらと話しかけたのが佐藤。それから、美人がいただろ、彼女が浅木さん」

「あなたの本命？」

「ああ、いい勘してるな。隠してもバレそうだから言っておいたほうがいいか。元カノだよ」と言わされて驚いた。

必要な場所 4

「元? 今じゃないの?」

「お前の母親と同じだよ。後腐れはないよ、彼女のほうは」「母親?」

「親父に聞いてみた。『藍子』なんて名前は珍しいから覚えているだろうと思つたら、反応があつた。多分、昔の彼女だな。お前の母親の態度はそう見えた」

「えー、ないよ。母の好みと逆だよ」

「好み?」

「父は優しくて野心家じゃないもの」

「親父は野心家と言われたらそつかもしれないけど、態度は洗練されていいると思うナビ」

「そう? テレビで見たときは、そう見えたけど」

「母親の解説つきでだろ。そうすれば色眼鏡で見るに決まつてる。学校の先生を見下している生徒の親も先生を信頼していないことが多いからね」

「そうだっけ?」

「それと同じだよ。だから、親父と直接話してから意見を言えよ。自分の意見をね」

「そう言われても」

「自分の目で見て確かめてから言えってこと。第一印象だけで決めるな。話してみたら性格が違うことなんていいへんでもあるからな。ただ、そのままの人も多いけど」

「あなたの友達とは話してみたいと思えない」

「口に出すなと黙つただろ。あいつらに根にもたれるとやつかいだ

「そういう相手とどうして付き合えるのかが不思議」

「そうか。お互い似たような価値観だと違和感はなくなるだろ」

「あなたも同じなんだ?」と聞いたら黙つた。

「女性に対しても、それほど好きになつたことがないのがもしかれないね」

「知ったような口を利くな。恋愛初心者」

「そのことは言わないで。何度も怜奈ちゃんに怒られた。人の恋愛を占っている場合じゃないって」

「あの先生のところにいても、そういう方面では占えないぞ。あそこの顧客は年配が多いから。お前は別のところに行けよ」

「別のところ?」と聞いた。

東条さんに連れられて一緒に歩いていた。街角で占い師が誰かを占っていた。相手は学生だろうなと思える年で、私より若いかもしれないなと思った。少しだけ離れたところで東条さんが止まつた。それで、「会話するような振りしろよ」と小声で言いながら、そばでその人たちの声を聞いていた。占い師が女の子を何度も叱つていて、「馬鹿だねえ。ちゃんと言わないと」「駄目だよ、それじゃあ」と何度も怒られているのに、女の子はうなずいていて、最後は泣き出していた。

「泣くんじゃないよ」と慰めながら、色々と説教をしたりアドバイスをしていた。

「あれつて」さつきの一人からかなり離れてから東条さんに聞いた。「占い師でも色々いるんだよ。人生相談や子供の相談相手までね。ああいう子があそこに行くのには訳があるんだよ」

「どんな訳?」

「いい親、いい家庭ばかりじゃないからな。中には親が暴力を振るう、無関心、そういう親もいるからな。成績だけで判断したり、兄弟と比べたり、親の基準に合わないと見捨てられたり。家出したりする子はプロキオンにはあまり来ないしね」

「そう。でも、何で、あの子は叱られても怒らないんだろうね」

「逆。叱つてもらいたいんだよ。親が無関心な家かもしれない。他の誰かにかまつてもらえるのがうれしいってこともあるんだ」「そうなの?」

「怒つてもらつたり、話を聞いてもらつたり、それだけでうれしいんだろうな。受け止められたと思えるんだろう」「え、どういう意味なの?」

「家に帰つても、親と会話がないところもいくらでもあるんだよ。

携帯で連絡さえ取れたら、それでいいと言つて、家に帰らない子もいるからな。お前の学校にはいないのか？」

「夜遊びがすごいらしいと言う噂は聞いてるけど、話したこともない。学校でもほとんど話さない子がいるから」

「じゃあ、その子もそういう事情があるのかもしれないな」

「そう」

「受け止めてくれる場所があればいいけど、そういう人も場所もない人だと、ああやつて話を聞いてもららうんだよ」

「先生に相談するとか」

「それは無理だらうな。先生にお前、家庭の事情を話せるか？」と聞かれて首を振った。

「そうだろ。自分の名前も知らない人だから言えるつてこともあるんだと思う」

「そう言われるとそうだね」

「カウンセリングとか相談所とか日本だと通つのに抵抗があるけど、占い師だと芸能人や有名人も通つてたりするだろ。それで、抵抗が少ないんだろうな」

「相談する場所として必要つてことなの？」

「自分ひとりで解決できなくても、話だけでも聞いてもらいたいものだと思うけど」

「あなたはどうして分かるの？」と聞いたら黙つた。

「女性と多く付き合つたから分かるの？」

「お前より年上だからな」

「そう？」

「お前も経験を積め。視野を広げるところからやらないとな」

「分かつてるよ。さすがに気軽に占えなくなつたから。今は断つてる」

「占えばいいだろ。練習を積んでもらつ必要があるからな」

「え、どうして？」

「人前で占つてもらうことになるから」と東条さんがにやつと笑つ

ていた。嫌な予感がする。

バイトの理由①

東条さんから提案されたことを親に相談した。見習い料金で占つを始めるように言われたからだ。

「学校でもお金を取り気なの？」

「それは無理でしょ。問題になるから。お密さんとしてここに来てもらつて、練習代として払つてもらつよう」と言われて」

「誰に」母がにらんだ。仕方なく事情を説明した。東条さんの大学の学祭で占つでの協力を頼まれたこと、そのために練習が必要なことを。

「駄目よ。あの男に関わつては駄目」と怒られたけれど、宣伝のために必要だと説明した。

「あの男がそつ言つたの？」と聞かれて、

「確かに癪に障るような男だけど。背に腹は変えられない。宣伝になりそうなことならやつてみたいし。練習も積んでおきたいから」「学校を卒業してからでもいいでしょ」

「お金を貯めたいの。一日でも早く」

「なら、ちゃんと就職して」

「お父さんを探したいから」と言つたら母が黙つた。

「お金を貯めて時間を作つて、ちゃんと探したいの。だから」とうつむいた。

「真珠」母が名前を呼んだ後、黙つてしまつた。

「ここにお客さんを増やす必要があるし、私も経験を積みたいの。だから、お願いします」

「真珠。お父さんがいなくなつて、もう、何年も経つてるのよ」「分かつてること、でも、気にするなと言われても気になるの。お父さんがいなまなんて耐えられない」

「真珠、あなた」と言つてから、

「しょうがないわね」と母が言つてくれて頭を下げる。

学校には先生に相談して、先生は渋々了解してくれた。今までの家での手伝いをするという報告しかしていなかつた。

「そこに行く生徒が増えるのはどうかと思いますが」と女の年配の先生が田ぐじらを立てていたけれど、先生が事情を説明してくれた。父を探すためにバイトをしていることを。学校にはやむを得ず本当のことを話しておいた。

「そう、そうだったわね」とその先生もそれ以上言えなくなっていた。

バイトの理由2

怜奈ちゃんに相談して、その後、占いを頼まれた子に事情を話した。

「うーん、しょうがないなあ。学園祭って、どうにつけとあるの？」と聞かれて、

「さあねえ」としか言えなかつた。クラスの子には父を探すとは言えず、学園祭に参加するために練習する必要があるし、お金も必要だからと教えておいた。

「頼りないなあ。面白そうだったから、チケットお願いね」と言われてしまった。

「そう言われても、そこまで仲良くないし」仲良くしたいと思えな人が一部混じっている。東条さんのお友達と言う人も好きになれない。遊び人っぽい人はどうも苦手だった。

「じゃあ、お店に行くね」と何人かが言つてくれて、「協力お願いします」と頭を下げた。

「大丈夫か？」神富寺がクラスに来て聞いてきて、移動した。事情を話したら、

「あの男だけは関わらないほうがいいと思うけど」

「最近、お店にお客が減ってきて、やむを得ずだから」

「でも、あいつ、手が早そうだし強引だし」

「そこは気をつけるつもり」

「お前、考えてくれたか？」と聞かれて、どうしても考えられなかつたとは言いづらかつた。

「そういう顔をするなよ。俺としてはお前とちやんと付き合いたいつて思つてるし」

「勉強があるのでしょ」神富寺は大学進学を目指して勉強している。お兄さんも有名大学に通つてゐるため、負けたくないらしい。

「分かってるよ。息抜きにお前と一緒にテー^トしたいだけ」

「そう言われても、私は」

「映画ぐらこ付き合^えよ」

「忙しくなるから、無理だよ」

「あいつとは行くなよ」

「分かってるよ。さすがにね。父に怒られそつだから」と言つたら

神宮寺が黙つた。

「でも、ちょっと許せないよな」神宮寺が話題を変えるように言つて、出しつけ、

「なにが?」と聞いた。

「あいつ、何かやつてるのか? 護身術か何か

「さあ、どうして?」

「だつて、俺、力では負けないと思つし、運動神経はいいからな。それなのに軽くやられて悔しいから、聞いておけよ」

「なんで?」

「負けたままじゃ面白くない」

「それは分かるけど、聞く必要があるの?」

「敵の力量を測る必要があるから」完全に敵になつてゐるよ。

「ほつとけばいいよ。神宮寺と身長が違つだけだし」

「俺より高いのが気に入らない」神宮寺は割りと背は高いほうだけど、東条さんはそれより更に高かつた。

「そう言えば、父親に似てるから、それでかもね」東条の父親は武道をやつていてもしかなくて、そう言つた。

「俺は良く知らない。そういう方面は詳しくないし」

「男子つて占いに興味示さない人がいるからね。神宮寺も同じだも

のね」

「俺が興味があるのは占いじゃなくてお前だけ」と言つてむせた。

「占いができるよとできまいと俺はお前自身に興味があるからな。だから、あいつに近づくなよ。あいつはお前が占いができるから近づいてくるだけだから」

「やつぱりそう思つ？ 言葉の端々にそういうのは感じるんだよね。占いしてなかつたら見向きもしないだろうね。あの人、乗つてる車はいいし、持ち物も高級そつだつた。それに比べてつちはちょっとなあ。住む世界が違つすぎるし」

「バイトがんばれよ。真珠はそのまでかわいいと思つから」と言われて、思わず赤くなつた氣がした。友達だと思つていた男にいきなり言られて、ちょっと恥ずかしくなつた。

「うぶだ」神宮寺が笑つていて、

「うぬせこ」の「にらんだけど、ずっと笑つたままだつた。

バイトの理由③

久しぶりに橋添先生のところに寄った。あいかわらず汚かつたけど、

「看板を持つきました」と言つたら、

「なんだ、気を使わなくて良かつたのに」と言われたけれど、新聞紙に包んであつたボードを取り出した。

「かわいい感じだね」と先生が笑つた。

「エッグシェルって感じで頼んだら、これです。うちのムーンフェイスは丸顔つて意味もあるから、それで丸顔の女の子の絵が入つてるので。妖精だから、かわいいでしょ」卵の殻から飛び出した妖精の絵が描かれていて、その横にエッグシェルと書いてある。

「でも、この看板で入られたら、詐欺と言われそうだ」と先生が言ったので、

「きっと……大丈夫です」と言ひて、看板をどこに飾ろうか相談していった。

「エッグシェルって、どうしてつけたんですか?」最初に聞いたけど教えてくれなかつたので、再度聞いたけれど、

「そうだね、色々な意味があるよ」と笑つていた。その後、電話が鳴つた。先生が出て、お客様だと思つていたら、

「え、また?」と親しそうに話していた。でも、様子が変で、

「今すぐは無理だよ。そこまですぐには、……しかし、……しちょうがないな」と言つて電話を切つていた。先生は、

「出かけてくるよ。すぐに戻るから」と言つて、一度2階に上がつてから外に出かけてしまった。

「先生遅い」フラツと遊びに来た近所のおばさんが、

「まあ、ここは開店休業状態だし」と笑つていて、一緒にお茶を飲

んでいた。

「慣れたの？」と聞かれて、世間話をしていたら、「用意できたの？」と女の子が入って来て、驚いた。化粧が濃い。どこまでもが目が分からぬいぐらい塗っている。服装は派手で、ここにお客としてくるような人には見えなくて、

「先生は今、留守ですが」と言つたら、

「あのジジイ。待たせやがつて」と怒つていた。

「早くしやがれ」と言つて、テーブルを蹴つたので、

「なにするんですか？」と怒つたら、意外にも近所のおばさんが止めてきて、

「うるさいね。あんたは引っ込んでろ」とすげんでいた。おばさんが小声で、

「お孫さんだよ」と、教えてくれた。さすがに驚いてしまった。先生は何も教えてくれていなかつた。

バイトの理由④

「ここまで、待たせるんだよ。おせえよ」と橋添先生の孫と言う人が、ずっとぼやいていて、やがて先生が戻ってきて、「おせえよ」

「その言葉遣いはやめなさい」と先生が優しく言つたけど、

「あんたに言われたくないね」と女の子がにらんでいた。

「早くしろよ。待たせてるんだからさ」とその子が言つたけれど、

「言葉遣いを直さないと駄目だ」と先生に言われて、渋々、

「次から考えてくるよ」と言つて、先生に手を出していた。先生が上着から封筒を出したらひつたくるようにして、中身を確かめていた。札束だった。一万円札が何枚も入っていたので、びっくりした。「何だよ、言つた金額より少ないじゃないか」と女の子が怒つていた。

「さすがにそんなに渡せないよ。友達が病気と言つのは本当か?」と聞いていた。

「ある意味、病気。じゃあな。また来るよ」

「言葉遣いを直しなさい」と先生が言つたけれど、女の子は聞いておらず、さつさと店から出て行つた。

「悪かったね」先生が言つたけれど、何も言えなくて、

「渡さないほうが良かつたんじゃないのかい。あれじゃあ、遊ぶ金にしか使わないよ。病気とは思えないよ。友達が病気なら、その友達の親に頼るだらうし」と近所の奥さんが言つていたけれど、先生はため息をついていた。

「あなたのお金が目当てだらうね。縁は切れているんだから、渡さないほうがいいよ。あの子はどんどんエスカレートして、金をせびりに来るだらうし、そのうち、よくない友達を連れてくるかもしれない」

「そうは言つけど」先生が困つていた。

「やめたほうがいいよ。いくらお金が余つてることしてもね。それぐらいなら店を立て替えたりしたほうがいいよ。真珠ちゃんだから、綺麗なお店のほうがうれしいだろ」と言わされて、先生を見た。

「いや、ここはこのままでいいよ」

「物騒な世の中だよ。あの子の友達が来たら困ることになるよ。知り合いでいたからねえ。金の無心されたらしくて、親も見離しているような子だつたから、大変そつだつたよ」

「困つていると詰つからね」

「人がいいねえ。橋添さんもああいう人に狙われやすいからね」と言つたので驚いたけど、近所の人はそのまま帰つていつた。

「見苦しいところを見せて悪かつたね」

「いえ」

「あの子の親とはずっと会つてなかつた。若くして結婚したけれど、妻は僕に愛想をつかして、別の男性と結婚してね。あの子も私とはほとんど会つたこともないくらいだつたが、誰かに聞いたんだろう。親には内緒で連絡をくれてね」

「そうですか」

「でも、つき離せなくてね。苦労したようになじられてしまつて」

「苦労?」と聞いてから、

「すみません」とうつむいた。

「妻は再婚相手に逃げられたそうだ。それから苦労したようだけど、娘には一度も会わなかつたからね、事情があつたから」

「そうですか」

「あの子にお金を渡さないほうが良かつたかもしれないな。一度目は後ろめたさもあって、小額だったので、つい、渡してしまつた。二度目から、あの口調になつた。でも、今度のことも嘘かもしねないな」

「大丈夫でしょうか」

「もう、渡さないよ。私は自分で使うことなんて知れているから、罪滅ぼしのつもりで渡してしまつたけど、本当は渡さなければ良か

つたよ」と先生がため息をついていた。

先生の正体1

東条さんから呼び出されて、学校帰りに待ち合わせた。

「今日はなに？」と聞いた。

「奢つてやるから、機嫌を直せ」

「ここで？」と見回した。デザートショッピングだからだ。それほど高いものは売ってなかつた。

「いいだろ。お子ちゃま向きだ」と言われてにらんだ。

「なんだか、色々ある。自信無くなっちゃつた」

「なんで？」と聞かれて、秋さんの紹介で見学させてもらつているけれど、客によって占い方について迷いがあると教えたら、

「その店のスタイルがあるから、参考程度でいいんだぞ」と言われて、

「スタイル？」と聞き返した。

「人によって、違うからな。じっくり相談に乗つたりする人もいれば、こっちから、色々と聞き出していく人もいるし、占い方法も人によつて違うだろうし」

「解釈が人によって違うものだね。同じカードでも違つてくるから、その辺でどうしたらいいかを迷うし」

「それはあるかもな。相手によって、その解釈は変わつてくるだろうし」

「なんだか、疲れた」

「お前、エッグシェルに看板を描いたのか？」と聞かれて、事情を説明した。看板を描いたのは別の女の子で、占いと引き換えて描いてもらつたと。

「なるほどな。かわいいらしいな。俺のところでも描いてもらおうかな。キス一つと交換」

「安つ！」と思わず言つたら、

「高いだろ。俺とキスできるんだから」

「すうじい自信」

「なんか？」と笑っていた。

「なんだか、色々あるんだね。人って」

「どうして？」

「見掛けじゃ分からないつて意味がなんとなく分かったから」と言つたら、東条さんがじっと見ていて、

「それより、経験を積めよ」と言われてしまい、

「練習はしてるけど、母はチラッとしか見てくれてない。友達相手に練習はしてるけど、何しろ周りがうるさくてね」

「色々見学しだら。しつかりしろよ」

「現実が見えたら、自分の未熟さを痛感しただけ」

「最初の威勢のよさはばどに言つたんだよ。俺を突き飛ばした勢いを見せろよ」

「見せられない。それより、今日の用件は？」と聞いた。この間、私が言つた案が通つたそうで、

「色々と考えておくから、お前もそのうち参加しろよ。その前に練習しておけよ。小金も貯められるからいいだろ」「旅行代が貯められるけどね」

「旅行？」と聞かれて、

「まあ、色々と」とまかした

先生の正体2

「ふーん、洋服代を先にしin。それから、メイク道具も揃えておけえ、なんで？」

「まさか、お前、そのままの格好で出るつもりじゃないだろ?」「いけないの?」

「却下。ちゃんとした美容室に行つて、服装もそれなりに揃える。それから、メイクもしてもらひ。俺と一緒に出るなら、やうじやないと恥ずかしいだろ」

「あなたと出ることがすでに恥ずかしい」と言つたら、パコッヒ呂かれた。

「痛いなあ、もづ」

「お前だけだよな。俺にその扱いは」

「占い雑誌に写真つきで掲載されて、人気が出てるからって天狗になつてゐるでしょ」と聞いた。この間発売されていた占い雑誌にプロキオンの期待の星として掲載されていた。

「中々良かつただろ。あれでお客さんが増えたんだよな。予約が中々取れない占い師として格が上がつたから」

「見習いからも昇格なの?」

「まだだよ。卒業してからだよ。そう言われているからな」

「ふーん。だつたら、卒業間近の受験でも良かつたじゃない。プロキオンは年2回受験できることになつてこる。」

「早めに受けたかつただけ。前から占い見習いとして時々やらせてもらつていたからな。でも、形としてちゃんと受験しておいただけだよ。早めにね」

「「ネと言つて、悪かつたわね」

「やつと認めたんだな」

「占い師としてはね。男としてはアウト」

「何でだよ。いい男だろ、俺」

「自分で言い切るところがアウト

「周りにも言われるよ」

「あつそ」

「お前は子供だから、俺のよさが分からんんだろうな」と言った
のでにらんだ。ここまでうぬぼれが強いと何も言えなくなるな。学
校の先輩で一人いた。勉強がてきて、それなりに入気があった。で
も、過剰の自信満々で一部にしか人気はなかつた。大村も一部の
女の子には人気があるけど、それは顔がいいからだ。スカウトされ
たことは何度もあると自慢していた。話す内容と言つたら、そうい
うことばかりらしいと聞いたこともある。私はそういうのは苦手だ
った。

先生の正体③

「あなたも評判が両極端になりそうだね
「どういつ意味だ?」

「そのままの意味」

「お前は恋愛したこともなぞつだな。俺が鍛えてやるから、楽し
みにしておけよ」

「はあ?」と呆れてしまった。

「まだまだ、だからな。色々と改造しないとそのままだと俺とつ

あわないし」

「あなたと同等に見られたくないんだけど」

「その言い方はやめろよ。うれしいくせに」駄目だ。どこまで言つ
ても、おめでたい男だ。つける薬がないタイプに違いない。

「自分を改造したほうがいいよ。あなたの場合ははいつか、刺される

「視線が刺さって痛いね」

「あつそ」と言つたら、

「お前は俺をちゃんと見ろよな」

「占い師としてしか興味ないからね」

「子供だ」

「つるさーの」と言こ合つてから、ため息をついた。

送つてもらいながら、

「気をつけろよ」と言つたので、

「なにを?」と聞いた。

「色々あると困るからな

「あなたの友達のことは言わなければいいんでしょ」

「ああ、あいつらも気をつける必要はあるけど、それは一部だけだ
よ。今度、教えるよ。怒らせるとまずこやつが一人いるけど、それ
以外は張り付いているだけだから。そつちじやなくて、お前の先生

のほうだ」と言わされて、この間のこと思い出した。先生は辛うじて、何を聞けなかつた。

「あの人の孫が来たんだろ」

「どうして知つてるの?」

「近所の噂。あの人の場合は噂されやすいからな」

「どうして? 最初は変わつた人なのかなと思つたけど、話しやすくて優しい人だよ。相談も親身になつて乗つてあげてる。偏屈だと教えてくれた人がいたけど、全然違つたよ」

「偏屈ね。それは言われているさ。あそこに住んでるから、やっかみでそう言つんだよ」

「やっかみ?」と言われて首をひねつた。やっかまれるようなことはしそうもなかつた。

先生の正体4

「ひょっとして、お前、知らないのか?」「なにを?」

「あの人、近所の人たちはほとんど知つてると思ひついで。お世話になつてるし」

「お世話? 占いで?」

「違う。あの辺りいつたいの土地はあの人々の所有だから」と言つた

ので、さすがにびっくりして、

「えー!...」と大きな声を出してしまった。

「あれだけそばにいて知らないなんてな。誰も教えてなかつたんだな」

「全然知らなかつた」

「だから、それで偏屈と言われてしまつんだよ。かなりの金持ちだと思つぞ。俺のところもある人の所有だつたからな。母があの人のところから買つたんだよ。でも、駐車場はあの人々の土地を借りているから」

「知らなかつた。だから、お金を」と考えてしまつた。それを知つていて、お金の無心に来たんだな。

「いくつかビルを所有してゐるはずだし、あそこ以外に部屋を持つてると聞いてるよ。でも、住んでいるところはあそこだしね」

「そうなんだ。どうして、あそこに住んでいるんだろう。建て替えてもいいのにね」

「さあな。みんなが聞いても答えない。本人がそうしたいのならいいんじゃないか。ただ、俺なら、ビルの最上階に住んで、毎日パーティーでも開いて楽しむけどな」

「あなたと同じにしないでよ。先生はあなたとは違うだけ」

「そうかもな。占いをやつてる理由も暇つぶしだつていう人もいるけど、多分、好きだからだろうな」

「そりなんだ。なんだかびっくりだね。お金持ちなのに、そういう部分は気にしないんだ。本当にお金持ちって見栄を張らないんだね」東条さんを見たら、

「俺を見て言うな」と怒っていた。

「だつて、あの辺りの土地つて高そうだし」

「確かに収入はすごいだろうな。管理してくれる人がいるって聞いてるし、手元にお金なんて置いてないって噂だからな。全部、資金庫に預けているだろうしね」そう言われたら、わざわざお金を下ろしに行つていたなと思い出した。

「お孫さんが来てもうれしそうじゃなかつた」

「それはあるだろ。自分に懐いて来てくれるのなら喜んで出すだろうけど、お金だけのために来ているよつな娘だつて、噂になつてたからな」

「なんだか、色々あるね」

「お前もあるのか?」と聞かれて黙つた。

「旅行つてどこに行くんだ?」

「東北」

「東北? 海外じゃないのか? 買い物したりするのかと思つた」

「あなたと一緒にしないでよ。ちょっとね」

「まさか、雪人つて人のところに行くつもりか?」と聞かれて黙つた。

「やめておいたほうがいいぞ。あの人、お前は一の次だ。研究に時間を持つて、お前とデートすらしなさそうに見えるな。そういう相手だと寂しいぞ。電話だつて掛けてくれないだろうし。俺ならしてやれるけど」

「いいよ、あの人笑顔を見ていられるだけで」

「かわいいこと言ってるよな。女の子発言してるよ、意外」

「うるさい。相手に合わせてているだけ。あなたには憎まれ口しか言えないのは、あなたがそうだからよ」

「神宮寺は?」と聞かれて考えてしまつた。

「さあ、どうだっけ？」

「あの後、何か言われたんだろ」 こういう勘が鋭いところが嫌だな
あと思つていたら、

「当たりだ」と笑つていた。

「あいつから始めるのも悪くないかもな。その後、俺に乗り換えて
もいいし」

「絶対にありえません」

「意地張っちゃって、うれしいくせに」

「うぬぼれが強い人つて、懲りないんだね」

「楽しいぞ、俺と付き合つとね」 ウインクしていく、

「どれだけの女性にしてきたか分かつたものじやないね。あなたの
未来だけは読める。いつか、刺される」
「視線だろ」と笑つっていた。

お店に友達が何人か来て、手伝ってくれた。面白そうだからと言いう理由の子もいたし、待ち合わせ前に冷やかしに来たと言つていて子もいたけど、一人、実験台になつてくれて占つた後に興味が無くなつたのか、ほとんどが帰つていつた。

「占いつて、商売にするには大変なかもしないね」怜奈ちゃんが笑つた。お客様がほとんど来てないからだ。秋さんの予約と母の馴染み以外は来ていなかつた。

「怜奈ちゃん、手伝つてくれて、ありがと。デートしてきてもいいよ」

「午後からだから」と軽く言つてくれて、

「いいなあ、デート相手が次から次へと」

「だつたら、神宮寺を断らなければいいでしょ」と言われてしまつた。結局、神宮寺とデートするとは返事できなくて、

「友達としてならいいんだけど、なんだか、それだと悪くて」

「真珠は気軽に『デート』できないタイプだもんね。の人で練習してるんじゃないの?」

「誰?」

「東条さん」と言われて、母のほうを見た。気づいていなかつた。無理。あの人の場合はそういう対象には見られないよ

「向こうはしつかり見ると思つけど」

「占い師として興味をもたれるつて、ちょっと嫌だからね」

「そう? それも最初の取つ掛かりとしてはおかしくないでしょ。容姿から入る、条件から入るのとそれほど違はないでしょ。同じ趣味から入つてるんだからね」

「趣味じゃないつてば」

「でも、同じこと興味があるってことだもの。それだけで話が弾むからね」そう言われるとそがもしれないけどなあ。

「でも、あの人と何もかも違うさ。価値観が全然違う。見栄つ張りで高級なものに囲まれたいタイプと私ではね。超庶民の小市民は相手にもしないって感じの人たちと付き合ってるよ。美人とかわいい子以外は女じゃないと思ってる高津と同類の垣根を感じる」「高津はほっときな。ああいうやつは死ぬまで直らないって言ってたよ。鴻上さんが『鴻上さんは高津のこととクラスの男子のことも、もっともらしく分析していた。ただし、つい、みんながうなずいてしまうぐらいの説得力があった』

「鴻上さんって、いつたい何を見てきて、ああこいつが言えるんだろう？」

「さあね。親が兄弟の影響でしょ。ほとんどの子がそういうのに影響されているだろうからね」

「価値観の違いかあ。高級車に乗って、女の子とデートをこっぽいしたら恋愛に詳しくなると思つ？」

「無理じゃない。あしらいが上手になるかもしれないし、『うつ言つたら喜ぶ、』『うつ言つたら怒られる』って境界線が分かる程度で、相手に真剣じゃなくて深く付き合つてなかつたら、相手も流すよ

「え、どういう意味？」

「適当に人の話を流している男子や女子がいるでしょ。調子のいいこと言つておいて、頼みごととかあつても『いいよ、いいよ』と言ひながら聞いてないタイプ。後で覚えてなくて、『『そ�だつたつけ?』と流す。それだと信用されなくなるから、付き合いが浅くなるだけ。明るい子が多いから話す数は多いけど、楽しい付き合いだけなら、それで十分だと思うけど、お互いに支えあうようなつながりにはならないだろうからねえ」

「言つている意味がなんとなくしか分からぬ。大勢友達がいる方が楽しいじやない。それに助けてくれる人もいると思つけど」「薄いつながりがあちこちにできるかもしれないし、遊びの誘いは多くなるかもしれないけど、自分が困つたときに手伝ってくれるような付き合いにはならないだらうつて話。違うクラスの子がそれで怒つてたことがあるからね」

「え、なにを?」

「自分が頼んだのにみんなが助けてくれずに逃げたと。面倒になりそうなことを頼んだらしいの。友達と言つか一緒に遊ぶ子はかなりいるから、それで、かなりの人数に頼んだらしいの。日頃、仲良く話している子達にね。でも、誰一人助けなかつたらしいから

「何、頼んだんだろ?」

「お金とか絡んでたらしいからね。私も内容までは詳しく知らない。でも、そういう部分まで助けてもらおうとするなら、よほど仲良くないとね。そういうことが分かつてなかつたから、『白状だ』つて怒つてた。でも、鴻上さんが言つてたらしいよ。反対の立場になつたら、面倒だから彼女は逃げるだらうつて『いかにも言いそつだ』。『デート相手が多いからつて、相手とどこまで関わつているかで違つている気がするよ。どれだけ数を重ねても、学習しない高津のケースもあるからね』

「高津つて、どうして懲りないんだろ。あれだけ、毎回みんなに怒られているのに」

「無理でしょ。面倒なことは流すタイプだもん。聞いてないのか分かつてないのか、同じことを繰り返すだけだと思うよ。真珠も毎回占つてあげても無駄になるかもね」

「やうなのがなあ。どうも、恋愛関係は苦手でどう相手に伝えていいか迷つて。東条さんなら迷いそうもないし」

「相手が言つてほしいことは思い浮かぶタイプかもね」と言われて、そうかもしれないなど考えていた。

結局、お客様さんは午後から一人だけだった。学校の子が「振られたので復縁したい」と言い出して、それで泣いて頼まれてしまい仕方なく占つた。でも、うまくいかないだらうと出ていたので、正直に言おうか迷つてしまつた。今までだったら、言葉は選んだかもしれないけど、本当のことを教えた。彼女を見てから、

「相手に再び振り向いてもらひにはね、かなりの努力が要るよ」と答えた。

「そうなの？　どうしたらいいの？」と聞かれて、

「自分を磨くこと。それしかないよ」と教えた。カードにはそこまで出でていなかつたけど、彼女に足りない部分を考えてそう答えた。

「磨く？　どうやって？」

「自分の魅力を見つけることからやつてみて」と言つたら、

「じゃあ、そうしてみる」と言つて、お金を置いて帰つていつた。帰るときは元気が出ていたので、あれでよかつたのかもしれないなと思った。復縁したい人とはうまくいかなくて次につながるかもしない。彼女の幸せを考えたらそういうことなんだろうなと思つた。

「バイト代、中々たまらないわね」秋さんが寄つてきて、

「そうだね」とため息をついた。私は未熟すぎるから、母たちよりも格安料金にしておいた。東条さんのように正式な占い料金の半額なんて、とてももらえそつもなかつた。

「でも、頑張つてたね。言葉遣いも変えてたし、相手が元気が出でいたのが一番良かつたね」と言つてくれたのでうなずいた。悔しいけれど、東条さんが言つたとおりだつた。占いを信じないと言つ入も多い。「占いなんて、どこまで当るんだよ」と学校で馬鹿にされたこともある。でも、東条さんの言つとおり、そういうものが誰か

の元気の種になつてゐるのかもしれないと思ひて、私もそういう占い師になれたらいいなと思った。目先の派手さは飽きられると東条さんが言つていたけれど、確かに、いつの間にかいなくなる占い師はそういう人が多かつた。

「秋さん、占い師を多く抱えている団体に所属している場合は、移り変わりが激しいのかな？」

「そうねえ、知り合いで話を聞くとすぐに辞めてしまうといろもあららしいわよ。働く条件が厳しいところだとそうなるみたいね。働いた時間の割にはお給料が少ないとか、何か売らせるとか」

「なにを？」

「開運グッズよ」

「それならここにも置いてあるじゃない」

「ああ、ああいうかわいい値段のものじゃないわよ。もつと高額なものよ。原価に見合わない金額で売るらしいからね」

「へえ、そなんなんだ」

「苦情が多いところはまめみたいね。プロキオンはまだうなの？」

「さあ、あそこはグッズは売ってたけど」

「あそこはお薦めグッズを占い結果の用紙に書いておくシステムだとは聞いているけど」

「え、そなんだ」

「それでも、そういうので買つていいく人は多いでしょ。ここと違つておしゃれなビルだから維持費が掛かるから。そういう部分での儲けも馬鹿にならないだろ」

「せうだらうね。部屋の中も豪華だったし、あいつの車も高そうだったし」

「真珠ちゃんは、プロキオンで働きたいの？」

「無理。あいつがいるところでは無理だと想つ」と母がいるほうを見た。

「そうねえ、怒つてたからね。ちよつと長引いてるものね。怒りが母は怒りっぽいところもあるけれど、すぐに忘れる体质だ。私もそういうのは諦めと言いつか流すほうだけど、母はもつと早い。ただ、

立ち直りが早すぎるお姉ちゃんには負けるけど。

「宝陽の学園祭に出る前に、鍛えておかないとね」と言われてうなずいてから、

「見た目って大事かな？」と聞いた。

「あら、どうして？」

「東条さんが、見た目を考えられて。マイクまでしろといつもあって」

「高校生だものね。制服で出ても面白いと思つけど」

「やだ。制服だと変な目で見てくる人がいたから」

「そう？　かわいいと思つけど。でも、東条さんが言つならそのほうがいいのかかもしれないわね。相手に命ぜたりしないじゃない。いつもの真珠ちゃんならもう言つてしまふ」

「あいつに命ぜると言つのが癪に障るの」と言つたら笑われてしまつた。

みんなにどうだったか聞かれて、

「ははは」と笑うしかなかつた。

「ねえ、昨日、神宮寺見かけたけど大丈夫なの?」と違うクラスの女子に聞かれた。

「さあ」としか言えなかつた。お互いのプライベートまで深くは知らない。神宮寺は去年同じクラスだつたから、良く勉強を教えてもらつた。あいつは親切なところもあるから、クラスの女子に英語や数学を聞かれていた。私も何度も教えてくれて、それが縁でいつも話すようになつて、友達になつた。怜奈ちゃんは何度か神宮時は気があると言つていたけど、私はそれどころじやなくて分かつていなかつた。雪人さんばかり見ていた。父がいなくなり元気がなかつた時期が続いて、あの人が優しく声を掛けてくれて、とてもうれしかつた。それまでは時々見かける大学生としか知らなくて、それが縁で何度か夕食のおかずやお客さんからのもらい物の果物や野菜を届けるようになつた。いつも優しくしてくれるけど、部屋に入つたのはこの間が初めてだつた。本当はもっと話したいけれど、勉強で忙しそうで邪魔をしたらいけないと遠慮していた。デートに誘うなんて迷惑になりそうでできなかつた。の人しか見てなかつたために、神宮寺の気持ちには気づかなかつた。

「占つてもらいに行こうかなあ。夏休みに遊びに行きたいけど、彼氏ができなかつたし」と言い合つていた。もうすぐ夏休みになるから、一部の人たちは浮かれている。

「真珠ちゃん、彼氏紹介して」と同じクラスの子と良く話している違うクラスの子に言われて、

「どうやつて?」と聞き返した。そういう紹介ができるよ!つな子がクラスについて、

「あの子に頼めば」とみんなに言っていた。

「違うって、宝陽。あそこには知り合いかいなかつたから、ちよつと
いいじゃない」

「無理。知り合いなんていないし」

「じゃあ、力ロンさんにお願ひできなかな」と言わされて、

「えー！」と言つたら、

「いいじゃない。の人ならいくらでも知り合いかいそうだし。お

願い」と言われてしまつた。

紹介を頼まれてもそれほど知らない子で、違うクラスの子だし、そのまま流そうと思つていたら、更にしつこく言つてきたので、仕方なく、東条さんに電話したら、「いいよ、でも、かわいくないと俺が怒られるから、その辺はびつだ？」と聞かれて、

「さあねえ。自分で確かめたら」と言つたら、

「紹介するならそれなりの子じゃないと怒るやつらもいるからな。制約が厳しくないのでいいならいいけど、条件が下がるぞ」と言つられて、驚いた。

「どうして？」

「条件がいいやつはそれなりにプライドが高いのも多いからね。とにかく出会いたいって心境のやつでもいいなら、いいけど」

「それだと怒られちゃうよ」

「じゃあ、それなりのランクにしておくよ」

「やけに慣れてるね」

「紹介したことが何度あるからだよ。頼まれることも多くてね」

「合コンにも行くんだ？」

「それなりにしか行かない。営業を兼ねてこく場合もあるけど、それを出すと必ずその場で『占ひて』とか言い出す子がいるから、うるさくてね」

「いいじゃない、占ひてあげれば

「ただで『占ひて』としつこく言ひ子は苦手でね。そういう子に限つて文句を言つ確率が高いから、適当に逃げてる」そう言つられて、割と気軽に頼んでくるけど、「そのうちお礼するね」と言つて、末だに何もない子がいたのを思い出した。こちらが用事を頼んだら逃げられたことがある。しかも、占い結果が気に入らなくて裏で文句を言つていたらしくて、それ以来、その子に何度も頼まれても占えな

くなつた。そういうのが分かると途端にしらけて、相手のことが見えなくなるから占いもできない。でも、かなりしつこくて、怜奈ちやんが怒つてくれた。

「お互い色々あるんだね」

「お前もどうせ頼まれる口だら。これからは全部お店に来てもらえよ。それでも来るなら占つてやれよ。文句を言ひような子はお金を払つてまで来ないからな」

「そういう人がいたんだ?」

「当たり。それから、お前も少しほしゃれしいよ。バイト代は入つただろ」

「ははは」と笑つて「まかしたら、

「ほらな。来ないだる。お金払つてまで来るなら本物。奢つてもらう程度なら素人なんだよ」

「はいはい。十分分かつたから」

「まだまだ、俺のライバルにはなれそつもないね」

「ライバルになる気も恋人になる気もないからね」と怒つたけれど笑つて電話を切つていた。

電話を切った後に、

「あいつか？」後ろから声を掛けられて振り向いたら神宮寺がいて、「データどうだった？」と聞いた。聞かないのもおかしいかなと思つて気軽に聞いたけど、苦い顔をしていた。

「「」めん」

「強引に呼ばれてね。それで行つてみた。でも、会話が続かなかつた」

「残念」

「今まで何度もか」

「そう？ 神宮寺なら合わせられるでしょ」

「合わせられても、自分が楽しいかどうかは別」と言つたので、「なるほどね」と言つたら、じつちを見ていて、「「」めん」と謝つた。

「謝るなよ。お前にそんな顔をしてほしくて申し込んだんじゃないぞ」

「分かつてゐる。ただ、もつと気軽にデータべらごできたから良かったなと思つて」

「お前は占にしている割には堅いからな」

「お父さんにおやんと紹介できるようになつてからつて、どこかで思つてるからね」

「そうか」

「お金を貯めないと」

「貯まりそつか？」

「まだまだ、営業努力が足りなくて」

「気長に頑張れよ。卒業するまでに貯めるんだ」

「夏休みに行けたらいいけどね。多分、無理。思い立つたのが遅すぎた」ここまで本格的にお金を貯めたいと思つたのはサバトの受験

前だった。その前は漠然といつか行けたらいいなと思っていた。でも、雪人さんを好きになつたことをちゃんと報告したいと思っていた。それでバイトを始めた。学校には最初、母子家庭でお金が足りないからと説明したけれど、それだけだと姉が働いていることもあって納得してくれそうもなかつたので、しょうがなく父の話も加えた。それで先生も渋々認めてくれた。バイトの許可をもらつてるのは親が病気になつてやむを得ず生活費の足しにするためとか、母子家庭で色々とお金が掛かるとか、進学のための学費を稼ぐためと言う人が多い。

「ゆつくり頑張ればいいさ。俺も一緒に探してやりたいけどな」「いいよ、神宮寺は大学に行つたら、誘いが増えるだろうし」「卒業したつて、真珠とは友達だからな」と言つてくれてうれしかった。

「もう、あれは無理」東条さんに頼んで紹介してもらった後に、女の子が私にぼやいてきて、困ったなあと思った。こいつのことは苦手だった。相手が気に入らなくとも、それなりに流してくれるような人のほうが楽だ。文句を言われても、その場限りの子なら別に流せるけど、

「絶対におかしい。宝陽つて、もつといい人が多いと思う。相手、お金持っていないんだよ」とずっとぼやいていた。そんなことを私も言われても、と言いたいけど我慢した。

「ほつときな」怜奈ちゃんがみんながいなくなつてから言つてくれたけれど、

「あの子、ほしいバックとアクセサリーがあるから、そのための彼氏を見つけたかったらしくて」

「それはちょっと困る。教えてくれていたら、東条さんには断つてくれるようになつたのに」

「あの子が今日、そうやってぼやいていたの。しかも、相手が全部奢ってくれなかつたとか、ほしいバックを買ってくれそうかどうか、試したらしいよ。それで、相手は見てもいなかつたらしくて、それで怒つてたみたい」

「自力で見つけてほしいね、それだったら」

「そうだね、知つてたら、教えられたけど。あれでは逃げられるだろ? ね。そういう部分のアピールが露骨だと嫌がられるだろうから」

「そうかもしけないね」

「神富寺がうまくいかなかつたのは聞いた?」

「それは聞いたけれど」

「やっぱり神富寺とデートしたら? 占いするにも実体験がないと。」

「それが、東条さんとするとか、もししくは雪人さん」

「無理だよ。雪人さんは勉強が忙しいし、卒業したら帰っちゃうみたい。間に合いそうもないな」

「なにが？」

「お父さんにちゃんと話してから、雪人さんとデートしたかったのに

「でも、それは」と言つて怜奈ちゃんが黙つた。

「分かってるよ。お父さんが帰つてこないのは事情があるんだね」
し、それを待つのはやめたほうがいいとお母さんも言つたが、
でも、なんだか

「雪人さんだつたら、お父さんだつて許してくれると思つよ。思
いつて誘つてみたら」

「勉強の邪魔になりたくないで」

「息抜きぐらじするでしょ」

「遅くまで明かりがついてる。せつと、勉強してると思つ」

「真面目」

「そうだね。あいつと大違い。あの人は夜遊びがひどそうだ」

「東条さんつて、どういう人か分かつたの？」

「遊び人だつてことしか分からぬよ」

「意外と見かけと違うとか」

「見かけどおりの中身だつたよ。うぬぼれが強かつた。自分と付き
合える女性は幸せだと言い切りそつ」

「なるほど、じゃあ、ちょっと無理だね。それだと」

「そういうこと」

「じゃあ、神宮寺とデートしてみたら。夏休みにどこかに行けば楽
しつつて」

「もう言われてもねえ。お金を貯めたいし、修行しないとね。あい
つに負けたくないし」

「ライバルなんだ?」

「違う。今のところ見下されてばかりだから、悔しいの。少しでも
追いつきたい」

「そこまで腕は確かなの?」

「上手だつたよ」

「もうじやなくて、占い師として、色々あるでしょ。接客が上手な

のは分かつたけど、占い師つて当るかどうかが一番重要でしょ。」

「さあ、そう言えば、当っているのかどうか。占い結果に苦情はな

かつたみたいだけど」

「見た目がいいから、その辺でだまされているとか」

「さあ、そう言われたらどうなんだろうね」

「真珠のは結構当つてると思うよ。何人かそう言つていたし。東条さんはどうなんだろうね」

「分からぬ、そこまで見てなかつた」

「興味ないのね？」と聞かれて、

「そう言われても、振り回さればかりいるから」

「そういう相性かもね。あの人は自分優先、真珠は周りのことも考
えてしまつところがあるしね。それだと振り回されるほうが大変だ」

「そう言われたら、そうだつたね。合わせるのをやめようかな」

「無理じやないの。真珠との人だと、あの人のほうが強い気がす

る。パワーじゃなくて、振り回す力が」

「パワー？」

「自分で考えなさい」と言われてしまった。

東条さんから電話をもらつて、謝つたら、笑っていた。

「いいよ。お前がかわいいかどうかを自分で確かめろと言つた時点で、それほどじやないだろうと予想したから、それなりレベルの男にしておいたし。相手はめげないタイプだから大丈夫だよ。気にしないから」

「ごめん、かなり失礼なことをしたんじゃないかと思つて」

「気にしなくてもいいさ。時々、そういう子も混じるからね。コンペのときに持ち物検査してるし」

「はあ？」

「お前は疎そうだ。慣れている同士だと、話もスムーズで何度も席替えもあるし、それなりに楽しめるけど、値踏み系はちょっと困るから。動きが自分勝手でね。その子が文句言つたら、俺のせいにしておいてくれ。紹介できなくて悪かったと」

「あなたのせいじゃないじゃない。私が余計なことを頼んだんだから。彼女の狙いが分かつていたら、頼まなかつたのに、『ごめん』『いいよ』と軽く流してくれて気が楽になつた。東条さんはこういう部分が付き合いやすいので、女性も気軽にデートするし、その後、会えなくなつてもうらまれないのかもしねりない」

「それより、お前、洋服を買っておけよ」

「お金ない」

「バイトしろよ。洋服にメイク道具、髪も切つてもらつこ」

「嫌だ」

「困つたやつだなあ。学園祭、どうするんだよ？」

「出たくないんだけど」

「今更、言うなよ」

「だつて、今、一番自信がないかもしれない」

「そうか？ お前はいい線言つてると思う。それなりに順調

「どういう意味？」

「ライバルとしても恋人候補としても育てている段階だし」

「育成ゲームじゃないんだからね」

「似たようなもんだろ」せっかく見直したのに、この言い草、ありえない男だ。人のことを何だと思っているんだか。

「あなたは多くの女性とショミレーショングームを楽しんだら」

「十分、楽しかったよ」とうれしそうに言つたので、言うんじゃなかつたなどため息をついた。

厳しい世界1

本屋でバイトをしていた。さすがに見習いだけでは旅行代が貯められないの、先生に相談して、先生がよく行く本屋を紹介してくれた。そのバイト先から帰つたら、母が珍しく夕食の用意をしてくれていた。お客さんがほとんど来なかつたらしい。

「開店休業だね。夏休みだと言つのに」とぼやいた。秋さんは来ていない。母が、

「早く学園祭のチラシを配つてちようだい」と、この間と逆のこと言つ。姉とそういうところは似ている。その場に合わせた発言をする。結構、調子がいいところもある。

「無理。できれば出たくなくなつた。あの人、知れば知るほど、お母さんの言つとおり。薄つぺらさが目立つ」

「親子で似てゐるわね」

「なにがあつたの?」と聞いてみた。何度か聞いては見たけれど、「そのうち、教えるわ。ちょっとね」としか言つてくれなかつた。「子供は知らなくてもいいの」

「ふーん、お父さんと知り合つ前?」と聞いたら、

「あなたは時々勘が良くなるからね」と呆れていた。どうやら、当たりらしい。

「勘つて大事かな?」

「そうねえ、占い師としても女性としても大事かもね。鈍すぎて一股掛けられたら嫌でしうし、利用してくる男がいたとしても途中で気づかないと困るからね。でも、勘が鋭すぎても、これも困るのよね」

「どうして?」

「電話の着信音だけで女性からかどつか見抜ける」と言つたので、「ははは」と笑うしかなかつた。私は母にこつこつところは似ていよいよだ。私もそういうところがある。ただ、分からぬときも多

いかにも、此の體へつらせ因ぬかれ。

厳しい世界2

「占い師として、自分を磨くにはどうしたらいいかな?」

「練習は積んでいるでしょ」

「そうじゃなくて、相談内容に深みがないでしょ。人生経験が少ないし。前にあの男に言われたの。学生になりたいと思つて『職業の実態ぐらい知つていろつて』

「確かに高校生では分からぬかもしけないわね」

「あの男に言われて、本は読んでみたの。友達が貸してくれたから。でも、あれつて、裏のことまで書いてないでしょ」

「裏?」

「テレビ局に行つて、そこで見たの。歌手とか芸人とか、テレビで見るのとちょっと印象が違つてたから、驚いて」

「ああ、それはテレビ用に合わせているのよ」

「合わせる?」

「需要に合わせているだけよ。テレビ局のプロデューサーの意見に合わせている。普段の自分をそのまま出していたつて、テレビ画面で通して見ると、印象には残らないし、テンションが合わないのよ。テレビは独特だからね」

「お母さん、良く知つてるね」

「知り合いに聞いたのよ。昔、一時期だけ売れた芸人のお客様さんが来ていた占い師がいてね、そこでぼやかれたらしいの。先輩にそういうことを教えてもらつたらしいけれど、テレビで売れるにはどうしたらいいかと占い師に相談したの」

「へえ、そういうことを教えてくれる先輩がいるんだね」

「でも、その人は向いてなかつたのね。今は時代劇のチョイ役をやりながら、喫茶店をやってると聞いているわ」

「チョイ役?」

「大部屋俳優を多く抱えているプロダクションに登録しているそ

よ。時々、知り合いに頼んで、時代劇などに出してもうつてこるやうだから」「お母さん、そこ、紹介してもらえないかな」「あら、どうして?」「聞いてみたいの。実態を」「楽しい話ばかりじゃないかもしないわよ」「分かってる。できれば、歌手を顧客にしてる古い師も紹介してほしい」「だったら、秋ちゃんに頼みなさい」といわれてしまった。

厳しい世界3

尋ねたところは小さい事務所で、働いている人が2人だけだった。電話と小さなデスクが置いてあるだけ。後は古い書類ケースが並んでいるだけだった。

「君、誰？」と事務所に人に言われて、「大部屋俳優さんに社会見学でお話を聞きたい」とお願いした。

「ふーん、そう言えば、そういうの、頼まれていた気もするな」と言っていた。そのうち、人が来て、事務所の人には仕事の話をして、その人に頼んでくれるようにお願いした。

「俺、有名俳優とか知らないよ」と言わされて、体よく逃げられてしまつた。何人か頼んで、そのうち、派手な化粧の女性が来た。女性は初めてだつたけれど、何とか頼もうと思つたら、すぐにOKが出た。

近くの喫茶店で話を聞いた。ケーキも頼んでいいか聞かれて、仕方なくうなずいた。その人の話は長かった。名前は聞いたことのある俳優さんとの共演の自慢話から始まり、映画監督にほめられた話などをしていただけれど、何とか誘導して、テレビ業界の話を聞いてみた。

「時代劇も現代劇もそれなりに出るけどさあ、でも、実態なんて、色々あるわよ。ここでは言えないようなことも多いしね」

「いえ、言える範囲でお願いします」

「そうねえ」と色々と教えてくれた。役柄がどうやって決まつていくのか。プロダクションの大きさも関係があるとか、有名俳優の子供などのコネもあるとか、番組の責任者に気に入られるといいとか、スポンサーも大事とか、主演級の役者の引き立られて出られることもある。けれど、その反対に主演クラスの人には嫌われると色々と困るとか、犬猿の仲も当然あって、女優同士が目も合わさないとか、通りすがりに嫌味を言い合つていたと言う話になつて、さすがに、

「怖いですね」 と言ってしまった。

厳しい世界4

「あら、それぐらい当然よ。役が小さくとも、役の取り合いなのよ。仲間同士に見えて、ライバルでもあるから複雑なの。同じ事務所に登録していたって、友達になんて中々なれないしね」「どうしてですか？」

「足の引っ張り合いは同じ事務所でも、いくらでもあるからね。スキンシンドルをでっち上げられると困るから、同じ仕事をしている人には自分の弱みは見せられないのよ。そういうことを言わないような人に打ち明ければいいと思うじゃない？　ところが浮き沈みが激しいから、数ヶ月で立場が逆になってしまふことも多々ある。そうなると、自分が下になつたら面白くないからって、腹いせで嘘の話も混ぜて知り合いに教えてしまふの。そういうのを記者が曰やせとくかぎつけて、記事にされてしまふ。もつともらしく書いておいて、嘘が混じっていても、相手に怒つてもまともに聞いてもくれないし、釈明もできないからね」

「そうなんですか？」

「噂が一人歩きするような状態がいくらでもあるものなのよ。大変なのよ」と言われて、考えてしまった。

「それに芸能事務所も数え切れないぐらいあるしねえ。大きいところに所属したいと思っている子は大勢いるけど、中々難しいからね。プロデューサー、ディレクターの前だとこうっと態度が変わる子もいくらでもいたわよ。ほら、あの有名な」と名前を出していたけれど、友達が喜びそうな話ではあるけれど、本題からずれていななど思ひ、適当に流して、

「オーディションなどはどうでしょう？」と聞いた。

「アピール合戦になるわね。いかに強く印象に残すか、いかに自分を売り込むかが勝負よ」

「選考者に合わせるってことですか？」

「それはあるわね。選考している人によつてどこを気に入るかってことは計算するわよ。役柄に合わせて服装も選んでいくし、メイクも変えるし、かつらもつけたことがあるわ」そこまでするんだ。

「大変ですね」

「これでも、若いころは女優志望だつたからね。結婚してやめちゃつたけれど、やっぱり楽しくてね」と言つていたので、それだけ魅力がある世界なのかもしれないなと思つた。

厳しい世界5

その人の話を聞いた後、別の男性にも話を聞いてみた。この人は缶コーヒー一本だけで済んだ。孫が同じ年らしくて、うれしそうにしていて、

「そうだね。厳しい世界ではあるよ。引き立ててもらわないと何も始まらないからね。目に留まつたら、その後も仲良くしておかないと。色々な人とね」

「そうなんですか？」

「下つ端もいつかは出世するからね。ADさんもいつかは出世して、使ってもらえるかもしれないから、気は抜けないよ。それに、いくら才能があつてもね、容姿が重要なんだよね」

「そうかもしれないですね」

「同じ才能なら、綺麗な人、目立つ人のほうが選ばれる可能性は高いし。それに、好感度も重要なだからね」

「好感度？」

「そう、同性に好かれるような人は息が長いと思うよ。異性だけに人気だと一時期人気が出ても、その後続かない人が多かつたね。次々に若い人が出てくるからね。男性だと若い女性が好きだし、女性も新しいアイドルが出たら、そちらが気になるでしょ？」と聞かれて、首をひねつた。あこがれのアイドルと言われても、昔、それなりにいいなと思った人は何人かいたけれど、熱狂するところまで行ってなかつた。

「君は真面目そうだねえ。新しい人が次々出てくると言うことは新鮮味がなくなつたら、飽きられてしまつし、常に自分を磨いていいとね」

「大変ですね」としかいえなくて、

「そうだね。努力は必要だよ。世渡りと人間関係と才能と努力。だけどねえ、それだけでも駄目なんだよね。芽も出ずに辞めていく子

が何人もいるから、厳しいんだよ」と教えてくれて、私は何も分かつてなかつたなと思った。

「無知つて怖いね」母に思わず言ってしまった。テレビを見ながら、母が食事をしていて、テレビ画面に映っている人を見て、何も知らずに見ていた時と違つて、頑張つているんだろうなと思った。かわいらしき顔をした歌手を見て、「テレビに出られて、綺麗な衣装が着られて、適当にインタビューを受けちゃつてさあ。そう、かわいくないのに」と言つっていた子がいたけれど、そう甘くないなと思った。

「クイズ番組に出て商品もらつて、適当に答えているだけだ。あれなら、俺のほうが正解率が高いね」と自慢していた男子がいた。でも、そのクイズ番組に出る前にすでに競い合いがあるのかもしれない。モデルを見て、「私もやせたら、この子よりかわいいのに」と言つていた子がいたけれど、ダイエットするのも大変かもなあ。少しでも太つたら、ライバルに、「太った?」なんて嫌味を言われるんだろうか?

「そうじゃない?」怜奈ちゃんと電話して、色々あったことを話して、ダイエット話とか嫌味を言われるんだらつかといつ話まで及んで、軽くそう言わってしまった。

「ああいう人たちって、自己顯示欲が強くないと出られないよ。根も葉もないひどいことも言われるかもよ。それでも、平然として二コ二コできるような性格じゃないと無理だと、友達が言つてたし」「そうなの?」

「オーディションとか、受けてる子の友達が教えてくれた」「なるほどね。色々あるけど、画面には出でないもんだね」

「そんなのが見えたなら、誰がテレビを見るのよ」と笑われてしまった。確かに、それが見えたなら、しらけるかもしぬれない。裏で悪口を言つ子や見下す子に占えないのと同じかも。

「楽しそうにテレビに出でているのにね」

「楽しいんじゃないの?『人前で話すのが大好き、自分をもつと見て』と言つ子、時々いるよ」

「なるほどね。楽しいんだ」

「楽しいからこそ、出たい人も多いんだと思うよ。カメラのフラッシュを浴びて注目を集めて、『どう、綺麗でしょ?』と言い切れるような人じゃないとね」

「す」「いね、それ」

「桑島さんがそうでしょ」と聞かれて、クラスの派手な女の子を思い出した。学校にお化粧をしてきて、先生に何度も怒られていると聞いている。年上の彼氏が学校まで何度も迎えに来ていて、クラスメイトとも距離感がある。話すのはいつも一緒にいる一人だけ。「あなた達とは違うのよオーラがある」と言つていた子がいた。

「なるほど、良く分かった」

「真珠も努力してるんだね。本屋のバイトはどう? 出会にはあつ

た？」

「ない。探してない」

「一途だなあ。」Jリーチは明日もアートだから寝ないと。美容に良くない

ない」

「はいはい、怜奈ちゃんはかわいいからいいね。結婚相手が山ほどできそう」

「そうね、今ぐらこから見つけておいてもいいね」

「余裕だなあ」

「真珠も頑張らないと、あの人にしても言こと思つよ。条件は悪くなかつたし」

「無理」と言つたら笑われてしまつた。

分からぬ男1

「バイトが休みの日に、東条さんが突然やつてきて、出かけるぞ」と言つたので、「疲れた。今日は無理。それに出かけようかなと思つてたし」約束してゐるのか?」「日時は指定しない。『いつか、行きます』って言つてある」「ふーん、じゃあ、俺に付き合えよ。時間が空いたし」「あなたの時間を埋めるために、私を使わないで。他の女性で埋めてください」「だから、言つただろ。そろそろ、やめようと思つてるつて。本命候補を育てておかないと」「候補は何人?」「一度に何人も無理だよ」と言つたので、「今まで何人を育ててきたのよ?」と聞いた。「そうだな」と考えていて、「はいはい、思い出せないぐらいなのね。あなたには付き合いきれないよ。道楽でやられても困るからね」「そうか? 彼女に昇格するまで、時間をかけているだけだし」「今まで、本命なんていたの?」「うーん、そう言わると少ないかもな」「浅木さんもそうなんですよ」「いや、彼女はそれほど長くないよ。大学に来てからの付き合いで、何人かが誘つてたけれど、俺とだけ付き合つてくれたし」「さりげなく自慢しないでよ」「俺、モテるからさ」「かるーい人だね」「それより、出かけようぜ」「溜まつていた家事があるんだけど」

「母親がやるもんだろ」と聞かれて、ため息をついた。

分からぬ男2

結局、強引に連れ出されてしまった。「学園祭のことで打ち合わせもあるし」と言われて渋々だった。こんなことなら、神宮寺の誘いのほうに乗ればよかつたなと思つた。

「お前、家事やつてるなんて、意外と苦労してるとこ」俺の占いは、また、当つたな

「またつて、なによ?」

「初恋は実りそうもないからな」

「がんばっているわよ」

「見てるだけだろ。せいぜい、挨拶程度。それで、どうやって進展するつて?」

「そう言われても、勉強の邪魔になつたらいけないし」

「ほらな、言い訳をするんだよな。自分ができないことを言い訳して」まかすのはやめろよ。まず、やってみてから考えろ

「他のことならそうするんだけど。雪人さんは高嶺の花だから」と言つたら、思いつきり笑つっていて、

「失礼なやつ」

「憧れを恋と勘違いしているつちは無理だね。男の本性なんて、分かつたもんじやないぞ。あの男も意外としつかり恋人はいると思うけど」

「知らないよ。多分、いないんじゃないかな?」

「あいつの大学での様子を聞いたこと、あるか? あいつの知り合いにでも聞いてみる。意外と、恋人と大学で会つてデートしてるかもよ」

「一番不安に思つてることを言わないで」

「臆病なやつ」

「あなたとは違うわよ。軽い付き合いばかりしてたから、分からぬのよ。相手がどう思つか怖いなんて思ったこともないでしょ」

「俺は自分がどう思つかが重要だね」「自分本位」

「相手だって同じだろ。田的なんてね」

「どういう意味?」

「お前だって同じだと思つけど。相手のことを思つてているような発言でこまかしているけど、結果がはつきりするのが嫌なだけだろ。振られたら怖いからだけだね」

「あなたって、絶対に二重人格だね。お姫さんとかわいい子の前だけ、性格を変えてない?」

分からぬ男3

「多面性なのはみんな同じだろ。お前だって、先生の前、親の前、友達の前、同じ顔で接しているか？」と聞かれて、そう言われたら、言葉遣いも何もかも違うかもしれない。

「怖い先生と氣さくで友達感覚で話せる先生と態度が変わるだろ。それと同じ」

「煙に巻かれている氣がする。説得力があるような、ないような」「みんなそれぞれ、多面性を使い分けてるよ。無意識にね。一度、心理関係の本も呼んでおけよ。男性心理も分かつてないみたいだしな。神宮寺つてやつも苦労していそうだ」

「それは言わないで。悪いなって思つてる。今日だって誘われてたけれど、断つたのに、こんなやつと一緒にいるから悪くて」「こんなやつと言つた。あいつより俺のほうが楽しいぞ」「楽しくないよ」

「これだけ話しておきながら」

「あなただと、つい言つてしまつだけ。神宮寺と違つ」

「友達止まりだらうな、あいつの場合は恋人になるなら、お前の憧れがぶつ壊れた後しか無理だな」

「ぶつこわれ？」

「そう。お前は振られたり振つたりした経験もなさそうだ。表面だけ見て、相手を好きになつたつもりでいるだけ。本当に好きだったら、もつと早く言つてるね」

「本当に好きだから、却つて言えないもんじやないの？」

「言えないうちは本物じやないね」と言い切つっていた。こいつと話してると何だかおかしくなつてくる。

「ずれてる」

「お前のほうが分かつてないだけ。経験不足な真珠ちゃん」

「馬鹿にする言い方をしないでよ。の人たちと同じなんだ」

「誰だよ？」

「あなたの友達」

「その話は禁句。あいつらは怒らすと面倒なんだよ。今まで、色々あつたみたいだからな」

「色々って？」

「お前の学校にはいないのかもな。あいつらは親が金持だから、有力者とのつながりも強いから、色々あっても話が表ざたにならないからね」

「親がもみ消してること？ 信じられない。どういう人たちと付き合ってるのよ」

「そこまで深くは付き合つてないよ。誘われたときに、時々参加する程度。他の友達とも広く浅く」

「男性も同じなんだ？」

「一人に縛られないだけ。俺、人気があるから「駄目だ。こいつはとことんおめでたい。

「幸せな男」皮肉をこめて言つてみたけれど、

「ありがとう」と平氣で言い切つていた。駄目だ、つけるクスリがない。

分からぬ男4

一緒にワインデュショッピングをしていた。当田、着る洋服のことで意見が合わなくて喧嘩したり、メイクをするのをどうするかで迷っていたら、お店のお姉さんにちやつかり頼んで、メイクしてもらって、

「似合わないんだけど」とぼやいた。高校生だから軽いメイクにしてもらつたけれど、

「もつと、色々試せばいいだろ。臆病者」と言われてしまった。休日に会つた友達が目の大きさが激しく変わつていて、最初誰だか分からなかつたということを教えたし、

「それでもいいだろ。その子はがんばってるんだから、かわいいじゃないか」

「そう言われるとそうだけれど、日頃の彼女とギャップがあつたから

「学校と親の前だけそうしてるだけ。そつちが彼女が本当にしたいほうだからな。それぐらい分かれよ。占い師のくせに女の子のそういう心理が分かつてないな」

「おしゃれしてる時間とお金がなかつたの

「なんで?」

「小さなこりから家の手伝いがあつたし」

「ふーん」珍しく東条さんが何も言わなかつた。

「あなたとは違うよ。おこづかいたっぷりもらつて、ああいうお金持ちの子供と一緒に遊んでいる人とは価値観が違うの。あなたのほうこそ、そういう気持ち、分かつてるの?」

「当然だろ。今まであらゆる女と付き合つてきた。大概、何考えているか分かるようになつたね

「あつそ」

「相手の言葉だけで、どういう心理が読めるだろ。この間もお前が

紹介してくれつて頼んだとき、かわいいかどつかを聞いたら、お前は自分で確かめると言った

「それがなによ？」

「かわいい子なら、それは言わない。『かわいいよ』とすぐに答え る。自分で確かめろってことは、お前はそれほどは思つてないってことだからな」

「違う。人によつて好みが違うから、私がかわいいと思つても、あなたは違うつてことがあるでしょ。男子に人氣がある子と女子に人氣がある子の違いつてことよ」

「ああ、あれは容姿と雰囲気で選んでいるのと、ライバルになりそ うか、好きか嫌いかを本質で選んでいるかの違いだろ」

「本質？」

分からぬ男5

「女の子が嫌いって言うタイプと男が嫌いってタイプが分かれるのと同じだよ。自分にとつて、どうなのがが重要。女の子が嫌いって言つのは、自分の敵になりそうなタイプが多いからな」

「敵？」

「そう振り回しそうなわがままな子も嫌がられるけれど、それは男も同じだけど、女の子だけ嫌われる要素があるからな。男の前だけ態度をえるとか、抜け駆けしそうとか、そういうこと」

「それはなんとなく分かるけど」

「ただまあ、その統計も当てにならないだらうつて、女たちが言つてた」

「え、なんで？」

「テレビ局の場合は街角アンケートとかするだろ。それだと積極的な子が気軽にやりたがる。消極的なタイプは逃げたりするから、意見が偏るだらうし」

「え、どういう意味なの？」

「積極的な女性が嫌うタイプは、消極的な女性とは違つてくると思うからね。例えば、積極的な人の場合はおとなしい子やはつきりしない子が苦手つて人も多い。消極的な子だと、ずうずうしい人、わがままな人が苦手と言うだらうし」

「ああ、そういうことね。統計をまんべんなく取つていいたら偏らなければ、取り方によつて違いが出てきてしまうつてことね」

「そういうこと」

「そう言われるとそうかもしれない。学校で『あの子、駄目』とクラスメイトのことを駄目だししている子達がいるけれど、割と積極的だし、はつきり口に出す子だから。でも、口に出さない子が苦手と思っているのが、その子達なんだよね」

「だから、自分と似たような人は許せるけれど、『このタイプは苦

手』つて言つのが一緒だとグループになりやすいだけだろ。男子に聞いたとしても、おとなしいやつらに聞けば、きっと、『清楚で優しく文句を言わない人、ずうずうしくない人』とか並べそうだ

「積極的な男子だと違つてくるの?」

「俺はそういうので合わせられるから、そこまでこだわらないな。

ただ、かわいい子の方がいいけど

「高津と同じだ」

「誰だよ、それ?」

「『かわいい子以外は女じゃない』って、言い切つたことがあるらしくて。クラスの女子から反感を買つてた。ただ、本人に抗議しても軽く流しておしまい、どこか憎めないところがあつて、振られてばかりいるから、それでそこまで言われてないけどね」

「得な性格だな。俺も同じだけど

「はいはい、自慢はいいから」

「お前だけ、俺をちゃんと評価しないな。今まで何人かいたけれどな。小学生に駄目だしされたときは逃げたけれどな」

「小学生を彼女に仕立てようとしたの?」

「まさか。占いが当る小学生として有名だつたから、会つてみただけ。でも、駄目だった。自信満々でこの俺に難癖つけてたから。面白くなくて、育てたいとさえ思えなくてさ」

「見境ないね」

「育てるのも楽しいぞ」と笑つていて何も言いたくもなかつた。

分からぬ男6

食事を奢ってくれるところの、仕方なく一緒に食べていた。

「何か魂胆があるの？」

「ないよ。女性には優しいからね」

「嘘ばかり。あなたの場合は隠しているだけでしょ」

「男も女もお互いを理解しあえないだろうな、一生ね」

「え？」

「だからこそ、そばにいたくなる」

「意味不明」

「分かってしまった面白くないし、そこで終わりだ。楽しくないし」

「次から次へと行くわけだ」と呆れたら、

「お前の場合は付き合つてから言えと言つてるだろ。学校の友達に聞いているだけでは難しいぞ。実際に振り回されてみりよ。大変だぞ」

「今、この瞬間も大変だけど。あなたに振り回されて」

「ここまで親切にしてやつてるのに」

「してやつてる？ 上から目線だね。もつと下げてよ」

「子ども相手にはこれぐらいでちょうどいい」

「何が育てているよ。愛情もなしに好奇心だけで育てたってうまくいかないでしょ」

「はいはい、かわいい、かわいい」と言つたのにうんざりだ。

「そういう顔をするな。真珠ちゃん」

「気安く呼ばないで」

「俺のことも『尚毅』でいいぞ。そろそろね。『東条さん』って言われるのも悪くないけどな」

「じゃあ、カロン」

「そつちかよ。犬みたいだ」と笑っていた。

分からぬ男7

「カロンって不思議な名前だね」

「プロキオンと同じ。星から取った」

「星?」と上を指差した。

「そ、その星。お前、そういうのは氣になつても調べないタイプか?」

「さあ、調べるほどでもないから。そのうち聞けばいいかなと思つて」

「大雑把な女」

「いいでしょ。母親似なの」

「お母さん、綺麗だったな。若いときはさぞかしモテただろうな。お前と大違ひだろ?」

「そういう部分はおねえちゃんがモテてると思つた」

「あれは一部だけだらうな。もしくはすぐ冷めむ」

「ひどい」

「怒ることないだろ。必死さが困るからね。金田町の女つて、意外とすぐ分かるぞ。それをさりげなく隠せる女のほうがいいだろ」

「そう言われても、実態知らない。家ではそういうことを言つけれど、友達も多いみたいだよ。学生時代から遊びの誘いが多かつたし、電話も多く掛かってきていたし」

「それは類友だけだらうな。お前のよつたタイプなどは少ないはずだ。積極的ではあると思う。遊びと美容情報と男に関してはね。でも、それで彼女が狙つている男にモテるとは思えないけど」と言われてしまい、何も言えなかつた。

「良く知らない」

「ほらな。今まで家にまで連れてきたことは? ああ、ないか。彼女はそういう部分を隠して付き合いつつだな。話が決まってから、やつと紹介するかもね。でも、難しいかもな」

「どうして？」

「さよとな」としか言わなかつた。

分からぬ男⑧

「テレビに出るメリットってなにかな？」食事を終えて、ジュースを飲んでいたときに、聞いてみた。

「メリット？」

「だつて、華やかに見えて大変そうだつて聞いたから」

「ふーん、やつと調べたのか？ ああいう世界つて、確かに浮き沈みは激しいけれど、ファンに応援してもらつたり、声をかけてもらつたり、そういうのがうれしい人ならいいんじゃないのか？ それに、テレビって言つたつて、色々あるだろ」

「女優とかは？」

「賞がもらえる。賞賛される。お金ががつぽり入る
「がつぽり入るものなの？」

「一部だけね。女優と言つても、映画にテレビ、舞台もあるし。端役すらもらえないような人もいるだろしね。それだけで食べていける人なんて、ほんの一握りらしいぞ」

「少ないんだ？」

「やりたがる人は多いよ。でも、のし上がるには大変だよ。端役から上にいくのは大変だと思つ。女優でも売れる前に面白くない仕事をしていたと言う人は多いだろうな。どれだけ綺麗でも、演技が下手だと飽きられちゃうし」

「そう？」

「それに、画面で見る性格と正反対の人を何人か見たことがあるし」

「え、なんだ？」

「親父の付き添いで一緒にテレビ局に行つたことがある。そこで、親父に占つてほしいと頼んできた女優、俳優が何人かいたよ。親父に頼んでいるときは媚びて愛想が良くて、でも、ADには横柄な態度で命令してた。マネージャーにわがまま放題言つているのも目撃して冷めたしね」

「怖い」

「でも、それぐらいきつい性格で、したたかじやないと残れない世界なんだと思う。だからこそ、占い師に何かと相談しているみたいだからな。親父は何度か頼まれていたし」

「ふーん、そうやって有力者とつながりができるんだ?」

「そういう人たちと付き合っておくと紹介してもらえるんだよ。一流スポーツ選手とか、一流企業の社長や重役とか」

「そう」

「お前の母親はしていないみたいだな」と言われて、にらんだ。

「いいとこ、中小企業の社長だろ」

「知らない。お密さんのことあまり話さないもの。守秘義務があるでしょ」

「そうだつたな。じゃあ、今のも内緒、と言つても固有名詞は出さないのが鉄則だけどな」

「固有名詞?」

「名称だよ」うーん、そういうのも大事なのかなと考えていた。

分からぬ男9

「今日、どこに行く予定だつたんだ?」家に送つてもらいながら聞かれて、

「ちょっとね、知り合いで頼んで、色々と」

「ふーん、俺に言えないことか?」

「言う必要はないでしょ。あなたは赤の他人なんだし」

「恋人候補だろ」

「違います。あなたが勝手にそつ思つているだけ」

「じゃあ、何で、今日、付き合つたんだよ?」見透かすような含むような顔でこつちを見ていたけれど、

「敵の実態を知りたかつただけ。ライバルでもないけど、占い師としてのあなたは興味があるからね。まだ、未知数だけど」

「計り知れないだろ?」

「分からぬ。あなたの占いって当るの?」

「当ると思えば、当る。当らないと思えば当らない」

「なによ、それ?」

「自分で確かめてみれば」と笑つていた。

家に着く直前に、

「これからデートなんでしょ」と聞いたら、「いい勘してんのだな」と笑つた。

「夕方からデートする前に時間が空いたから暇つぶしつて訳なの?」

「楽しかつただろ」と平然と言い切つた。つげづくおめでたい。自分と付き合える女は幸せだと思い込んでいる。

「あなたが良く分からぬ」家に着いて、車を降りてから、

「付き合えば分かるよ」と言い出した。

「絶対にありえない」と言つたら、そばに寄つてこようとしたので、

「やだ」とにらんだ。

「『楽しかったわ。』」馳走をまでした。また誘つてね」と、言えばいいものを「ない」

「じゃあな、俺は楽しかったよ」と、言いながら車に乗り込んで行つてしまつた。

「呆れるなあ

「お前のほうが呆れるだろ」怒つた声がしたので、振り向いたら、神富寺がお店から出てきて、

「え、いたの？」

「何がいたのだよ？ 俺の誘いを断つて、あんなやつと」とかなり怒つっていたので、

「ごめん」と言つたけれど、

「呆れるよ。何が気軽にテーートできないだよ。あいつと付き合つて

るじゃないか

「学園祭の打ち合わせ

「言こ詰はいよ。あいつにだけは近づくなつて言つてるだら」

「神富寺、変だよ？」こつもだと、そこまで怒らないのに、ビビりじ

たんだらうつ？ と思つた。

「お前は俺が心配したこと分かつてないみたいだ。あいつと付き合つところくなことにならないぞ。それぐらい分かれよ。俺がどれだけ心配してたか。携帯だつて出てくれなくて」と言つられて、慌てて、携帯を取り出した。電池切れだつた。

「ごめん」と謝つた。

「昨日、充電しよつと思つて疲れてそのまま寝ちやつたから」「言こ詰はいよ。勝手にしち」と帰つてしまつた。

分からぬ男10

「神宮寺？」と声をかけたけれど、振り向いてもくれなかつた。家に入つたら、

「喧嘩？」母が私の様子を見ていたらしくて、聞いてきた。

「怒られた」

「かなり心配していたわよ。神宮司君、東条さんによくない噂を聞いたらしくて、それで心配して、わざわざ来ててくれたみたいよ」

「え、そうなの？」

「友達と一緒に出かけたらしいけれど、その友達が教えてくれたらしくて」

「悪いことをしたな。今日、神宮寺に誘われていたのに」「学園祭の打ち合わせと言つていたじゃない」

「半分はね。半分は違うみたい」

「あり、なに？」

「良く分からない。あの人、どうして近づいてきたんだろうね」「真珠に興味があるだけでしそうね。占い師としてね」

「見習いの卵になつたばかりで占い師と名乗れないぐらい未熟だよ」「多分、あなたのことを相当気にしているのかもしれないわね。そういう能力だけはあるのかも」

「え、何の能力？」

「相手の力量が分かる能力よ。彼はライバルになりそうな相手をマークしているだけでしそうね。彼の占いを直接見たんでしょ？ どうだつた？」

「さあ、お客様は喜んでいたよ」

「接客の仕方とか、そういう部分じゃないわ」意味が分からなくて、母の顔を見た。

「まあ、いいでしょ。そのうち分かるでしそうから。ほつときなさい。宣伝のためと割り切つて、それなりにつきあえばいいでしょ」

「お母さんって、すごいね、やつこいつとじる」

「女一人で生きてると流すところは流さないと、疲れるわよ」

「お母さんに似ちゃったな、私。面倒だと、自分が悪者にされても流しちゃうといろがあるって、怜奈ちゃんに怒られた」

「自分が悪者にされるつひとつひとつによ、母がちょっとむつとしていた。

「お母さんだつて、あるでしょ。占つ結果と実際の結果がこちらは当たつたと思つていしても、相手は当つていないと言い張つたり、納得してなかつたり、振られたら私のせいにされたことが何度かあるから、それで『謝らなくてもいいのに』と、怜奈ちゃんが怒つてた」

「ああ、それね。確かにお客様相手だと、相手の気持ちが一番大事だからね、密商売だとそういう部分でこちらが泥をかぶると言つか謝るケースはあるわね。それなら、納得ね」

「お母さん、変わり身はやい」

「後まで引きずると占い師としては大変なの。あなたも切り替えるよつこしなさいね」

「お姉ちゃんはお母さんに似たんだろうね」

「神宮司君も仲直りしておきなさい。心配してくれて、勉強でもお世話になるんだしね」

「お母さん」と言つたけれど、聞いてなかつた。お世話になる人だから仲直りするつと書つのがどうも苦手だ。それより友達だから仲直りしたいと思つた。

神宮寺には何度か電話を掛けたけれど、出してくれなかつた。怜奈ちゃんに相談したら、しばらくほつとくように言われたけれど、お店に遊びに来たクラスメイトから、神宮寺が女の子と何度も日撃されていたようだ、

「取られちゃうよ」と軽く言われたけれど、仲直りできないままでわいつやうのが心配だつた。

「全滅」怜奈ちゃんがお店に来ていきなりぼやいた。

「何が全滅?」と聞いてみた。聞かなくても分かつてゐるけれど、「誘われて、これはと思った人、全滅。全然、駄目」

「そう。残念だね」

「占つて、どこに出会いが落ちてるか」

「落ちてないでしょ。でも、やれと言つやら、やるけど。半額ね」

「はいはい、友達割引ね」と言つて占つてあげた。今の状況、問題点をいくつか挙げて、

「むずかしいね。しばらくは同じようなことを繰り返す」と言つたところで、東条さんが言つていたことと同じだなと思つた。あいつの占には当つているのかもしない。

「そうだね、時間が掛かるよ。出会いの数は多こと思つ。ただね、怜奈ちゃんが満足するようなものはないね」

「そうなの?」

「自分をもつと磨いたらつて、怜奈ちゃんには必要ないかも。多分、譲るところは譲つたほうがいいのかもしない」

「なによ、それ?」

「妥協できるところは妥協してみること」と

「嫌。絶対に嫌」と言つたので、そうだろうなと思つた。

「真珠だつて分かつてゐるでしょ。私が妥協できない性格だつて

「さうだけどね。怜奈ちゃんは達觀してるとこもあるけれど、納得できないことは怒るものね。結論としては、しばらく無理つてことで」

「えー、もつと明るい未来がほしい。占いつて、そういう結論じゃないと駄目だよ」と怒られてしまった。

「ごめん」

「真珠の占いつて、そうだものね。それで当たることが多いからね」「どういう意味?」

「当たり障りのない結論に変えたりしないし、結構、ズバッと言つからねえ。後でそういう意味だったんだと気づくし」

「え、そう?」

「言われたくないことを言わると認めたくないから、相手を怒るものだからね。当たり障りのないほうが苦情は少ないかもね」

「それほどは言われてないよ。それに怜奈ちゃんには本当のことを言つたほうがいいから、教えたけれど、言わない人もいるよ。相手が怒り出しそうな雰囲気のときはさすがにオブラーントに包むつて」「そうだよね。確かにそれはあるよね。人に言われたくないことって多い。高津なんて、その連続。『あなただけには言われたくないわ』って、やりあつてるものね」高津とデートまでした子がクラスに一人いる。その一人とは良く言い合つている。

「高津つて、あれだけみんなに注意を受けても、どうして言つちゃうんだろう?」

「だから、流してるからでしょ。人の忠告なんて聞かない人なんていくらでもいるじゃない」と軽く言われて、そうだけどなあと考えながら、

「それより、神宮寺はいいの?」と聞かれた。

「電話はしてみた。謝つたけれど、何だかそつけなくて」「面白くないんだと思うよ。学園祭の打ち合わせって大義名分があるっても、デートしたと思ってるんだろうから。自分とのデートは断られて、東条さんは後からの誘いで行ってしまった。男の面子があるから、怒り出して引っ越しめがつかないと、色々あるんでしょ」「嫌われちゃったのかな?」

「違うよ。真珠のことが心配だったから、それで怒れただけ。そのうち、仲直りできるよ。それより、東条さんは?」「誘われても全部断つた。神富寺と仲直りしてからじゃないと」「律儀だね」

「だつて、怒らせたままでは」

「神富寺だつて、仲直りしたいと思つてると思つ。ただ、きっかけがつかめないと言つとか、言い出せないだけでしょ。そのうち、きっかけができるよ。バイト代は溜まつたの?」「怜奈ちゃんが話を変えた。

「それなりに」

「そう。雪人さんのほうは?」

「勉強が忙しいみたいで、時々見かける程度」

「早くしないと地元に帰っちゃうよ」

「分かってるけどね」とため息をついた。

知り合いの紹介だと言つて、占いに来てくれた中学生がいたけれど、わがままだつた。「紹介だからタダにしてくれ」から始まって、占い結果が良くないから、「えー!」と言つたり、「もつといいことを言つてよ」とぼやいたり、拳句が、「えー、こんな結果なの? これじゃあ、払いたくない」と言い張つたときは、最初に断ればよかったなと思った。知り合いは誰なの

か聞いても答えられなかつたので、その子の顔をつぶすのもいけないからと渋々だつたのに、そう言ひ出して、「だつて、当たらな「じやない。こんなことなら他に行けばよかつた」と言ひ出して、「じゃあ、いです」と言おうとしたら、「お待ちください、お客様」と母が寄つてきた。

様子を見ていたらしい母が来たために、

「なんですか？」お客さんは明らかにむつとしていて、

「お客様が『占ってほしい』と言った時点で、お客様との間に契約が成立します。そして、占い師は誠意を持つて、相手のことを占わせていただきます。その代償が代金になります」と言られて、お客様の子が、

「うつとうしいなあ」と、言い出して驚いた。

「お客様なのに、その言い方、ないでしょ」

「お客様は大切です。でも、誠意を持って占うにはそれなりのものがあります。占いをするには集中力が要りますので体力も気力も使います。相談に乗り、話を聞き、占いを行う。そうして、代金いただくのです。簡単に、「当らないからお金を払わない」なんて言わないでください。占いを提供した後で、内容が気に入らなかつたらと黙つて、払つてもえるのは困ります」母がきつぱりと言いつつて、さすがに中学生の子が、一緒に来ていた子に助けを求めていた。

「どうしよう?」と相手の子が言い出して、

「払うわよ、払えばいいんでしょ。何よ、こんな店」と中学生の子が引つ込みがつかなくて立ち上がり怒り出した。

「占い師が提供するものの対価を最初にお知らせしております。それが気に入らないのでしたら、最初からお断りください」母がひるむことなく、はつきりと相手の目を見て言つたら、さすがに迫力で負けたのか、相手の子がお金を渋々取り出して、

「こんな店、二度と来ない」と言い捨てて行つてしまつた。

「大丈夫なの?」と聞いた。そうしたら、

「今の子って、例の子じやない?」と知り合いがお店に入ってきた。様子を見ていたらしくて、

「大丈夫だつた？」と聞いてくれて、
「知つてる子なの？」と聞いたら、

「あの子さあ、学校で何度か噂が出てたよ。お店にクレームをつけて、アイスクリームの代金を踏み倒すとか、ハンバーガーをタダで食べたとか自慢してゐるらしいよ」啞然。

「やっぱりね」と母が言つたので、

「分かつてたの？」と聞いた。

「そうね。そういう人はなんとなく分かるわよ。波長が悪いものが
あるから、そばに寄れない人もいるし」うーん、そう言われると途中で何度も気持ちが悪かったのを思い出した。バイトや家事などの疲れだと思っていた。

「困るね。うちの評判が悪くなっちゃう」

「誰も鵜呑みにしないよ。あの子の親なんて、もっと色々あるみたい。クレーマーの常習者だつて聞いたことがある

「親子で似てるんだ？」

「だから、一度と関わらないほうがいいよ。次から『タダでずっと占いをしてほしい』って言われ続けるだけだから、そういう子は時々いるけれど、さすがにさつきのはちょっとなあと思つた。

「困るよね、ああいう子。それより、真珠に占つてもらおうと思つて」

「なに？」

「成績が上がらないからさあ、それで」と言つられて、「どうぞ」と席を勧めた。

夕食のときに、母に苦情処理のことについて注意を受けた。占いつかないタイプが来たら、他の人がいなければ、用事があると『いかしたり、色々な方法を使って断るらしい。

「そう」

「苦情はこういう仕事をしているといくつかあるわ。でも、こちらが謝らなくてもいい場合は、きつぱり言つてしまつたほうがいい場合もあるから、気をつけて。さつきの中学生の場合は、あの子だけじゃなく、他の子も連れてきて、その子達も『タダで』と言いく出しかねないし」

「そこまで図々しいの？」

「時々いるわよ。おばちゃんに値切られて、その友達も連れてきてくれるのはいいけれど値切つてくるのよね。それを自慢げに言いふらすタイプだから、知り合いに聞かれて困っちゃつたし」

「そう。それは困るね」

「こちらとしては最初に価格を教えてあるのだから、それに不満があるのなら、最初にお断りしてくださいと言つているわね。占つた後で、難癖つけて値切ろうとしたり、タダにしてもらおうとするような人って、いい顧客にはならないの。二回目はないわ」

「え、そう?」

「そうよ。長い付き合いの人はそういう部分でけじめがあるものよ。『知り合いに紹介するから安くしてくれ』、『友達を連れてくるから』連れてきたことも紹介してくれたことも一度もないわね。紹介してくれる人は正規料金をちゃんと払ってくれるし、態度もそこまで馴れ馴れしくないわよ。時間もちゃんと守ってくれるしね」

「そういう人を大事にしないといけないんだね」

「さつきの中学生みたいな人は割合から言うと少ないけれど、印象に残るから後で占つ人に、少しだけ待つてもらつて気持ちを落ち着

けないといけないからね」人によつては、気持ちを落ち着けるために、お香をたいたり、アロマセラピーを取り入れたり、水晶やパワーストーンを置いていたりする。音楽をかける人もいるけれど、ここでは小さな音で聞こえるか聞こえないか程度のものしか掛けていない。相談者によつては体力も気力も消耗してしまう人もいる。そのため切り替える時間がいる。

「波長が悪い人って、時々いるの？」

「そうね、真珠は日によつて違うんでしょ？」と聞かれた。私は母のように安定した気分を保てない。占いをするには気分が安定していないとちゃんと占えないでの、体調管理をするように秋さんに注意されている。睡眠時間を減らしたり、偏った食事をすると注意される。人によつてはジャンクフードも食べない時期を設けるらしい。野菜だけの食事にしたり、断食をする人もいると聞いている。

「私つて、安定感がないからな」「高校生なら当たり前でしょ。楽しいことも多いし、怒られることがあるし、落ち込むことだってあるしね。恋愛してたら、もつとあるでしょ」つけて、東条さんが言つていたことを思い出した。

「恋愛つて、占いを駄目にするの?」

「見えなくなる人もいるわよ。そこばかりに気が行つてしまつて、占いに集中できないらしくわね」

「お母さんはどうだつた?」

「それは、まあ、それなりに」と言つた。

「つらやましい」

「真珠はモテないの?」

「怜奈ちゃんみたいに、街を歩けば声を掛けられるつてことは少ないよ」

「それなりにはあるでしょ」

「大根とネギを買い物袋に入れて歩いていたら、さすがにない」と言つたら、

「『めん、そうだつたわね』と謝つてきた。買い物は私が学校の帰りに買つてくる。クリーニングなども私が行つたりして、母はそういうものあまりしていない。

「お客様に言われるのよね。真珠にばかりにやらせてくるから、縁遠くなるつて」

「それが関係あるの?」

「あるわよ。輝子がそうでしょ」と言つて切られて、笑うしかなかつた。

「そういうのがあるのかな?」

「後でメツキがはがれちゃうんでしょうね。見えてない男も多いけど、それだと輝子が物足りないのよ。お金持ちの世間知らずのお坊

ちやまと結婚するしかないわね。気が強くても許してくれるような

寛容だけれど鈍感な人」

「お母さん」とさすがに呆れたら、

「意外と男って口に出さないだけでしつかり見てる人もいるのよね。後でけんかしたときなどにそれを出されると、『そのときと言つてよ』と怒れるし」

「みんながお母さんみたいに言えないよ」

「そうね、だから、小さい喧嘩をしておいて、程よく息抜きしないとね。そういう部分を見せ合えるような仲じやないと長続きしないわ。取り繕うような相手だと肩凝るし」

「恋愛してみたい」

「やめておきなさい。真珠が恋愛すると靈感が減るわよ。下手したら、一生戻らないかも」

「靈感？」

「勘が鈍るることよ。真珠は感受性が鋭いところがあるから、それで占いができるのだからね。それで食べていきたいのなら、恋愛は程々に」

「のめり込まない程度にすればいいんじゃないの？」

「コントロールって、できないものよ。意外とね。私もモテたから、それなりにできると思つてたのよね。でも、自分が好きになつたときはできなかつたわ。相手を独り占めしたくて、いつも一緒にいたかったから。それで、駄目になりそうになつたこともあつたわ」「その恋はどーなつたの?」と聞いたら、思いつきり怒り出して、「あいつだけは許さない……ということね」と言われて聞くんじやなかつたなとため息をついた。

そろそろ夕食の支度をしようかなという時間に、見覚えのある女の子がやってきた。友達の友達で、確か……、

「どうしよう、大変なことになつたの？」とになり泣き出した。彼女の両親は離婚しそうだと言つ。前もそのことで占つをした。結果、喧嘩の数は多くなるけれど、そのうち収まると言つて、相手は元気がなかつたけれど、そのうち、離婚は回避できたと友達が教えてくれていたから安心していたのに、

「離婚されたら、バイトに行かないし、学校に行けないかも、あ、お母さんのほうについて行くとおこづかいがもらえないし、あ、でも、お父さんのほうだと新しいお母さんとうまくなんてやつていけないし、あ、でも、相手は遊びだから結婚しないかも。私、邪魔にされて、……ああ、かわいそう」と一通り自分の世界に浸つていて、「あ、あの」としか言えなくて、

「だから、占つて。前みたいにいい結果になるよ！」「占つての」が一番困る。いい結果が出るよつのはおかしいと思えるのに、相手が必死すぎて言えなくなる。何とかなだめて占つことにした。ただ、今度はちょっと困つた状況で、お母さんがもう耐えられなくなつているようだが、お父さんの気持ちは向こうに行つてしまつていて、浮気の数が多くて、お互に結論を出したほうがいいのか、迷いがあると伝えたら、

「やだー」と怒り出した。結局、別居するだろつ、結論はまだ先になつて、喧嘩が多いだろつと言つ結果だった。さすがにそのまま伝えられなくて、

「今は冷静になる時間が必要だから。お互に冷静になるよつ、どちらの味方もしてはいけないと思つ」と言つた。

「やだ。すぐに仲直りさせて、私が困る」とぼやいていたけれど、「難しいと思うよ。時間が必要だから」と答えた。

「疲れた。つくづく、疲れた」

「そうねえ、離婚問題って時々あるわ。相手の不倫とか色々ね。借金も困るしねえ」

「そういうのも来るんだね」

「今は学生相手だけれど、いつか客層が増えてくるでしょうからね。占えない、手に負えないときははつきり断りなさい。自分の力量を知つていないと困るわよ」

「分かった。そうだよね、前に自分が知らないことを相談されて困ったの。あらかじめそういう部分も知つておいたほうがいいんだろうね」

「そうねえ、それなりに相手の立場になつてあげないといけないし、でも、あくまで冷静に見てあげないとね。同情しそぎたら占いができないから」

「明日、例のところに行って来る。この間、行けなかつたし」「秋ちゃんの紹介だから、失礼のないよつこ」「言わされて、「はーい」と返事をした。

秋さんに教えてもらつた芸能人養成学校みたいなところに行つた。紹介された人は、歌手のマネージャーをしていた人だつた。ついていた歌手はヒット曲が1、2曲あつたらしいけれど、後はバラエティに出て、それでいつの間にかいなくなつたと教えてくれた。

「何を聞きたいの？」相手の人間に聞かれて、芸能人の実態、実際にあこがれて、どれぐらいの人人が願いが叶うかななどを聞きたいと教えたら、

「そうねえ。私が見たのは歌手が多いわね。私がついた子は売れるまですごく時間が掛かつたの。最初に別の人ついていたんだけれど、それまでに芸名を何度も変えて、グループに入つてみたり、色々キャラを変えて、設定を変えてみたのよね。全部、泣かず飛ばすで」

「芸名、キャラを変えるんですか？」

「あら、結構多いわよ。何度も変えて、演歌だったのに他のジャンルに路線に変更したり、バンドを組ませたり」

「え、適応できるんですか？」

「手を品を変えて、色々試してみるものなのよ。実際に、この子は売れると周りが太鼓判を押すような子でも、世間に中々受け入れられなかつたり、性格があまり良くなくてトークで使えないからラジオ回りしても人気が出なかつたりするから」

「ラジオ？」

「そう、地方局に営業に行くのよ。スーパーのイベントで歌つたり、CDショップを回つたり、色々するのよ。販促グッズ自分で配つて、ラジオやテレビの力を持つている人にあいさつ回りもしたし」

「なんですか？」

「でも、私がついていたある歌手は性格がちょっと困つた子でね。わがままなところがあつて、ちょっと売れたら態度がガラツと変わ

つて、それで、結局、歌もそれなり、人気もそれなりのまま終わつたわ。売れるまでも難しいけれど、卖れたのを維持するのはもつと難しいわね。それをマネージャーや周りの無能のせいにするような子は応援してもらえないからね。お客様もそういうのが分かつてくるから、すぐに飽きてしまうしね

「難しいんですね」

「自分でデモテープを持ってきた子が何人か事務所に来たわ。でも、挨拶もなつてないし、礼儀も知らないし、自分はかわいいし歌はうまいから当然売れるはずだと思い込んでいて自信満々なのよ。実力に見合つた自信ならみんなも応援するけれど、実力がないと、見向きもされないしね。まず、自分のことをわかつてないとダメね」「どういふことでしょう?」

「自分の魅力をわかって、セルフプロデュースする能力が必要だと思うわ。同じ実力なら魅力的な人のほうが印象に残るでしょ。いくら、歌が上手でもその人自身の持っているイメージが良くないと駄目でしょう？ 自分が異性にモテると思うなら、その部分をアピールして演出しないといけないし、同性に応援してもらえるような歌手になりたいのなら、真似したいと思うようなファッショントritoみたり、自分の似合う髪形を色々試したり、自分で詩を書いて自分の世界をアピールするわけ」

「なるほど」

「そういう部分で自分が分かつていらない子、状況判断ができない子だと、すぐにいなくなっちゃうからね。受け答え一つで色々言われてしまう世界だし。受け答えが下手な子だと、性格が分からぬよう露出を控えるという戦略も使うことがあるけれど、それだとある程度知名度が出ないと難しいし、それなりに魅力がないと固定客がつかないしね」

「固定客ですか？」

「そうね。アニメソングだと、それで注目してくれるお客様がいるし、同性なら等身大の同年代の子に訴えられるような曲を作つていかないといけないしね」

「はあ」

「そういうので色々がんばつてもね、中々売れないのよ。何年も売れなくて、そのうちプッシュしてもらえないくなるの。結果がいつも出ないとね。目をかけてもらえない子だっていくらでもいるしね」

「人間関係も大事でしょうか？ 力を持つている人に取り入れるようだ」

「ああ、それね。確かにそれって大事なのよね。ただ、それだけだ

と長く続かない。自分の魅力を開花させてくれるような相手を見抜く力も必要だけれど、お客様が応援してくれるような子じゃないと難しいわよ。例えば、売れた途端にわがままになる子って、結構多いけれど、それで悪口ばかり言つていたり、傲慢な振る舞いをしていると、それが画面に出てくるからね」

「画面？」

「そう、裏表を使い分けていけば大丈夫だと思つじやない？ みんな、それなりにやつてることだけど、でも、女人の入つてそういう部分で見抜くじゃない。見た目じゃなくて、何気ないしぐさや表情も良く見てる。それで、性格が分かつてしまつからね。他の子を妬んで悪口を言つたり、自分のライバルが脚光を浴びているので文句を言つたりするより、自分を磨いて努力していける子がいいと思うわよ。どこのポジションに行つても、仕事は手を抜かない。挨拶も欠かさない。自分を見失わない。ああいう業界つて、利権も絡んでくるから、よからぬ人もいっぱい寄つて来るから、自分で気をつけないといけないのよ。友達の紹介でも危ないからね」

「え、そなんですか？」

「昔の素行が悪かったころの写真とか出でてくる時があるでしょ。それだけでイメージが下がって、お客様が離れちゃうことも多いからね。性格が良くて応援したいなって、お客様にもスタッフにも思われるような子じゃないと長くは続けられない」

「引き立てられるには運の良さも大事なんですか？」東条さんが言つていてことを聞いてみた。

「ああ、それつてあるわね。自分の持つているものが時代に合つてないと困るし、自分を認めてくれる人には確かに運の強さって大事だと思つけれど、それだけだとすぐに消えちゃうわよ。意志が強くて、何を言われてもがんばれるような子じゃないとね。実力だけあっても認められない、努力をしても必ずしも認められるわけじゃない。でも、一度、ステージに立つて、お客様の賞賛を浴びるとね、やめられなくなるそつよ。何人かがそう言つていたから」「賞賛ですか？」

「ステージに立つて、お客様が自分の歌を聞いてくれて喜んでくれる。手を振つてくれる。そういう状態を味わつちやうとやめられないんでしょうね。私は別の意味で楽しかつたけれどね」

「何がですか？」

「そうね。自分がついた子がどんどん輝いていくのを見るのが楽しいのよ。自分で育てて、段々と自信がついて、受け答えがしつかりてきて、本物に変わる。楽しいわよ。今もそう思つて、育てているけれど、中々いないわ。軽く考えている子があまりに多くて」「軽くですか？　でも、プロを目指しているのなら、しっかりしているんじゃないですか？」

「プロと言つても、簡単にテレビに出て適当にしゃべつて、それで、流行の洋服がいっぱい買えて、と思つてるだけの子も多いわよ。ち

よつとかわいいだけで出られると思つてゐる。確かに飛びぬけてかわいい子なら、短期だけ出られたりするけれど、その後が続かないわよ」

「えうなんですか?」

「歌手にしたつて、歌詞や曲を作つてレコードイングして、それから、写真を撮つたり、ビデオを撮影したり、色々するけれど、テレビに出たりする以外の時間のほうが多いのよ。コンサートの時間より、打ち合せの時間のほうが多いのに、そういうのは嫌がるのよね。待ち時間も多いし、変更になることも多いし、大人の事情って言うのもあって、それで苦情なんて言えないし、でも、我慢できないらしくて文句ばかり言つてた子がいたからね。すぐにいなくなつたけれど」

「はあ」

「脚光を浴びている時間ばかりじゃないしね。それに売れてくると何をしても、何かと言われちゃうし、嫌な噂を流されても、同業者に嫌味を言われても聞き流せるような子じゃないとね。家庭に恵まれなくて苦労している子が、がんばって残つていても、それが理由よ。弱い子じゃ、すぐに、消えちゃうからね」

「聞き流せるものなんですか?」

「最初は無理よ。でも、段々と強くなつていいくのよ。自分の目的を強く持つて、負けたくないと思ひながらがんばつているのを見つくると、私もその子の力になりたいなつて思うからね」

「そうですか?」

「あなたもやつてみたいのなら、紹介するわよ。占いしながら歌うとか」

「いえ、いいです。遠慮させてください」

「冗談よ。あなたはそういうことに興味がなさそうだものね。でも、不思議な顔をしてるわ。ひきつけられるような、見透かされるような」

「えうですか?」それは時々言われたことがある。友達にも何度か

言われたり、男子にはそつやつてからかわれたことがある。

「占い師も甘くない世界かもしれないけれどがんばってね」と言つてくれたので、

「ありがとうございます」と頭を下げた。

母のお客さんの紹介で客室乗務員をしていて、今はマナー教室を開いている人のところに話を聞きに行ったり、有名スポーツ選手が通うスポーツジムにトレーナーをしているスタッフに話を聞いて、業界の事情を教えてもらつた。話は面白いものから大変な苦労話まで色々あつたけれど、どこも想像していたのよりはるかに大変だと思い知らされた。

「面白そうだね。私も一緒に聞きに行けばよかつた」怜奈ちゃんがデートの帰りに家に遊びに来て、色々あつたことを相談した後に言われてしまつた。

「デートのほうが楽しいよ。苦労話って尽きないんだね。客室乗務員つて、立ち仕事で時間が不規則で腰痛がひどくなることもあるし、体力がないと難しいんだつて。楽しいことばかりじゃないらしいの。女性が多い職場だと色々あるつて」

「そうだろうね。芸能界と同じじゃないの？」

「それに、スポーツ選手もドラフトとかで鳴り物入りで入つても、2～3年以上残る人があまりに少ないんだつて。小学生から始めて、高校や大学に来るまでに体を酷使しているから、故障に悩まされたりする。それをマッサージしてもらつたり、針や温泉治療したり、身体のケアには人一倍気を使うような人じゃないと無理だつて。一流選手ほど、練習時間が長いし、ノートを何冊も持つていて勉強していくたり、身体も道具も大切に扱うんだつて」

「そうかもしぬないね。夜遊びばかりしてたつて、強くなれないだろうし」

「息抜きはするかもしぬないけれど、程々だと思つて言ってた。息抜きも大事なんだつて。身体をきちんと休めてあげるのも大事だと言つていたし、気持ちを切り替えられるような人のほうがいいつ

て。野次は飛ばされるし、街を歩いていて試合の勝ち負けやフォームや采配などで、知つたがぶつて色々言われるらしいの。そういうのもあしらわないといけないから大変なんだって」

「へえ、そういう話までしてくれたんだ？ 真珠が高校生だからかもね」

「え、どうして？」

「だつて、真面目に聞きに行つてるから、相手も教えてくれるんだと思うよ。ミーハーな聞きたがりなだけだつたら、そこまで教えてくれないよ」 そう言われたら、教えてくれなかつた人も多かつたけれど、割と親切に教えてくれたかもしれないなと考えていた。

「真珠つて、真面目だよね」

「本を読んだつて分からぬもの。聞いたほつが早いじゃない」「そういうところの行動は早いのに、何で恋愛になると躊躇するのか。神宮寺と仲直りしたの？」

「家まで行つた」

「あ、何だ、行つたんだ？」

「さすがにあのままじゃ嫌だからね。だから、バイトの帰りに行つた」

「それで？」

「牛丼で許してもらつた」

「安上がりだなあ」

「大盛り2杯食べてた。男つて良く食べるね」

「いいじゃないの、それぐらいで仲直りできるならね。神宮寺って意外と単純なのかも」

「でも、ほつとした」

「神宮寺とデートしてあげたら？」 と聞かれてむせた。

「なに？」

「今度、一緒に勉強はするけどね」

「それはデートとは言わない」と呆れられてしまった。

「はあ」

「何度もだよ」神宮寺と一緒に映画を見た後に、食事していた。

「だつて、疲れちゃったからね」「

「映画で気分転換できただろ」

「途中の内容が」と思わず言ってしまった。

「占い内容と一緒にするなよ。でも、何で、真珠にまで頼るんだろうな」と神宮寺が呆れていた。

私がお店にいる日に来てくれた子は何人かい。親が離婚しそうだと言っていた子は、結局、母親が家を出て行ってしまい、今は家事を自分でしないといけないとぼやいていた。

「姉が結婚するけれど、相手が怪しい人だから占って」と言われた子は、「相手を調べたほうが早い」と言つたら、「調べるのは悪いかと思って」と言い出して、結局、占つたら、結婚は延期したほうがいいだろ」とアドバイスしたら、後で、女性関係が発覚したらしい。

でも、一番困ったのは、神宮寺のクラスの子が連れてきた子で、男性問題で悩んでいるという相談だった。詳しく聞いてみると、相手が誠実じゃないとか、話を聞いてくれないと、煮え切らない態度ではつきりしないとぼやいていたけれど、

「内緒にすることがあるよね」と聞いたら、二人が顔を見合わせていて、相談者の子がお腹を思わず見ていて、

「子ども?」と聞いてしまった。カードに出ていたからだ。

「え、何で分かるの?」と聞かれたけれど、黙ついたら、二人がひそひそと話した後に、仕方なさそうに事情をポツリポツリと話し始めた。街で出会った男性の家に何度も遊びに行き、そういう関係になってしまい、子供ができてしまい、

「だから、どうしようか、迷つて」と言われて、考えてしまった。

本当のことを言つべきだらうが、それとも……と考えていたら、家の奥で待っていた怜奈ちゃんがやつてきて、

「あら、何だ、来てたんだ？」と、知り合いらしく相手の子に明るく声をかけていたけれど、様子に気づいて、「ごめん」と奥に戻ろうとしていて、

「いいの、怜奈ちゃんも聞いて」とその子が言い出して驚いた。結局、相手の男性は逃げるだらう。子供のことはよく相談したほうがいいだらうとしか言えなかつた。一人は浮かない顔をして帰つて行つた。神富寺はその子の噂を知つていて、私のところに来たことも噂になつていたらしく聞かれてしまい、最初は黙つていたけれど、私の様子で気づかれてしまつた。

夏の経験2

「困ったね。相談に乗れなかつた」

「誰も乗れないだろう。本人が自分で考えて決めるしかないぞ」

「でも」

「お前は学校が始まつても知らん顔してろよ。特に噂好きの連中には」

「分かつてる」

「流れるのは時間の問題だ。検査薬を買つてるとこを知り合いで見られているからな」神宮寺はその噂を知り合いの知り合いから聞いたらしい。

「何だか、色々あるもんだね」映画の途中で子供ができる、どうしようと言つ場面があつて、さすがにそのときは思い出してしまつた。「切り替えろよ。いつもならそつしてるだろ」

「だつて、相談に乗つて上げられなくて、力不足だよね」

「そうか? 誰も言って上げられないだろ。よく話し合えと、他の人でも言つと思う。それから自分で結論を出すしかないしな」

「そうだね。占い師つて、色々な引き出しを持つてないとできないね」

「引き出し?」

「そう、人生経験をいっぱい積んでいないと難しいかもね」

「そうか? 話を聞いてもらえるだけでも違つだる。占つてもうつても、最後は自分。相手の迷いに手を貸せても、そこまでだろ。決めるのは自分なんだから」

「そう言われても、気になるよ

「切り替えろよ。他の相談者が来たら、どうするんだよ?」

「そうだつたね、ごめん」

「学園祭、本当に行くのか?」と聞かれて、

「頼まれちゃつたからな。それに宣伝しないといつちの店がマジでや

ばい」

「そうだつたな」

「つちはプロキオンみたいに占い雑誌や女性誌にデカデカと大きな宣伝は載せられないからね。時々、小さく載せてもらってるけれど、それでもやりくりが大変」

「お母さんがカフェのほうをやつたら違うだろ」

「卒業したら、それも考える。その前にお父さんを見つけないといけないけれど」

「やつぱり行くのか?」

「気になってるからね」

「宮城だつたな?」と聞かれて、父の最期の滞在予定先を言わされて、うなずいた。

「俺も一緒に行つてやりたいけど」

「え、それはちょっと困るよ。いくら友達でも一人で旅行するの?」「恋人になればいいだろ」と言われて、

「何度か他の子とデートしたんでしょ」と聞いてみた。噂は出ていた。怜奈ちゃんが教えてくれた。神宮寺は苦い顔をしていた。「駄目だつたよ」かなり経つてからそう言つたので、「ごめん」と謝つた。

夏の経験 3

「友達の紹介でひと夏だけの恋だったな。恋でもないかもしないけど」

「相手の子がかわいそうじゃないかな？」

「俺のほうがかわいそうだ。デートに誘つて断られて、あんなやつと」

「じめんなさい」

「悪い。言わない約束だったな」神富寺が謝つてくれたけれど、「あれから、あいつから連絡は？」と聞かれて、連絡があつても呼び出しがあつても断つたと教えたし、

「それでいいさ。あいつは適当に遊んでおしまいだつてさ。お前以外にもいくらでもいたらしい」

「実態は知ってるよ。何度か見かけたから」

「だったら、あまり深入りするなよ」

「分かつてる。調子がいいだけの軽い男だつて分かつてるし」

「ふーん、そう言えば、何か、武道やってるのか？」

「さあ、聞くのを忘れてた」

「あいかわらずだなあ」

「そこまで興味ないから。あいつの占い師としての力量は知りたいし、参考にしたいだけだから」

「お前つて、意外とそう言つといふのはちやっかりしてるな」

「お姉ちゃんには負ける」

「結婚相手つて見つかりそうか？」

「無理、みたいだね」

「料理や家事を覚えるところからしたほうがいいかもな」

「お母さんと同じことを言つ」

「女性らしい雰囲気が出てくるかもしれないだろ。男は母親と同じような女性と結婚したがるって、親戚の人人が言つてた」

「うつそだー」

「俺も良く知らない。ただ、俺も母親のような優しい料理上手な女性のほうが好み」

「へえ、そなんだ? 意外」

「学園祭が終わったら付き合えよ」と言われてむせた。

「考えとく」

「そうしろ。あいつだけはやめておけよ。絶対に

「言われなくとも、そうする。ちょっと苦手だからね。見下すタイプのお友達と付き合つてるのが良く分からなくて」

「ふーん、あいつ、何考えてるんだろうな」と神宮寺が言ったので、やっぱりこっちが普通の感覚なんだろうなと改めて思つた。

インスピレーション1

秋になり、神宮寺と仲直りした後に、仕方なく東条さんと会つことにした。大学に連れて行かれて、

「あなたと歩くのは抵抗があるなあ」と言つたら、

「うれしいくせに」と笑つっていた。

「神宮寺が怒るからね」

「怒らせておけばいいだろ。恋人じゃないんだから」デートに誘わ
れても断つた理由を聞かれて、仕方なく神宮寺が怒つてゐるからと
説明をしたけれど、東条さんは今と同じことを電話でも言つていた。
「でも、悪くてね。神宮寺は友達だから」

「友達ねえ。お前はそう思つても、向こうが辛いかもな

「そう言われても」

「それより、雪人さんとはうまくいつたのか」と聞かれてにらんだ。

「当たりだな」

「あなたの占いって確かなの?」

「お客様は満足してくれる」

「当らないこともあるでしょ」

「おれは総合で判断してんしね」

「総合つて?」

「お前の性格も加えてある」

「勝手に加えないでよ」

「大事だろ。積極的な人と行動が中々起こせない人に掛ける言葉は
違つてくるからね」

「ふーん」

「お前は使い分けてないだろ。そのまま言つタイプだ。直感占いだ

な

「いいじゃない、それも大事でしょ」

「相手に合わせて言葉を選んでいかないとな。まだまだだね」

「ふん」と笑みを向いた。

インスピレーション2

「浅木さんから、色々と当日の内容を教えて貰って、一部見せてもらえない資料があつて、大丈夫かなと思つていたけれど、

「大丈夫だつて、なんとかなるつて」と言つてゐる声が聞こえた。割と大雑把に決めてあるみたいで、変更が多いらしくて、

「当日、色々と変わつてくるかもしないから、覚悟してね」と浅木さんに言われた。

「どうしてですか？」

「時間が押したりあまつたりするから、それにあわせてスケジュールを変更するのよ。企画によつて時間が取られたりするからね。バタバタするかもしれないけれど、臨機応変に対応していかないとね」

「そうですか？」

「人前で占うのは初めて？」

「小学校のときから、占いはやらされていましたけれど、それもクラス単位ぐらいですから」

「そう」

「大勢の前では無理かもしない。集中力が途切れると駄目だから」「集中力？」そばの人驚いていたけれど、

「そうね、当日はうるさくなるだろうから、その辺も覚悟してね」と言つられて、考へていた。浅木さんが色見本を私に合わせてくれて、衣装もそれなりにしたほうがいいと言つ意見があつてね。作つてもらうか買つてもらつか思案中よ」

「え、そなんですか？」

「ショーアップしたいみたいだし」ちょっと不安……。

「そんな顔をしないで、大丈夫よ。司会進行に従つてやつてもらうだけだから。ただ、東条君はそういうのに慣れているからいいけど、あなたはステージとか立つた経験は？」

「一人ではないです」

「そうよね。せいぜい学芸会ぐらいよね」

「浅木さんは主役をやれそうですね」それぐらい綺麗だった。

「私は背が高かったから、キリンよ」と言わされて啞然とした。

「綺麗なのに?」

「ありがとう。でも、真珠ちゃんみたいに背が低くめのほうがかわいいでしょ。男の人にとってはね」

「そうですか?」と驚いたけれど、笑つていただけだった。

インスピレーション③

打ち合わせが長引いて、東条さんが色々意見を言っていたので、飽きちゃつたこともあって、その辺をぶらついていた。制服だから目立つので何人かがチラチラと見ていたけれど、そのうち、一人の女性が近づいてきた。私の前に立つて、上から下まで見た後、見下す目で見て、

「尚穀って、趣味が悪くなつたわね」と言つたのでむつとなつて、「そうですか?」と言ひ返した。

「駄目ね。全然駄目。私と付き合つていたときよりはるかに落ちるわ」

「付き合つていた」と言つたらにらまれたけれど、相手にしたくなくて逃げよつとしたら、

「あいつが付き合つてる理由、知つてるの?」と聞かれて、「どういう意味ですか?」と聞いた。

「言つてたわよ。インスピレーションが沸かないから、そういう女性と付き合いたいって、私は綺麗だから付き合つたみたいね、あなたとは違うのよ」と反り返つて見下していた。うーん、こういうことを平氣であるから嫌われたんだろうなと想像がついた。

「でも、ふつてやつたのよ」どう考へても東条さんのほうが飽きただけだなと思つていたら、

「ふん」私の顔を見てふてくされていた。

「自分には占い師として何がが足りない。そこが足りたら完璧なのにと言つていたわ」すごい自信。

「イメージネーションはあるけれど、インスピレーションが足りない。だったら、それが強い女性と付き合いたいってそう言つていたわ。あなたがそうみたいね」インスピレーション? 「靈感が強いってこと?」

「ひらめきですってよ。あなた強いんでしょ。占いやつてるひらじこ

わね」強いかなあ？お母さんのほうが強い時が多く、私は他の占い師が強いかどうかはそこまで見抜けない。ただ、時々強いオーラと言つてかパワーを持つ人はいるので、そういうのは分かるし、波長が合うとか、そういうのは分かるかもしれないけれど……と考えていたら、

「ふーん、見込み違いなの？ そういう女性を探していたらしいわよ。何人かデートしてみたみたいだしね」

「そうですか？」

「だから、それが終わったら捨てられておしまいね」勝ち誇ったように言つていてのが却つて滑稽に見えた。だから、相手にしてもしようがないと思い、

「教えてくださいまして、ありがとうございました」と言つて逃げ出したら、

「絶対に振られるから。絶対に捨てられるわよ。絶対よ」何度も「絶対」と言つていて、そこまであいつに未練があるのか恨みがあるのか、私を巻き込まないでほしい……と思いながら足早に逃げ出した。

インスピレーション4

さつ めの出来事で何だか散歩するのも馬鹿らしくなり、床ひづとしたら、

「今度はどれぐらい、もつのやら」と言われて、そちらを見たら、この間の感じの悪い人たちがそばにいて、座っていた。

「かわいくない女」と聞こえるように言つた人もいたけれど、「どうか? 化粧したらそれなりにいけるかもよ」

「ないだろ」と勝手に言い合つていた。相当遊んでいそうだな。東条さんの類友だ。そこから逃げようとしたら、

「お前も直感女なんだろ?」と言われて、またか……と思つたけれど相手にしたくなくて行こうとしたら、

「インスピレーションを吸い取られて、ポイ」と小さい声が聞こえて、そつちを見たら嫌な顔で笑つていて、そこから走り出した。あいうのは苦手だ。好きになれない。それにちょっと気分が悪くなつた。波長が合わないからかもしれない。

東条さんに送つてもらつときには、さつき言われたことを確かめた。

「ああ、それね。そうだよ」簡単に肯定してくれた。

「付き合えばインスピレーションが増えるとでも言うの」

「そうなるかもしれないだる」

「そういうのって、強い人と付き合つより、自分で磨いていくものじゃないの?」

「修行しなつて?」

「そうよ」

「俺にはその方法は合わないね」と簡単に言つていて、

「私があなたの修行代わりの女なの?」

インスピレーション⑤

「別にいいだろ。俺と付き合えりし、トートもできるし、楽しいだら」

「楽しくない」

「おまけに占い師としても育ててもらえる。一石二鳥だろ」

「それはあなただけ。一鳥もいらぬ」

「ふーん、そうか？ 俺は楽しいけどね」

「あなたはそうかもしだいけど、あなたのインスピレーションのために利用されるのは嫌」

「いいだろ、別に」

「嫌です」

「わがままだなあ」

「どっちがよ。相手に好意を持つて付き合ひのなら分かるけれど、インスピレーションを補つためなんて、ふざけすぎでしょ」

「どこが？ 誰だって付き合ひなら、見返りを求めるだろ。お前は俺に育ててもらえる。俺はお前からインスピレーションを吸収できるかもしない」

「勝手よ。それはあなたはそういうことを望んでいるかもしないけれど、代償で育ててもらいたくない」

「持ちつ持たれつだろ」

「どこがよ。あなたはそれでいいかもしないけれど、付き合わされるほうはいい迷惑よ。だって、インスピレーションが弱くなったり、『はい、おしまい』で、終わりの関係でしょ」

「まあ、確かに、そういう子もいたけれど、真珠はその辺、未知数だから長く付き合えそうだ」

「そういう問題じゃない。あなたの道楽に振り回されるのはたくさんよ。親切で教えてくれているのかと思つたら、ライバルに育てるため。デートに誘つるのは女性として魅力があるわけじゃなくて、イ

ンスピレーションだけ。ふざけるにも程がある

「そうか、別に普通だろ。お前のどこにそれほど魅力があるんだよ。

女性として

「バチン」と音がするぐらいい東条さんの頬を叩いた。

「痛いだろ、何するんだよ」

「グーで殴つてやりたいぐらいよ。運転中じゃなければね

「お前、鏡を見ろよ、俺とどこがつりあうって言うんだよ。それぐらいしか取り得ないだろ」信号で止まつたので、こぶしで東条さんの腕を思いつきり殴つた。

「痛いだろ」と言つたけれど、車から降りた。そこから、歩道まで歩いていたら、東条さんが運転席から降りていって、

「おい」と声をかけてきたけれど、歩道まで行つてから走り出した。

「あいつ」東条さんは信号が変わるかもしれないんで、車に乗り込んで、

「何を怒つてるんだか」と呆れていた。

ため息1

東条さんが後で電話を掛けたけれど、「学園祭には出ません。お一人でどうぞ」と言つたあとは、電話を拒否しておいた。そのために、家にまで来て、母が追い返してくれた。そのあと、電話がかかってきて、「しつこいね、あなた」と言つた。

「話をしてからだ」

「したくない」

「学園祭に出ないってどうこうことだよ」

「失礼な男と一緒に出たくないだけ」

「今更言つなよ。動いているんだぞ」

「変更もこゝりもあるんでしょう。だったら、出演を取り消してよ。

無理

「わがままを言つな」

「どつちがわがままで。失礼な男。魅力のある女性を捕まえて、そ
の人がどつぞ」

「お前、根に持つてゐるな」

「あそこまで言われて黙つていられない。あなたとは一度と会わな
い」と言つて電話を切つた。また、かけてきたけれど、ほつといた。

また、家にまで東条さんが來たら嫌だなと思つていたら、下校途中で東条さんから電話があり、仕方なく出た。

「話をしたいんだ」

「あなたの道楽には付き合えません。他の綺麗な女性と一緒にどつ
ぞ。プロキオンの女性なら誰でもいけるでしょ。綺麗なんだからね

「お前で宣伝してあるのに、今更、変更したらおかしくなるだろ」

「大丈夫でしょ。綺麗な女性なら男性が喜ぶ」

「女子高生占い師だからいいんだろ」

「呆れる人だね。絶対に出ません。家に来たら、車に塩を山盛りかけてやる」

「お前なあ。車に傷がついたらどうするんだよ」

「人のことを傷つけておいて、そんなことは言わないでよ」と怒鳴つた。

「え？」東条さんがさすがに黙っていた。

「せつかく、いいところもあるって見直したこともあつたけれど、あなたはやっぱり見かけどおりの薄っぺらい男よ。男として魅力なんて全然ないわ。人のことを平氣で傷つけるろくでなしよ。たとえ、条件がそろつっていたとしても私は選ばない。雪人さんのことをとやかく言えないわよ。相手のことなんてこれっぽちも考えてないわ。だから、女性だつてすぐに離れていくのよ」

「それは、……違う」東条さんの声が小さかつた。

「そうでしょ。誰かあなたと会えなくなつた後に、あなたとまた付き合いたいと言つてきたことがあるの？」

「何度かしつこくされたけれど」

「それはあなたの表面だけ見てるからでしょ。お金目当て、顔がいい男目当ての人以外でいるの？」と聞いたら黙つてしまつた。

「母が言ったことが今なら分かる。あなたとは関わつてはいけないつて」

「昔、親父に捨てられたから怒つてるだけだろ」

「いいえ、違うと思う」

「何で、そういう切れる？」

「あなたを見ていたら父親に会わなくとも分かるわよ。そつくりなんでしょう。とにかく、絶対に出ないからね、一度と電話を掛けっこないで。あなたになんて会いたくもない。わよいなうら」と言つて電話を切つた。

「え、さようなら?」東条さんがそう言つて居るのは切れた後などで聞こえなかつた。

ため息2

ため息をついている東条さんを見て、浅木さんが近づいて隣に座つた。

「元気がないわね」

「ちょっとあつてね」

「あら、珍しい。『君がデートしてくれたら、治るよ』って言わないのね」

「言えなくなつた」

「そう。それより、大丈夫なの？」

「なにが？」

「占いよ。プロキオンの女性に変更するのは、私も反対よ。プロの占い師より真珠ちゃんのほうがいいと思うわ」

「あいつらが反対なのは女子高生じゃないからだろ。美人を連れてきたんだからいいじゃないか」

「でも、乗り気だったのは原西君だけね」浅木さんが笑つた。

「あいつは年上だろうと女に見境がないからな」

「人のことは言えないでしょ。何かあつたの？ 真珠ちゃんと喧嘩でもした？」

「怒らせた」

「そう」

「初めてだよ。そこまで怒られたの」

「あなたは上手にあしらつてきただけよ。裏では怒っていた人も大勢いるかもしれないわね」

「そんなはずはない」

「真珠ちゃんは素直に反応が出る子だからね。怒っていても、尚毅には伝えない人もいたでしょうね」浅木さんが前も向いたまま言って、

「お前も怒つてたのか？」東条さんが軽く聞いていた。

「ため息ついてる尚毅なんて、初めて見たわ」「占いができないからな」

「あら、大変じゃない？」

「それでも予約が入つていいからやつてるけど、本当はやめたいぐらいいだ。どうしても気が乗らなくて」

「そう。珍しいわね。あなたは落ち込むことなんて、ほとんど見たことがないわ」

「俺もそう思つてたよ。あるときから、やめたから」

「あるとき？」浅木さんが聞き返した。

「俺もやめようかな」

「あら、なにを？」

「学園祭。俺も占えそつもないよ。の人とやつても、何だかやる気が出なくて」

「あら、美人が好きだつたんじやないの？」

「ライバルじやないからだろうな」

「それだけ？」浅木さんが東条さんを見たけれど、東条さんはため息についていた。

ため息3

「なんだか、変なんだよ」東条さんの友達の若田さんは本を読んでいて、東条さんをチラシと見ただけだった。

「なんだか、おかしいんだ

「どうかしたの？」

「耳鳴りが聞こえる」

「耳鼻科に行つてきたら？」

「そうじゃない。あの言葉が耳に残つていて」

「それは耳じやなくて頭に残つてるんだわ！」

「あいつに言われたことが聞こえる」

「あいつって？」

「真珠」

「ああ、占い師のお嬢さんだつたつけ？」

「おかしいんだ。何度も聞こえるんだよ」

「それは重症だね」

「それに、何だか、じーじーの辺りが」と、東条さんが胸の辺りに手を置いていて、

「ふーん、胸焼け？」と聞かれて、

「そうじゃなくて、酒じやなくて、気分が何だか落ち着かないんだよ」

「珍しいな。お前はいつも明るく気にしない性質だったのに」

「分からぬ。何だか、この辺りに空洞があつて」と手で円を作つて見せていた。

「空洞？」若田さんが聞き返した。

「おかしい、どうしたんだわ！」俺」と東条さんが言つたら、若田さんが笑つた。

「笑い事じやないよ。こんなこと今までなかつたのに」

「誰でも一度は経験する」とと思つた。

「誰でも？」

「そう。でも、珍しいね。尚毅はとつぐの昔に経験していたと思つたよ。あれだけ女の子と付き合つてきたのにね」

「どういう意味だよ？ 大体、俺はその辺のやつらが経験したと思えることはしてきてる。そんなことは言つなよ」

「自信満々だね」と若田さんが笑つた。

「でも、そうだね。多分、付き合つ粗手が変わってきたから、分かるようになつたかも知れないね」

「どういう意味だ？」

「そこにあるのが何なのか、尚毅なら分かると思うけど、あれだけ占いをしてきたんだし」

「見えないんだ。自分のことなのに占いもできない。どこか空虚で乾いた感覚が残つて、相手の立場になつて占えなくなつてる」

「重症だな。でも、それに効く薬はたつた一つしかないよ」

「薬？」

「そりゃ、彼女に会つてくれればいいんだよ」若田さんが笑つたら、東条さんが、

「もう、会つてくれそつもないよ」と寂しそうに言つた。

「自分でも分かつてゐるはずだよ。その当ではまるパズルのピースはたつた一つしかないんだよ。彼女しかね」若田さんに言われて、東条さんが考へるようにして、

ため息4

東条さんが学校に来てしまい、先生が近くにいたために、仕方なく、東条さんのところに行つた。

「来てくれたんだな」

「行こう。ここだと人目があるから」と言つたら、「そうだな」と言つた顔がかなり元気がなかつた。「どうかしたの？ 自信満々だった人が変だね」「占いができるない」と言つたので、噴出した。

「ありえないでしょ」

「声が聞こえてくるから」

「声つて？」

「『さよなら』つて」

「誰が言つたの？」

「お前」と言つられて考へてしまつた。この人は今まで、そういう言葉を言われたことがないのかもしない。

「あなたって、自信満々の塊みたいな人だと思つてたけれど、意外と打たれ弱かつたね」

「お前にだけは言われたくない」

「こつちも同じよ」とそっぽを向いた。

ケーキセットを奢つてもらいながら、カフェの個室で話をしていた。ここのかフェは区切りがいっぱいあって、個室が多くなっている。

「謝るよ」何度もかのその言葉を、しらけた顔で見たり、

「冷たい目線で見るなよ」

「魅力がないもので」

「完全に根に持つてるだろ」

「当たり前でしょ。好みじゃないとか言われるなら分かるけど、魅

力がないって聞き捨てならない。たとえ思つていても口に出さなくてもいいでしょ。こつちだつて思つてもそこまで言わないわよ。

「ごめん」珍しく素直に謝つてきた。

「どうかしたの？ 自信満々の服はどこかに脱いできた？」

「俺、無神経だつたかもしれないな」

「今更、言わないでしょ」

「浅木に怒られた」

「なんて？」

「気づいてないだけだつてさ。俺には何も言わずにそばから離れる人も多いつて言つてた。はつきり嫌いな部分を言葉に出してから別れるよりは、そつとしておきたい人もいるから、気づいてないだけらしい」

「浅木さんもそう思つてたんじゃない」

「希恵はそういうところで、言わない女だから」

「呼び捨てにしてるんだ？」

「時々ね。ただ、返事してくれない時があるけど」

「だつたら、嫌なんだろうね。未練もなさそつね。他に好きな人がいるだろうし」

「噂を聞かないぞ」

「大学の人には内緒にしてるだけでしょ。社会人かも知れないね。大人っぽい人だし、美人だから、誰かいるに決まつてるでしょ。あなたとだけ付き合つたとは、とても思えないからね」

「失礼だな」

「人には散々言つておいて、自分が言われると怒るの？」

「そうだつたな。悪かつた。謝るよ」

「ふーん」

「けんかしたままは嫌だし、お前がそばにいないと落ち着かないし」

「怒らせておいて、それは無理でしょ。そばになんていたくない」

「無理だつたんだよ」

「なにが？」

「占いのリハーサルをした」

「ふーん、それで？ さぞかしできたんでしょう？」

「逆だよ。俺ができなかつた」

「なんで？」

「占えなかつた。どうしても」

「どうしてよ？」

「何だか気が乗らなくて、途中でやめた。相手の女性には謝つたけれど」

「相手は怒つたでしょ。せつかくリハーサルしてゐるのにプロだつたら占えつて怒りそう。田頃、自信満々で言いたいことを言つてるのにね」

「親父の子供だから、表立つて言つわけないだろ。参加するのは楽しそうだとは言つていたけれど、俺がどうしても駄目だ。彼女とは波長が合わない」と言つたので驚いた。

「波長？」

「駄目なんだよ、どうしても」

「綺麗な人なんですよ」

「学園祭向けにお祭り好きの派手好きのプロキオンの女性占い師に頼んだけれど、何だか駄目だよ。シヨー向きだとは思つ。でも、俺と相性が合わない」

「じゃあ、他の人に頼めば」

「無理だよ。他の人でも駄目だと思つ。それは分かるから」「何が分かるの？」

「お前じゃないと無理だと分かつてるからだよ」と言い切られて、さすがに恥ずかしくなつた。声が大きかつたので、

「別れ話のもつれみたいだよ」という声が聞こえて、そっちをみたら、学生らしい女の子がこここの個室を覗いていて、私と田が合つて

から、慌てて逃げていった。

「別れ話にされちゃつてるね」

「いいだろ。本当のことだ」

「どこがよ

「お前に振られてから元気がなくなつたし」

「あなたが？」

「この辺に、穴が開いているような気がして」と胸の辺りを指差して、飲んでいた紅茶を噴出しそうになつた。

「考えておいてくれよ」家まで送つてもらつてから、改めて学園祭に出るかどうかを聞かれて、返事ができなくて、

「お前と一緒にいると楽しかったよ。お前に出合えてうれしかった。それだけは本当だ」東条さんが珍しく真面目な顔をして言つたけれど、辛くて顔を背けた。

「「めん」謝つてくれたけれど、頭を下げて、車を降りた。

浅木さんの話1

「あれ、誰だらうな？ 声をかけて来ようか？」と男子が言い合っているそばを通り過ぎながら、校門に行つたら、「真珠ちゃん」と呼ばれてそちらを見た。

「知ってる人？」友達に聞かれたけれど、「ごめん」と言って浅木さんのそばに行つた。

「元気そうね」

「なんですか？」

「ちょっと、頼みがあつて」

「学園祭のことなら」と言いかけたら、「東条君のこともね」と微笑んでいて、「私は、彼のそばにいたくないから」

「そう？ 仲は良かつたでしきう？」

「いえ、全然」と言い合つてたら、男子が寄つてきた。

「おい、紹介しろよ」と言われてにらんだ。

「美人と知り合いなんて、教えておけよ」男子があつといつ間にそばを取り囲んで浅木さんに質問していた。学校名、名前、携帯番号まで聞き出そうとしていて、

「呆れるなあ」と言つたけれど、男子は全然聞いてもいなくて、

「月野に御用ですか？」

「占いしかできない女ですけれど」と言い合つていて、

「占いを頼みたいと思つてね。学園祭で頼んでいたのに断られてしまつて」浅木さんが教えていて、言わなくともいいことを、それを言つたらきつと……、

「それはいけない。月野、わがままだぞ」

「そうだ、美人の頼みを断るなんて、生意氣だな」

「お仕置きしてやりますから」案の定、勝手なことを男子が言い合つていて、どう見ても、美人の前でいい格好をしたいだけの発言と

しか思えなかつた。

「出る」と男子が命令してきて、そのうち、何人かが集まつてきて、「でーる、でーる」と「出る」コールをやりだして、うつとうしくなつて、

「はいはい、分かりました」と答えたら拍手に変わつていて。お祭り好きなんだから……とにらんだけれど、勝手に盛り上がりついて、こちらの様子には気づいていなかつた。

学校の近くの「コーヒー専門店」に入つてから、

「楽しそうな学校ね」と言われてしまい、

「クラスによつて違います。あいつら、行事で異様に張り切るんですよ。テストでは張り切れません」

「そんなんだ」と浅木さんが笑つていて、

「東条さんどうして付き合つたんですか？ 浅木さんみたいに綺麗で聰明な人が付き合つとは思えなくて」と言つたら、ちょっと微笑んでいた。

「ごめんなさい。プライベートなことなのに」

「いいのよ。何人かに同じことを聞かれたからね。私もちょっと色々あつた時期だつたし、入学当初で彼の性格も良く分かつてなかつたの。愛想が良くて、女子学生にも人気があつたからね」

「見た目はいいですからね」

「でも、彼とはすぐに付き合いをやめたの」

「そうでしょうね。浅木さんはもつたいないです」

「違うわ。性格が合わないと気づいたのもあるけれど、私が駄目だつたの」

「どうして？」

「そうね、色々理由はあると思う。私は彼氏と別れたばかりで、寂しかつたのもあつたから気分転換のつもりで付き合つてしまつたのね。東条君は明るくて優しい人だつたから」

「美人以外には冷たいですよ？」

「そう？ 真珠ちゃんとは違つて見えたけれど

「どこがですか？ 散々、女性をもてあそんできて、私は子ビも扱いなだけですよ」

「今まで、何度も学校には連れてきていたし、目撃されていた女性はいたけれど、でもね、違つてたわよ」

「どうが？」

「相手と言い合はしてなかつたから」

「喧嘩してゐだけです」

「彼の場合は女性にそこまでのめり込まないとどうがある。軽い付き合いで止めておくの。けんかも、もちろんしない。将来お客様になるかもしれないから、怒らせる」とはしたくないと、言つていたのを聞いたことがあるわ」

「同業者の娘だから関係ないでしょ」

「きっと、初めてだつたのよ。本氣でけんかしたのは」

「見下す発言ばかりするからですよ」

「でも、ため息ばかりついていたわよ」と言われて、驚いた。

「元気がなくなつて、みんなが心配していたの。突然、真珠ちゃんからプロキオンの占い師に変更を申し出て、ほぼ全員が反対した。真珠ちゃんのほうがいいからと」

「プロの女性のほうがいいじゃないですか」

「あら、学園祭だもの。その辺は手作り感が出たほうが面白いですよ。出来上がったプロの女性より女子高生のほうがかわいいし」

「そういうことを言われても」

「でも、尚毅は様子が変だつた。落ち込んでいて、ため息ばかり。挙句がリハーサルのときに突然、『やめる』と言い出して、みんなが驚いたけれど、あの尚毅が、『どうしてもできない』と、頭を下げていたわ」

「そう言われても」

「あなたのことが頭から離れない限り無理でしちゃうね」「どういう意味ですか？」

「尚毅は恋をしてるのよ」と言われて、飲もうとして取り上げた力ップを慌てておいた。「ほしそうだったからだ。

「あの男が恋？」『自分に』じゃないですか？』あいつは『自分が一番、自分大好き』タイプだから、他の女性を自分以上に好きになれるとは思えなくて、つい、そう言つてしまつた。

「確かにナルシスト気味だとは思うけれど、尚毅は本氣で誰とも付き合つたことがないかもしれないわね。どこか冷めていると言つた、本気になれないというか」

「知りませんよ。女性と楽しそうに一緒にいるのしか見てないし」

「短期ばかりよ。それほど長くないみたいね。相手が本気になる前で止めているのかも」

「インスピレーションが減つたから」

「ああ、それは言つていたみたいね。そういう女性を探していくと」

「失礼ですよね」

「そう? それはあると思うわよ。セーハの部分に惹かれるのは占い師だから、気になるのは当然でしょうね」

「そうですか? 見た目とか性格が一の次なんて、ひどすぎるでしょ?」

「違うと思うわ。そういうのが合わない人はある程度でやめておくみたいだし。真珠ちゃんとは長く続くだらうなと思つていたから」「遊びの女性と同じにされたくないし」

「あなたには本気だと思うけれど」

「インスピレーションだけと言うのは、困ります」

「そうね。確かにそれだけならちょっと面白くないかも知れないわね。ただ、それ以外の部分でも惹かれているのよ。自分でも気づいてなかつたんでしょうね」

「惹かれていませんよ」

「ため息をついたことのない人が、ああいう顔をするって言つのは、そういうことだと思うけれど」

「そう言われても」

「尚毅は不器用なのかもしないわね」

「器用に遊んでいるじゃないですか。多くの女性とデートして」

「デートの数は多いかもしない。でも、本気になつて付き合ったいと思ったことは一度もないのかもね。私のときも後腐れなかつたみたいだし」

「そうですか? プライドが邪魔をして追いかけられなかつただけでしょ?」

「プライドが崩れてきているのかもね」と言われて、学校に何度も来ていたあいつを思い出した。

「怒っているかもしねいけれど、もう一度考え直してもらえないかしら。せめて、学園祭は楽しいものにしたいから。このままだと企画が壊れるわ。お守りも売れなくなると困るしね」

「それがありましたね」

「だから、お願ひ」と頭を下げられて、私もため息をついた。

浅木さんの話4

しばらく考えた後に、東条さんに電話をした。学園祭に出店の「」とを渋々告げたら、

「ありがとう」と素直に言つてくれて、「珍しいね」と思わず言つてしまつた。

「お前が出てくれることがうれしいから」

「自分の引き立て役として『』からでしょ、プロが相手だと自分が目立たないし」

「いや、きっとお前と一緒にじゃないと輝けないよ」と訳の分からないうことを言つていた。

「やつぱり出るのは嫌かもしれないな」と怜奈ちゃんに『』やいたら、「約束は守らないとね。それで宣伝をしているのなら、楽しみにしている人もいるかもしれないよ。それに、変更があるとしらけるからね。真珠の評判が悪くなつても困るでしょ。嫌でも出ておいたほうが今後のためよ」と言い切られてしまった。

「しつかりしててるね」

「お店のこともあるでしょ? お母さんにも迷惑を掛けるよ。だから、手を抜かないでしつかりやらな」と。そこは『』、占いは占いでね。一緒に出る人が嫌いだからって、手を抜いたら、お客様が嫌がるよ。お客様が喜んでくれればいいじゃない

「今までだつたら、そりやつて割り切れるけれど、あいつに利用された後だと、抵抗が」

「実際にそういう人にだまされたりする子だつて多いと思つけど、夏休みに出会つた人にだまされた子もいるみたいだしね。名前も性格も知らないうちはそこまで気を許しちゃ駄目だけどね」「気を許したわけじゃないけど、いつの間にか入り込んでくるんだよね、あの人」

「だつたら、あの人も同じかもね。何度も真珠に会いに来るぐらいなら、熱心ではあると思うけど。いいじやない、仕事上の付き合いだと割り切れば。お店に見習い占い師としてデビューしている以上は責任が出てくるから、好き嫌いは言つてられないでしょ」

「怜奈ちゃん、しつかりしてゐ。怜奈ちゃんみたいな子なら、芸能界でも通用しそうだね」

「無理だよ。私、ああいつのは苦手。媚売るのは下手だし、自分を売り込むなんてできそうもないし、ミーハーなどころもないしね」
怜奈ちゃんは大人っぽいところがあるから、付き合ひの年上が多い。

「経験積まないと無理かなあ？ 恋愛相談はどうしても苦手」

「今まであつたでしょ？」

「部活でのごたごたとか、親とけんかしたとか、友達と仲直りした
いつて言うのは多かつたけれど、復縁とか、二股とか、そういうのがいまいち駄目」

「神宮寺と一回デートしただけでは難しいかもね。東条さんはどう
だつた？」

「男として見られないし」

「そう？ いい人じやない。結構親切だとは思うよ」

「だつて、それはライバルを育てて、自分のために」

「それもあるかもしれないけれど、わざわざテレビ局に行つたり、
自分の占いを見せたり、アドバイスしてくれたり、そこまで親切に
したのは、多分、違う理由だと思う。打算だけなら、アドバイス程
度で止めるでしょ。真珠が反対にライバルになりそうな子に、そこ
まで教えられる？」と聞かれて考えていた。私はライバルになりそ
うな子で、相手が嫌がらせなどせずに正々堂々と戦うタイプで好敵
手になりそうな子なら教えるかもしれないなと思つた。でも、相手
が嫌がらせをして足を引っ張つたり、見下したりするような好きにな
れない子は教えないかもしれないなと思つた。

「相手が好きじやなければ無理かも」

「でしょ。だから、東条さんも打算だけじゃないと思つ。口に出して言つている部分だけ見たつて、その人の全部なんて分からぬよ。いいところもあるけど、悪いところもあるだろ？し、トータルで考えて好きになれるかどうかで判断したら」

「欠点も飲み込める人なら許せつてこと？」

「誰でもいくつか未熟な部分、どうしようもない部分つてあるでしょ。完璧な人なんていないし」

「雪人は完璧だよ」

「それはまだ、相手を知らないだけでしょ。意外とどうしようもない部分が見えるかもよ」なさそつだな。頭は良くて、感情をそのまま表に出さないだけで、とても優しい人に見える。私の顔色を見ながら、

「駄目だね。のぼせ上がつてゐる。相手が好きだから、見えてないだけかもよ」と怜奈ちゃんが呆れついて、

「でも、全部素敵だよ」

「真珠、東条さんで懲りたでしょ。全てが見えてから、それでも好きだと思つなら本物かもね」

「そう言われても」

「データに誘えばいいじゃない」

「学園祭が終わつたらそつする」

「そういうことを言つてゐるうちに時間が過ぎるよ」と笑われてしまつた。

東条さんに呼び出されて、一緒に学校に行つた。打ち合わせも大詰めで、怒鳴りあつてゐる人たちもいたけれど、私は衣装合わせをされていた。浅木さんがメイクの色を決めていて、「照明もあるから、色はこっちのほうが良さそうね」「こっちのほうが合わないか?」

「髪は短いほうがかわいいでしょ」

「ロングヘアーのほうが神秘的だる」勝手に色々と合わせてくれる。髪もカットはせずに、かつらがいくつか用意してあって、

「安物だから、衣装と合わないかな?」と女性が浅木さんに聞いていた。衣装は結局、用意してくれるもの着ることになった。黒い物にレースがついていて、大人っぽいものだったけれど、スカートの丈を短くしようと言い出して、

「それ、着るんですか?」と思わず聞いてしまった。

「あら、かわいいと思うわ。若い女の子の感じを出すにはそのほうがいいわね。衣装をあてた後に、かつらは、色がついたものを合わせていただけれど、

「茶色と金髪とどっちがいいかな?」

「金髪だとコスプレっぽいから、茶髪にしておけよ」

「衣装が黒めだから、髪は明るめにしておきましょう」と浅木さんが言つて、メイクを行うために、移動した。

「落ち着かないでしょ。毎年、これなのよ」

「大変ですね。うちちは予算も限られているし、盛り上がらないクラスだと、時間も掛からなくて」

「そう? うちはそれなりにがんばるわよ。楽しんでもらいたいからね」浅木さんがメイクの仕上げにつけまつげまでつけて、アイシャドウも濃いめにつけているみたいで、

「ちょっと、濃くないですか?」と驚いた。

「舞台に上がるから、これぐらいじゃなこと田が開いてないよ！」
見えるからね

「でも」

「大丈夫よ。お祭りだから、浮かないわよ」
「東条さんもやるんですか？」
「彼はタキシードぐらいでしょ？」「
タキシード？ 口い師なのに？」

「シルクハットとタキシードに決まっていたわよ」

「鳩を出しそう」

「それも提案で出ていたわね」

「派手好きだなあ」

「知り合いのマジシャンに衣装を借りたみたいよ。この辺の衣装もほとんどがその人から借りられたからね。彼を加えるのはそういう理由だし」

「そういう理由?」

「彼はつてをいっぱい持っているからよ。それで頼まれることも多いわ。それだけつながりがいっぱいあるからね」

「そうですか?」

「真珠ちゃんは顔が小さいから、かわいく仕上げないと
かわいくは無理です。友達が化粧しなくともかわいくて、声をかけられてばかりいるけれど、私は声を掛けられた事がない」

「声を掛けやすいかわいさとは違うかもね。真珠ちゃんはもつと神秘的な感じがするわ。目が印象的だから。軽い男性は声はかけないかもね」

「声の掛けやすさって重要ですか?」

「そういう男性が好きならいいでしょ?けれど、そうじゃないでしょ?」

「浅木さんはいっぱい声を掛けられるでしょ?」と言つたら、近くにいた人が笑つた。

「浅木ちゃんは男性が気軽に声なんて掛けられないよ。誰か恋人がいるだろ?と思つて躊躇するタイプ」と教えてくれて、浅木さんを見た。確かに、軽い男が気軽に声を掛けられるような人じゃないかも。

「真珠ちゃんは、きっと眞面目な人が好きでしょう? だったら、

軽く声を掛けられなくてもいいと思うわよ

「そうですね」確かにそれはそうだ。雪人さんが気軽に女性に声をかける姿なんて想像もできない。

「へえ、かわいい」そばに女性が来て覗き込んできて、「化粧栄えするね。顔が小さいし、目が印象的だから、化粧をするところが更に際立つ感じだね。大人になつたら、化粧したほうがいいよ、かわいいから」そうかなあ？　お母さんはそうだけど、私はそうじやない気がするなあ……と考えていたら、

「おーい、できたか？」と聞かれて、

「OKよ」浅木さんがマイクを終えた。衣装を持ってきてくれて、着替えるために別室に移動して、ふわふわカールの茶髪のかつらもつけていた。鏡がなかつたので、様子が分からなくて、途中で鏡のある場所に移動してから、驚いた。

「えー！」自分で思わず声が出た。確かに、別人だ。化粧なんてしたことはないから、かなり驚いた。

「かわいいわね」そばにいた人が何人かに声を掛けられて、素直にうれしくなった。結構、いけるかも。

「どうだ？　できたか？」清水さんが見に来て、

「お、すご、さすが、姫」と言っていた。

「尚毅、お前の彼女、かわいくなつたぞ」何人かが見に来てくれて、そう言い出して、「彼女じゃない」と訂正したかつたけれど、それより鏡を何度も確かめてしまった。魔法が解けたらどうしようと、思つてしまつぐらいうれしかつた。

「ん？ 今、行くよ」と東条さんの声が聞こえた。

「あつちに移動して」と促されて、このまま鏡を見ていたかつたけれど、移動した。

「この辺に立つて」と言われて、机と椅子があるといろから少し離れたところで待機させられたら、誰かがそばに来た。

「衣装が小さかつた。足の長さが足りないんだよ」と東条さんが隣で言つて、

「足が短いの？」と聞いたり、

「馬鹿、反対だよ。俺の足が長くて」と言つた後に私を見て、驚いた顔をして、じつと見てきた。

「え、変？」

「いや、すげく……綺麗だ」と言つたので、

「この間と言つていふことが逆でしょ」とこちらんだ。

「せつかく、綺麗に仕上げてもらつて態度も変えろよ。中身は同じじゃないか」

「あなたも言葉使いを変えてよ。少しおとなしくなつたと思つたら、もう復活してるじゃない」

「かわいいのは顔だけなのか？ でも、綺麗だ」としみじみと言つていた。

「はいはい、今更言われても、魅力がないもので」

「この間のは悪かつたよ。綺麗だよ」と耳元で小声で言われて、「今更、言われてもうれしくないし」と言いながら、ちょつとうれしかつた。たつまで、気まづくて、うまく話せなかつたけれど、

衣装に着替えてからは、また、何度も言い合いになった。立ち位置や移動方法とかを話し合つて、公開占いなので、マイクを使って、どういう風に説明するかも、東条さんが提案していただけれど、私も何度か口を挟んだ。

「それだと面白くないだろ」

「見世物にしても限度があるの」

「あいかわらずだな、前途多難だよな。また、喧嘩するなよ」と注意を受けたけれど、椅子に座つて、実際にやってみて、それでいくつか注意を受けた。お店でやるのとは勝手が違うので、戸惑つたけれど、

「実際に、一人で練習しておいて」と清水さんが別の場所の確認に移動してしまった。

「実際と言われても、誰か実験台」と東条さんが頼んでいて、

「ハーサイ、お願ひ」と調子がよさそうな女子学生がすぐに手を挙げて、目の前の椅子に座つたけれど、

「ここには労働者だろ。マイクを仕上げた姫でいいよ」と言わされて、何人かがうなづいていて、

「えー、占つてもらいたいの。この間、素敵なお人を見つけて」と女人がぼやいていたけれど、浅木さんのために場所をどかされました。浅木さんが笑いながら、椅子に座らされていて、

「美人だからってひいきしそぎ」とさつきの女性がぼやいたら、

「お前、尚毅に何度も、タダで占つてもらつたんだよ」と男子学生に言われたら、途端に逃げ出していた。

「あいつ、あればつか」「だから、嫌だよなあ」と男子学生が言い合つていて、色々複雑そうと思ひながら、浅木さんを見た。「どうぞ」浅木さんが言つて、東条さんが先に立つた。浅木さんの仕事や恋愛について、

「そうだな、しっかりしてからそれなりにやつていけるな……、あ、でも、男運が良くないな。これが足を引っ張つてゐる」東条さんが色々と説明していく。

「当つているような気もするわね」浅木さんが東条さんと、どう説明したらいいかを一人で話し合つていて、私の番になつた。

「そうですね、あ、色々あるかも。仕事の方はそれなりにやつていけると思います。上回と時間をかけて話し合えば、うまくいくと思ひます。恋愛は、えつと、あ」と言つてから、浅木さんを見た、「なにかしら?」優しく聞かれて、

「何度か浮氣をされたことは」と言つたら驚いていた。

「ごめんなさい」

「いえ、いいのよ。さすがね」と言われてしまい、

「多分、そういうことが続くと思います」そう言つたら、浅木さんが考えるような顔をした。

「かなり悩むと思います、結論は先延ばしあしても同じ結果になるでしょう。とにかく区切りをつけなこと」

「そり……、そうなのね」

「お前、それだと暗い」東条さんに怒られた。

「そういう部分は人前でやるんだから、正直に言うな」

「いいのよ、今は練習ですものね。ただ、確かにそれだと会場はしらけてしまうわ。たとえ、当つていたとしても、会場の雰囲気を考えて言葉を変えてもうらえるかな?」と浅木さんに言われて、言い方を変えた。

「過去は男性に振り回されてしまつたことがある、現在も迷いがあるでいいですか？」

「そうね」

「未来は」と言つてから迷つた。「悩んだとしても前向きな結論を出しましょう。で、いいでしょつか？」と聞いた。

「そうね、そのほうがいいかもしないわね」と浅木さんがうなづいた。

「それじゃあ、お前は怒られるだらうな。お前、何度も絶対に怒られたはずだ。直接じゃなくて、裏で」と言われて東条さんをにらんだ。

「当たりだ。お前も無神經だな。人前で浮氣されたとか間違つても言つなよ」

「『めん、いつもと同じ要領で言ひちゃつたから』

「人が大勢いるんだから、相手の面子をつぶすようなことだけは絶対に言うな。それから、結論は前向きに明るいものに変える。言葉の選び方でできるだけ優しくやわらかいものにえろ」東条さんに命令されて、

「ごめん、でも、命令口調はやめてよ」

「お前が未熟すぎるんだよ」と言い合つていたら、

「一人ともそれぐらいで」と浅木さんに止められたけれど、なぜか浮かない顔をしていた。

ジュースが用意されていて、

「どうぞ、疲れたでしょ」と女人に言われて、そちらのテーブルに移動した。衣装を脱いでかつらをはずしたけれど、化粧を落とすのはもつたいなくて、

「家でお母さんに見せる」と言つたら笑われてしまった。テーブルに着いて、置いてあつたジュースを飲んで、疲れもあったのか、なぜかいい気分になつて、

「これ、おいしい」とそこにあつたジュースを飲み干した。

誰かが抱きかかえて運んでくれているとき、田を覚まして、「あれ？」と言つていたら、「もう少し寝ていろ」と優しい声がした。「ありがと」と言つてまた、寝てしまった。

「いい気分」

「お前はそだらうけど、俺は重い」東條さんが言つてゐるのを気づかなかつた。

車に着いて、東條さんがシートに運んでくれて、「重かつた」と言われても、気づかずに、「痛い」と言つたら、

「運んでやつて、文句を言つな」と小言を言われても気づかずに、「うーん」と言つて、うとうとしていた。

「少し飲んでもジュークと間違えて飲み干すところが、子供だな、お前」と言われても、寝ていて、

「せっかくかわいい顔になつても、中身はやっぱり子供だよな」と言しながら運転席に座つて、車をスタートさせてから、

「お前、お母さんに似てるよな」東條さんが独り言を言つた。しばらくラジオが小さく掛かった状態で運転を続けていて、

「お父さん、……帰つてきて」と寝言を言つたら、東條さんがこちらを見た。

「「めんね、お父さん」

「お前……」

「あれ、こり?」と聞いた。田を覚まして、知らない場所にいたので、何が起こつたんだろうと思いながら、

「俺の家だよ」と東條さんに言われて辺りを見回した。

「げ、敵の本拠地」

「すうい言い方だな」

「か、帰る。襲われたら困る」

「襲うかよ。本命にはしない」

「意味不明」

「さすがに本命には簡単にしないよ、俺は」

「ふーん、今まで散々遊んできたから、無理でしょ」「説明しただろ、それより、お前」と私を見つめて、「なに?」と聞いた。

「お前のち」と言いかけてから、

「お酒は抜けたのか?」と聞かれ、

「お酒?」と驚いた。

「お前の飲んだのはジュースじゃなくて、お酒が入ったジュース。しかも女子学生に飲ませていたずらしそうとしたやつらが用意したものを見違つて飲んだんだよ」

「呆れる。何で、そんな変なことをしてるのは?」(*未成年は間違つても飲まないでね)

「そういうやつらもいるよ。一部だけ悪乗りしすぎる連中もいるぞ。自分たちもお酒をかなり飲んだ後にやつたみたいだよ。お酒に入る理性がぶつ飛ぶから。後で清水がすごく怒つてた。でも、懲りていなければ。あれはまたやるな」

「はあ」と息を吐いて確かめた。

「お酒臭いかも。どうしよう、親に怒られちゃう」

「厳しいんだな」

「未成年なら当たり前」

「そう思つてこいつに連れてきた。さすがにそのまま帰すわけに行かないからな」

「困つた。どうしよう。連絡しないこと

「連絡しておいた。さすがに高校生が遅くなるといふのをこと困るからな」

「あなたのことは毛嫌いしてるから、怒らなかつた?」

「怒つてたよ。親父と区別してくれたらいいのに。元カノだというのに。いい加減忘れたらいいのにな」

「それって、決定？」

「お前もそう思ってるだろ」と聞かれて黙つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2027j/>

Fortune-teller

2011年11月29日19時54分発行